

熊本県立装飾古墳館
研 究 紀 要
第 6 集

序文

【総説】

- 学校教育、体験学習、古墳館 1
－古墳館を利用した体験学習の可能性－
木崎 康弘

【論文】

- 谷間の縄文人 25
－熊本県五木谷における縄文時代早期の社会及び縄文時代の動態－
木崎 康弘

【研究ノート】

- 熊本の縄文時代住居跡から見た定住化の様相 73
池田 朋生

【資料紹介】

- ・熊本県下の石工道具二例 83
・山鹿市鹿央町で採取された勾玉
池田 朋生

- 写真図版 99

【事例報告】

- アラカシを食す 103
江本 直
-

2006.3.28

熊本県立装飾古墳館
研 究 紀 要
第 6 集

序文

【総説】

- 学校教育、体験学習、古墳館 1
－古墳館を利用した体験学習の可能性－
木崎 康弘

【論文】

- 谷間の縄文人 25
－熊本県五木谷における縄文時代早期の社会及び縄文時代の動態－
木崎 康弘

【研究ノート】

- 熊本の縄文時代住居跡から見た定住化の様相 73
池田 朋生

【資料紹介】

- ・熊本県下の石工道具二例 83
・山鹿市鹿央町で採取された勾玉
池田 朋生

- 写真図版 99

【事例報告】

- アラカシを食す 103
江本 直
-

2006.3.28

序 文

日本史上初めて人口の自然減少が見られた今日、我が国には少子高齢化に伴う様々な問題と、それに備える社会の変革・改革の波が押し寄せてきました。市町村合併や多くの制度改革など、私たちを取り巻く社会環境は大きく変わりつつあります。そのなかで、教育に関する様々な課題も出てきました。とりわけ、教育基本法改正に向けた議論は、次世代の子どもたちを育てるという視点から、教育施設である本館としては深く関わりのあるものであります。

こうした社会情勢の中では、変わらずずっとそこにあるけれど、注目されていない大事な地域の歴史、文化、伝統が、いくつもあることを忘れてしまいがちです。村々に伝わる古い伝承、小さな祠、無住となったお寺、野仏などの石造物、廃れずに残っている地域の基幹産業など、そうしたものに目を向けていると、実に様々な先人達の智恵が感じられます。この先人達の智恵の中にこそ、地域の特徴を生かした工夫があり、地方の発展に貢献できる力が秘められていると考えられます。

このような地域の歴史、伝統、文化に、将来の日本を担う子供たちにしっかりと伝え、遺すよう働きかけること。それこそが、地域の守るべき個性を大事にしながらも、変革・改革の社会に対応していくという力を養う源に繋がっていくのではないでしょうか。そして、こうした課題に応えて社会に貢献する役割を果たすことこそが、本館を含めた地方の博物館の使命であると考えます。

本研究紀要は、そのような視点から研究した成果を公開するものです。これらの成果につきましては、本館の展示事業、体験学習事業、各種の講座等を通して、県民の方々に提供していきたいと考えております。

郷土熊本の歴史や伝統文化を単に伝えるだけではなく、一教育施設として本県の学校教育、生涯学習の一助に資するよう、さまざまな機会を通して本館の研究成果を活用してまいりますので、今後とも、本館の事業に御理解と御指導をいただけますようお願ひいたします。

平成18年3月28日

熊本県立装飾古墳館 館長 小田 信也

学校教育、体験学習、古墳館

—古墳館を活用した体験学習の可能性—

木崎 康弘

熊本県立装飾古墳館 主幹（学芸課長）

1 はじめに—熊本県立装飾古墳館と体験学習—

「(1)『県民参加型』の博物館をめざして

(前略) 具体的には、原始古代の衣・食・住にかかわる身近なテーマを中心に、屋内外での体験学習を実施する。(後略)」(熊本県立装飾古墳館1993)

熊本県立装飾古墳館（以下、「古墳館」という。）では、1992（H 4）年の開館以来、一貫して、児童・生徒を対象とした体験指導による教育プログラム（以下、「体験プログラム」という。）による体験学習に取り組んできた。それは、上に掲げた「館のめざす方向」が開館当初から意識され、具体的な実践方向として認識されてきたからに外ならなかった。まさに、熊本県立装飾古墳館の歩みは体験学習の実践の歩み、といつても過言ではないだろう。

さて、古墳館では、開館当初が4種類の体験プログラムで体験学習を始めた。その数、現在では24種類である。ただし、その増加は、決して急激で、上滑りなものではなかった。前年度の実績を基に取捨選択を行いながら、毎年確実に増やしてきたのであった。その意味では、原口長之館長、桑原憲彰学芸課長、野田拓治参事等、開館当時の古墳館スタッフの理念を具現化してきたとも評価できようか。

本稿では、こうした古墳館の体験プログラムの実例を紹介しつつ、その考え方を提示することを目的とするが、あわせてそれに係わる幾つかのデータを提示することとする。

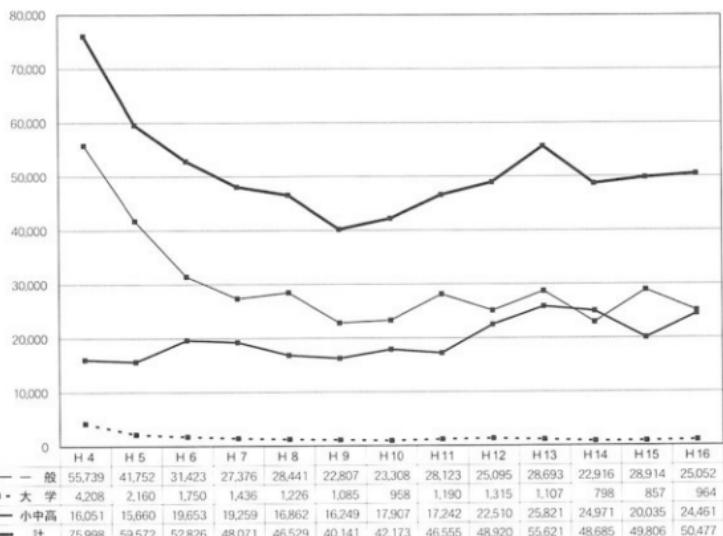
2 古墳館利用者数の年次の推移及び年間推移

(1) 年次の推移

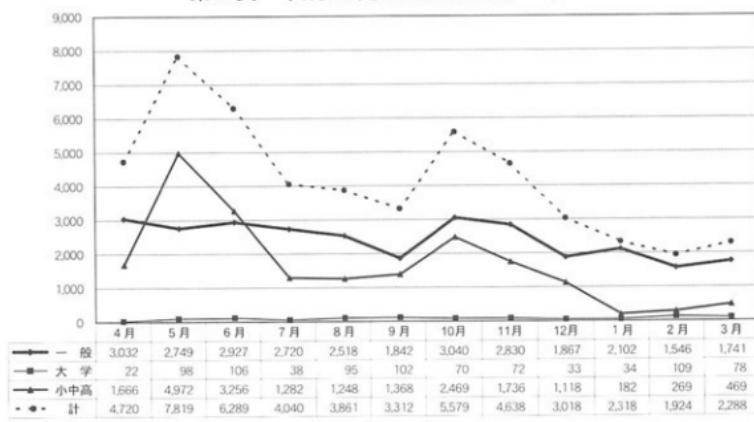
「年次別利用者数データ」（第1表）によれば、古墳館の利用者数は、開館の1992（H 4）年度（75,998名）からすぐに減少を始め、1997（H 9）年度（40,141名）で最低に達した。それは、5年間で開館時のおよそ52.8%という急激なものであった。一般利用者数は、開館時の40.9%と、総数の下げ幅を10%以上も上回る減少率であった。しかも、この間、大学生、小中高校生の数に突出した変化が見られない。明らかに総数の減少は、一般利用者の減少によってもたらされたものであった。

一方、利用者数は、1998（H10）年度に増加へと転じた。7年間でおよそ10,000名、年度ごとに平均およそ1,500名弱の増加であった。この増加分を一般利用者、大学生、小中高校生の増加分で見てみると、大学生でほとんど変化が無く、それに対して一般利用者で平均3,000名が、小中高校生で平均5,600名が増加していた。特に、急激な伸びをみせた2000（H12）年度以

第1表 年次別利用者データ



第2表 平成15年度月別利用者データ



降の小中高校生数の平均（23,559名）と、1997（H9）年度小中高校生数（16,249名）との比較では、7,310名も増加していた。利用者の増加は、一般利用者と小中高校生の増加、特に小中高校生の増加に帰するものであった。

このように、利用者数の急激な減少と確実な増加は、

- a 一般利用者の急激な減少、
- b 1998（H10）年度の一般利用者数の下げ止まりと微増、
- c 2000（H12）年度以降の小中高校生の増加

によって惹き起こされたもの、とすることができるだろう。

（2）年間推移

次に、視点を変えて、1年間の利用者数の推移を見てみよう。2003（H15）年度を例に、その傾向をグラフ化したのが、第4表の「平成15年度月別利用者数データ」である。

「4月から9月にかけて」では、5月に最大のピーク（7,819名）があり、その後激減し、7月～9月と4,000～3,000名で落ちていた。次に、「10月から3月にかけて」では、10月にピーク（5,579名）があり、その後急速に落ち込んで、1月～3月で2,000名前後と落ちていた。年間では、上半期と下半期で似たような利用者数の変動のパターンがあるのである。

そこで、次に個別に見てみよう。

一般利用者では、その数に突出した月は無いが、「4月から9月にかけて」と「10月から3月にかけて」、すなわち上半期と下半期で似たような変動のパターンがあった。例えば、「4月から9月にかけて」は、ピークの4月（3,032名）からしだいに利用者が減少し、1,842名の9月で最低をむかえていた。一方、「10月から3月にかけて」は、正月を挟むことによって多少の乱れがあるとはいえ、ピークの10月（3,040名）からしだいに利用者が減少し、1,741名の3月で最低をむかえていた。しかも、「4月から9月にかけて」は3,032名→1,842名、「10月から3月にかけて」は3,040名→1,741名、と数的にも同じような傾向であった。

小中高校生でも上半期と下半期で似かよった変動のパターンを示していた。しかしながら、その増加や減少の傾向は、一般利用者とまったく異なり、ピークの出方が突出的で、かつ減少の仕方が急激であった。具体的には、「4月から9月にかけて」では、5月に最大のピーク（4,972名）が来て、その後激減し、7月から9月にかけては1,300前後で落ちていた。「10月から3月にかけて」では、10月にピーク（2,469名）が来て、その後急速に落ち込んで、1月から3月にかけては500名以下で推移していた。

このように、年間の利用者数の変動では、「4月から9月にかけて」と「10月から3月にかけて」、という上半期と下半期で同じようなパターンを示すことに大きな特徴があった。ただし、一般利用者と小中高校生とでは、前者が平準的で、後者が突出的、とパターンに違いが見られ

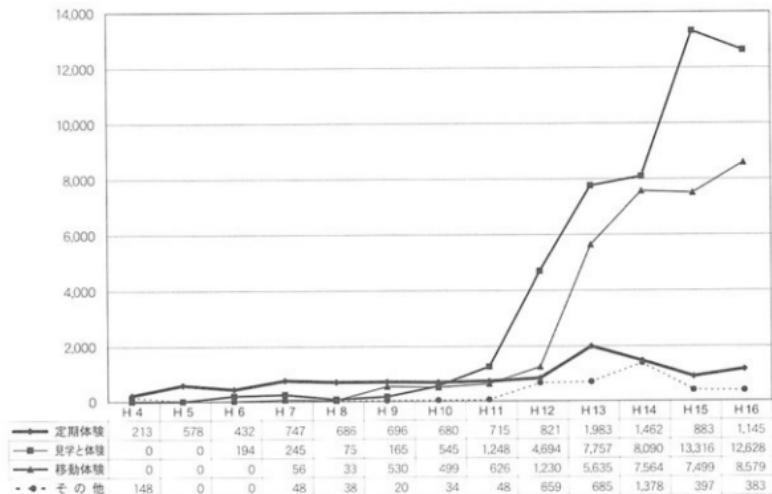
た。学校教育における年間スケジュールが共通したものがあり、そこに突出的な傾向が現れるのに対して、一般利用者は観光目的ということから、分散し、平準化する傾向があるのだろう。

3 古墳館における体験学習

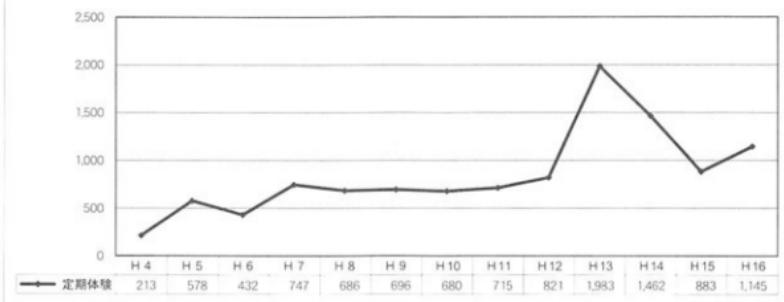
古墳館が開館以来体験学習に積極的に取り組んできたことは、既述の通りで、利用者数の確実な増加に大きく貢献してきたことは間違いない。本節では古墳館の体験学習を紹介することとするが、その参考とするために、まず体験学習の歩みをトピック的に振り返っておく。

- ・1992（H4）年度一年6回の定期体験と3回の夏休み特別体験でスタート。
- ・1993（H5）年度一定期体験を月1回に。
- ・1994（H6）年度ー見学・体験を開始。また「古代米」関係も始まる。
- ・1995（H7）年度ー定期体験を月2回に。移動体験を開始。この年度に古墳館の体験教室の骨組みが完成。
- ・1999（H11）年度一年10回以下であった見学・体験が20回に。
- ・2000（H12）年度ー見学・体験が65回と大幅に増加。
- ・2001（H13）年度ー体験学習周知用のリーフレットを小中学生全員に配布。

第3表 年次別体験学習利用者数データ



第4表 年次別定期体験利用者数データ



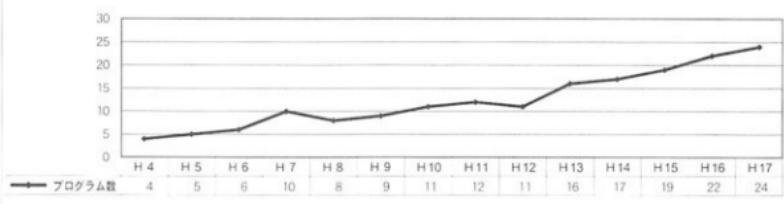
(1) 体験学習利用者数の推移

古墳館の体験学習利用者数は、開館の1992（H4）年度から1999（H11）年度まで横ばいのまま推移してきた（第3表）。ところが一転、2000（H12）年度に急激に増加を始めた（第3表）。これは、見学・体験、移動体験の利用者数の大幅増と係わる現象で、古墳館の体験学習の周知化が進んでいった結果である、と評価できる。さらにその周知化は、2001（H13）年度から始まった、小中学校の児童生徒（以下、「児童生徒」という。）、すべてへの周知用リーフレット配布によって一層促進した。その結果が体験学習利用者数のさらなる増加（第3表）につながったものと評価できる。

① 定期体験

古墳館の定期体験は、4種類の体験プログラム（第5表）で利用者数213名（第4表）のスタートであった。それが、2004（H16）年度においては、1,145名と、開館時のおよそ5.4倍に増加した。体験プログラム数でいえば、24種類、開館の年度の6倍であった。すべての児童生徒への周知用リーフレット配布が始まった直後の2001（H13）年度と2002年度を除けば、開館以来、利用者数とプログラム数とは、ともに漸次増加してきたのである。

第5表 プログラム数の推移



第6表 熊本県立裝飾古墳館における体験プログラムの推移

	H.4.(1992)	H.5.(1993)	H.6.(1994)	H.7.(1995)	H.8.(1996)	H.9.(1997)	H.10.(1998)	H.11.(1999)	H.12.(2000)	H.13.(2001)	H.14.(2002)	H.15.(2003)	H.16.(2004)	H.17.(2005)
土器はまだ 石器はまだ	古墳めぐりハイ キング													
イント										古代だらかる解 説				
										こふくかんへ 5・5・GO!				
考古学教室										古墳めぐりハイ キング				
Q.考古										古墳めぐりハイ キング				
古代のベンチン トつくり	古代の王づくり	古代の玉づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり	古代の瓦づくり
上野														
伝承	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室	古代伝承教室
木谷														
縄文土器で なーに	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり	縄文土器づくり
猪俣														
篠崎	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり	篠崎づくり
古井	古井づくり													
木	木工クリー クチャー													
火	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森	古代火の森
火・火	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机	古代火と薪机

このように、定期体験では、急激な利用者数の伸びをみせることはなかったが、着実な増加を遂げてきたことは間違いない。体験学習への積極性（体験プログラム数）が結果（定期体験利用者数）として現れてくる、ということを示している。

なお、定期体験の体験プログラムの推移は、「熊本県立装飾古墳館における体験プログラム」（第5表）に紹介している通りである。

② 見学・体験、移動体験

545名だった1998（H10）年度の翌年度、1999（H11）年度の見学・体験利用者数は、1,248名と、前年度の2.3倍の大幅な増加を見せ、見学・体験のエポックとなった。それが、2003（H15）年度と2004年度にはそれぞれ13,316名と12,628名となっている。5年間で10,000名以上、と驚異的な増加であった。

626名だった1999（H11）年度の翌年度、2000（H12）年度の、学校等への訪問による移動体験利用者数は、1,230名と倍増した。さらにその翌年の2001（H13）年度には5,635名と、4,000名以上も増加し、移動体験のエポックとなった。そして、さらに2004（H16）年度には8,579名と、大幅な増加となった。

このように、見学・体験では1999（H11）年度が利用者数増加の起点となり、移動体験では2000（H12）年度が利用者数増加の起点となり、その後それぞれに驚異的な伸びをみせた。この増加は、2001（H13）年度から始まった、全小中学生への周知用リーフレット配布によって促されたのであろうが、前節で整理した、「c 2000（H12）年度以降の小中高校生の増加」と係わるものであった。また、その利用者数には小中学生の保護者分も含まれているところから、見学・体験や移動体験の利用者数の増加は、「b 1998（H10）年度の一般利用者数の下げ止まりと微増」に係わったと考えることができる。体験学習への取り組みの効果がここにも現れている。

（2）体験プログラムの種類と内容

開館当初、古墳館で実施している体験学習の考え方については、

- ①家族（親子）で楽しめる、
 - ②自然に（身近に）ある材料を使う、
 - ③可能な限り当時の技術に近づける、
- という観点で整理が行われていた。

古墳館では、開館の年度、この考え方のもと、「土器はどこだ 石器はどこだ」、「古代絵画教室」（凝灰岩の石版の表面に装飾古墳の絵柄や図形を描く企画）、「縄文土器ってなーに」、「どんな味かな ドングリクッキー」の4つの体験プログラム（第6表）が実施された。その後今日まで、考案され、実施されてきた体験プログラムは、34種類に上った（第6表）。そこでは、物作り、食、衣など原始・古代をキーワードにしたさまざまな工夫がなされてきた。ここでは、

こうした多種多様な体験プログラムを紹介するのであるが、説明の便を図るために、その特徴や内容でいくつかのグループにとりまとめたい。

古墳館の体験プログラムには、複数の体験プログラムを複合させたり、散策や見学などを行ったりするものがある。この体験プログラムは、体験学習のテーマ名からより具体的な活動内容が推し測れない、イベント性の強いものである。「複合型体験プログラム」と仮称しておきたい。こうした性格のものを、さらにその趣旨などを勘案して、「イベント」、「夏休み企画」にとりまとめておきたい。

次に、個別の体験プログラムをメインとした、組み合わせがシンプルな体験学習がある。これらは、体験学習のテーマ名からより具体的な活動内容を容易に認識することができるものである。具体的には、「玉類」、「絵画」、「利器類」、「焼き物」、「布・衣」、「食」、「火」、「古代米」がある。「個別型体験プログラム」と仮称しておきたい。

① 複合型体験プログラムの体験学習

「イベント」としてとりまとめたものは、1992(H4)年度の「土器はどこだ・石器はどこだ」、1993(H5)年度の「古墳めぐりハイキング」、2001(H13)年度及び2002年度の「古代たんけん隊」、2004(H16)年度及び2005年度の「こふんかんへ 5・5・GO！」、2005(H17)年度実施予定の「古墳館 ですごそう いへい1日」である。

「土器はどこだ・石器はどこだ」は、古墳館周辺の土地で現地踏査を行い、土器や石器などの表面採集を行う企画で、翌年度の「古墳めぐりハイキング」



「こふんかんへ 5・5・GO！」での古代火おこし
(平成16年度)



「こふんかんへ 5・5・GO！」での古代勾玉づくり
(平成16年度)



「古代体験キャンプ」での夜間見学
(平成17年度)

につながるものであった。「こふんかんへ 5・5・G O！」はゴールデンウィーク期間のイベントとして実施し、「古墳館ですごそう い〜い1日」は2005（H17）年度から始まった「くまもと教育の日」関連イベントとして実施するものである。いずれもイベント性の強い、野外での散策、数種類の体験プログラムを複合させた企画である。

なお、類似した内容のものとしては、「夏休み企画」があるが、教育的な配慮を加味しつつもより娛樂的な要素が強い点で趣旨を異にしている。

「夏休み企画」は、1994（H6）年度の「考古学教室」、1997（H9）年度から始まった宿泊型の「古代体験キャンプ」、2002（H14）年度から始まった「古代ディイキャンプ」、2005（H17）年度の「縄文ディイキャンプ」、「古代ディイキャンプ」である。いずれも夏休み期間中に実施する企画、ということでとりまとめた。

「古代体験キャンプ」では、「古代のご飯」、「縄文ドングリクッキーブル」、「古代勾玉づくり」、「縄文土器づくり」を複合させたものや、「古代火おこし」、「縄文の食体験」、「古代の食体験」、「古代勾玉づくり」、「縄文の布づくり」を複合させたものなど、充分な時間と多彩な体験のプログラムとなっている。「古代ディイキャンプ」（～2004年度）では、「古代火おこし」、「古代の食体験」、「古代勾玉づくり」、「縄文の布づくり」、「古代染め物」などを複合させたものである。2005年度の「縄文ディイキャンプ」は「古代火おこし」、「縄文の食体験」、「縄文の玉づくり」、「縄文の布づくり」、「石器づくり」を複合させたもの、「古代ディイキャンプ」は



「古代体験キャンプ」古代の食体験
(平成17年度)



「縄文ディイキャンプ」での燃製
(平成16年度)



「古代管玉づくり」



「古代絵画教室」(デッサン)



「古代絵画教室」(緑色の顔料づくり)

「古代火おこし」、「古代の食体験」、「古代勾玉づくり」、「古代管玉づくり」、「古代染め物」を複合させたものである。

(2) 個別型体験プログラムの体験学習

「玉類」としてとりまとめたものは、「古代勾玉づくり」を中心とした体験プログラムである。もともと1994(H6)年度に「古代のペンダントづくり」として始まったもので、翌年に正式に「古代勾玉づくり」と銘打ち、

今まで続いてきた。また、2004(H16)年度には「古代管玉づくり」を新たな体験プログラムとして加え、さらに2005年度には「古代丸玉づくり」、「縄文の玉づくり」を加えた。作業は、軟らかい石の1つである滑石を材料に、4種類の紙ヤスリを使って、削り込み、磨き上げるというもので、比較的簡単に進んでいく。



「古代絵画教室」



「骨角器づくり」



「石器づくり」

この「玉類」の中で「古代勾玉づくり」は、現在、古墳館での人気プログラムとして、定期体験のメインプログラムである。また、見学・体験や移動体験などでも要望が多い。こうした状況を鑑み、古墳館では、管玉や丸玉などの「玉類」のプログラムを充実させ、リピータの確保に努めてきた。

「絵画」は、「古代絵画教室」である。開館当時の3つの観点に立って、①親子で参加する定期体験のプログラム（家族（親子）で楽しめる）で、②ベンガラの材料となる阿蘇の黄土を使用し（自然に（身近に）ある材料を使う）、③それを焼いてベンガラを作る（可能な限り当時の技術に近づける）、という内容が考案され、実践された。開館以来の体験プログラムで、装飾古墳の専門館、という古墳館のコンセプトに照らしても今後も継続していく。

なお、2005（H17）年度においては、ベンガラだけではなく、他の色も顔料づくりから始める、という内容の充実を図った。

「利器類」としてとりまとめたものには、「石器・骨角器づくり」、「石器づくり」、「骨角器づくり」がある。

「石器・骨角器づくり」は、2002（H14）年度に「イベント」の中の1つメニューとして試行されたもので、2003（H15）年度に本格的な体験プログラムとして登場した。また、その翌年度には、「骨角器づくり」と「石器づくり」に分離した。

「骨角器づくり」は、鹿の角を切断し、削り込みながら、釣り針や鍼、アクセサリーなどを製作するものである。「石器づくり」は、黒曜石の原石から剥片を剥ぎ取り、それを加工して石器に作り上げるものである。

なお、類似するものとして、体験プログラムとしては実施していないが、「古代米」の中のメニューとして実施している「石包丁づくり」がある。

「焼き物」としてとりまとめたものには、「縄文土器ってなーに」、「縄文土器づくり」、「埴輪づくり」、「土偶・上面づくり」、「野焼き体験」、「楽焼づくり」「陶器づくり（形づくり、色づけ）」がある。



「縄文土器づくり」



「埴輪づくり」



「古代染め物」

る。

「縄文土器づくり」は、1992（H4）年度の「縄文土器ってなに」から始まった。この時の「縄文土器ってなに」では、土器の製作まで行わせず、文様の付け方や指本採りが行われたのみであった。土器の製作は、1995（H7）年度の「縄文土器づくり」以降で、現在まで続いてきた。「土偶・土面づくり」は、2001（H13）年度に始まった。「埴輪づくり」は、2003（H15）年度に始まった。そして、当初行われていなかった、作った作品を焼き上げる「野焼き体験」が2002（H14）に始められた。また、「陶器づくり（形づくり、色づけ）」は、1995（H7）年度、1996年度の「窯焼づくり」を前身にして、1997年度に始められた。ただし、古墳館の体験学習のコンセプトや参加人数の減少から、2005（H17）に取り止めとした。

なお、これらの体験プログラムでは、技術的な面から外部講師に技術指導をお願いしている。

「布・衣」では、1995（H7）年度の「古代服づくり」が最初である。この時の定期体験では古代の衣服である貫頭衣の製作が行われたが、その後、この体験プログラムでの体験学習は行われていない。それに代わって、2001（H14）年度に始まったのが、「縄文の布づくり」で、現在まで継続してきた。女性や女児の参加が目立っている。活動では、時間的に大型製品を作ることは困難であり、コースター作りが中心となっている。また、1998（H10）年度に始まった「古代染め物」は、現在まで続いている。自然の素材だけを利用した染め物である。「古代染め物」の場合は、外部講師に技術指導をお願いしている。

「食」では、古墳館で開館時に取り組んだのがドングリクッキーであった。「どんな味かな ドングリクッキー」と銘打った体験学習であった。この体験プログラムは、現在の「縄文ドングリクッキー」にまで引き継がれてきた。「古代のご飯」は、1993（H5）年度、1995年度～1996年度、1999年度に実施された。赤米・黒米をテーマにした体験プログラムで、2001（H12）年度以降の「古代人の食体験」、



「田植えに挑戦」



「田植えに挑戦」（米野岳小5年生の発表会）

「古代の食体験」につながるものであった。「縄文時代の食体験」、「縄文の食体験」は、2001（H12）年度に「古代人の食体験」と共に始まった。これらの体験は、独立した定期体験として実施されてきたが、「食」という内容から「夏休み企画」の中にも組み込まれてきた。

「火」では、「古代火おこし」と銘打ち、2003（H5）年度に始まった。この「古代火おこし」については、定期体験のメインの体験プログラムではないが、料金的にも時間的にも手頃で、見学・体験や移動体験を希望する団体からの要望が多い。また、定期体験の中でも「食」や「夏休み企画」での「食」の導入として取り入れている。

「赤米」は、赤米生産グループ等との共催事業として、1994（H6）年度に登場した。春の「田植えに挑戦」と秋の「収穫祭」がセットである。内容的には「イベント」に近い事業であるが、地元の地域おこし団体との連携、という特徴から独立させて紹介することとした。

「田植えに挑戦」では、田植えを体験した後、「石包丁づくり」を体験する。また、レクレーションや手作り昼食会等々、盛りだくさんである。収穫祭も同じように盛りだくさんで、石包丁での穂摘みの体験、レクレーション、手作り昼食会、餅つき等々を行っている。

この他、定期体験のメインの体験プログラムとしては行なっていないが、「石包丁づくり」も「赤米」のなかで行っている。

4 古墳館における体験学習の現状

(1) 体験学習の枠組みの構築過程と「体験教室実施方針」

① 枠組みの構築過程

古墳館では、体験学習の枠組みを開館当初、「学校5日制に伴う体験学習会」と「企画展に伴う体験学習会」（翌年度からは、「夏休み特別体験学習会」。）という形で設定していた。1994（H6）年度からは、来館する、小学校などの団体への体験学習として、「別途実施の体験学習会」、共催事業として「古代の米づくり」を加え、5つの構成が始まった。また、翌1995（H7）年度には、遠隔地の小学校などへ出向いて行う「体験学習出張講座」も加わり、「学校5日制に伴う体験学習会」、「夏休み特別体験学習会」、「別途実施の体験学習会」、「古代の米づくり」という現在の枠組みが完成することとなった。

そして、2001（H13）年度においては、その枠組みを5つに再整理し、各体験学習会名を次のように変更した。

- ・「定期体験教室」（主に第2、4土曜日に古墳館で内容を決めて開催する体験学習。元は「学校5日制に伴う体験学習会」。）
- ・「移動体験教室」（職員が要請のあった現地に出向いての体験教室。元は「体験学習出張講座」。）
- ・「見学と体験」（社会科見学や修学旅行で来館する団体を対象に行う館内見学と体験教室。元

は「別途実施の体験学習会。」)

・「チャレンジ！赤米づくり」(元は「古代の米づくり。」)

・「その他の体験教室」(来館した一般客に対して行う体験教室。)

ここに枠組みが一定の基準で整理されたのであった。ただし、いずれを通観しても、こうした枠組みが古墳館側からの一方的な視点で構築されていたことは明らかであった。

そのことを説明のフレーズから看取してみよう。「古墳館で内容を決めて開催する」ものが「定期体験教室」。「職員が要請のあった現地に出向いて」行うものが「移動体験教室」。「来館する団体を対象に行う」ものが「見学と体験」。いずれにも利用者像をイメージさせる表現は無く、古墳館が主体、という認識にあることは、明らかであった。特に問題なのは、古墳館主催の事業ではない「移動体験教室」や「見学と体験」に利用者像をイメージさせる表現は無いことである。ここに、開館当初からのキーワード「県民参加型」の実現を阻害することが十分に予想されたのである。

要は、古墳館側、利用者側の双方の立場に立った枠組みの再認識が必要なのであった。また、古墳館利用者数で圧倒的な位置を占めるようになった「見学と体験」、「移動体験」に適切に対応するためには、避けて通れない観点であった。そしてそれは、往々にして陥りがちな「体験」の目的化を避ける意味合いも含まれていた。

こうした課題を踏まえ、新たに定めたのが「体験教室実施方針」(平成15年11月5日付け、館長決裁)であった。それは、

a 利用者を峻別し、それぞれに対応する体験学習、という観点でその内容等を再認識する、

b これまでの枠組みを利用者側の係わりという観点で再編し、その運用をaの観点で行う、

という認識に基づくものであった。

② 「体験教室実施方針」

「体験教室実施方針」では、目的を「来館者や利用者の生涯学習の場として、また、参加体験しながら学ぶことができる博物館として、利用者等の要望に応じた各種の体験教室を実施する。」とした。いわば、「県民参加型の博物館」を目指した、具体的な行動指針であった。まず、体験学習の趣旨や目的をより実態的なものとするために、古墳館が受け入れている各種団体等の体験学習を、「学校教育」、「社会教育」、「その他」に大別した。

それは、古墳館の体験学習を画一的に、かつ硬直化して捉えず、学習を目的とするもの、学習の他、娛樂的な要素が付加されているもの、娛樂的な要素が中心になっているもの、と幅を持たせ、合理的な運用ができるように考えたからであった。具体的な内容は、次のようなものであった。

「学校教育」として大別した体験学習は、学習活動を目的とした学校・学級(以下「学校等」という。)を対象とした体験教室である。したがって、古墳館を「学習の場」の一つとして位

第7表 体験教室の学習内容及び体験内容の実例

		1 古代勾玉	2 火おこし
ねらい		<ul style="list-style-type: none"> ◆古代のアクセサリーについて学習後、勾玉づくりを体験することで、古代人の技術や知恵を学ぶことができる。 ◆物の大切さについて考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆火おこしの道具の移り変わりについて学習後、火おこし体験することで、古代人の知恵や工夫を学ぶことができる。 ◆火の大切さについて考えることができる。
事前学習	学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ○古代のアクセサリーについて学習する。髪飾り、耳飾り、首飾り、腕輪、指輪。必要に応じて、实物資料(レプリカ)等も活用する。(耳栓、ゴムウラ貝、勾玉、管玉など) ○勾玉の形の由来等について学習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○火や火おこしの変遷について学習する。 ○火おこしの道具について学習する。
留意点		<ul style="list-style-type: none"> ○古代人が自然の中にある物から、様々な道具やモノを生み出していったことを伝える。 ○装身具に見られる古代人の技術や知恵を知ることができるものとする。 ○勾玉の形については、極端な形にならないよう、勾玉の形について由来などをしっかりと指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自然にあるモノの利用から始まり、徐々に道具が工夫されていく過程を知らせる。 ○「摩擦」を高めるための工夫について、考えさせることで、理屈的な要素も盛り込む。
体験活動	活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ○滑石をサンドペーパーで削って、勾玉を作る。 	
	留意点	<ul style="list-style-type: none"> ○自然の中にあるモノ(小枝等)を利用するなど、サンドペーパー(道具)の使い方を工夫させる。 ○道具の便利さと同時に、道具を生み出してきた先人達の知恵や技術を感じ取らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○舞ぎりを使って、火おこしを行う。舞ぎりを使用するが、児童・生徒の発達段階に応じて、弓やりやひもやり等も活用する。 ○火種の作り方、息の吹き方などしっかりと体感させる。 ○火がおこせない場合(失敗)も学習の一つとする。
事後学習	学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ○古代人の知恵と工夫について考える。 ○モノの大切さについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常的に利用している「火」について、実際に「火おこし」体験後の各自の感想を元に、「火」の大切さについて考える。(「調理の火」「明かりの火」「暖の火」「獣よけの火」など)
	留意点	<ul style="list-style-type: none"> ○実際に作ってみて、感じたことを元に、古代人の知恵や技術のすばらしさについて考えさせる。 ○モノを作ることの楽しさやすばらしさ、大変さを感じ取ることで、モノの大切さを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「火」の役割について考えさせる。 ○日常的に利用している「火」について再認識させるような内容とし、各自の感想を元に「火」の大切さについて考えさせる。
見学との関連性		<ul style="list-style-type: none"> ○本物の勾玉と作った勾玉を比較することにより、古代人の技術や知恵を感じ取ることができること。 ○自ら勾玉づくりを体験することで、展示資料等の見方について学ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○様々な道具の進化について学ぶことができる。
発展学習			<ul style="list-style-type: none"> ○エネルギー教育 ○環境教育

置づけた学校等の目的に応じた内容とする必要があった。その展開では、事前学習、体験活動及び事後学習による構成をとらせ、学習的色彩を際だたせるよう配慮した。

「社会教育」として大別した体験学習は、活動を中心としたPTA、子ども会、学童保育等の社会教育関係団体及び一般利用者（以下「社会教育等」という。）を対象とした体験教室である。したがって、古墳館を「活動の場」の1つとして位置づけた社会教育等の目的に応じた内容に配慮する必要があった。そのために、内容を簡素化し、決して押し付けとならない範囲での「学習」を活動の中ができるよう配慮することとした。

「その他」として大別した体験学習は、活動が主体の公民館や老人会など地域の各種団体（以下「各種団体」という。）を対象とした体験教室である。対象が成人であるため、学習的な側面をより薄め、より活動主体とした内容とした。そのために、質問等に応える中で「学習」的な側面を付与できるよう配慮することとした。

また、体験学習の趣旨や目的を明確にするために、それまでの5つの枠組みを能動的、受動的といった内容的な観点で再整理し、古墳館が計画し実施する「定期体験教室」、「特別体験教室」、「赤米体験教室」、利用者等の要望に応じて実施する「一般体験教室」、「移動体験教室」に峻別した。そして、それぞれに新たな概念を与え、再確認を行ったのであった。

これらの体験学習については、a 体験活動を一つの「手段」として扱うこととして、その実施の「目的」は、体験を通しての「学習」とすること、b 古墳館が実施する体験活動では、原則として事前学習、体験活動及び事後学習を行うものとすること（第7表）として、「社会教育」や「その他」の分野においても学習内容等に十分留意すること、と定めたのであった。

(2) 古墳館での体験学習の実施

① 古墳館が計画し実施する体験学習

「定期体験教室」、「特別体験教室」、「赤米体験教室」は、前記したように、24種類の体験プログラムを持ち、原則として土曜日若しくは日曜日の実施である。あらかじめ前年度に年間スケジュールを定め、それを周知用のリーフレットとして印刷し、県内及び福岡県大牟田市内の小中学校の児童・生徒全員に配布している。募集にあたっては、それぞれの体験学習毎に定員を設け、2ヶ月前から受け付けを行っている。定員については、玉類、古代米が100名、古代体験キャンプ50名、残りが40名～30名である。

「定期体験教室」は、古墳館の年間計画に基づき、子どもとその保護者を対象に参加者を募集して実施する各種の体験教室である。主に、土曜日に実施しているが、一部日曜日開催も行っている。歴史や郷土に対する「興味・関心」を高め、古墳館や博物館等に対する興味づけ（機会づくり）的な内容としている。個人参加という性格から「社会教育」として大別した体験学習の取扱いとなる。

「特別体験教室」は、古墳館の年間計画に基づき、子どもとその保護者を対象に参加者を募

第8表 県立装飾古墳館、管内別小学校利用状況

管内別利用率

見学・体験

管内	小学校数	H17		H16		H15		H14		延べ	
		利用数	利用率								
熊本市	81	35	43.21	36	44.44	39	48.15	38	46.91	58	71.60
宇城	28	0	0.00	1	3.57	0	0.00	4	14.29	4	14.29
荒玉	50	6	12.00	9	18.00	13	26.00	15	30.00	27	54.00
鹿本	28	13	46.43	11	39.29	14	50.00	16	57.14	24	85.71
菊池	33	5	15.15	7	21.21	9	27.27	7	21.21	17	51.52
阿蘇	39	0	0.00	0	0.00	1	2.56	0	0.00	1	2.56
上益城	39	2	5.13	4	10.26	3	7.69	1	2.56	8	20.51
八代	35	0	0.00	2	5.71	2	5.71	3	8.57	4	11.43
芦北	26	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	3.85	1	3.85
球磨	38	1	2.63	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	2.63
天草	70	0	0.00	0	0.00	1	14.3	1	14.3	2	2.86
計	467	62	13.28	70	14.99	82	17.56	86	18.42	147	31.48

移動教室

管内	小学校数	H17		H16		H15		H14		延べ	
		利用数	利用率								
熊本市	81	21	25.93	13	16.05	16	19.75	12	14.81	43	53.09
宇城	28	2	7.14	3	10.71	3	10.71	2	7.14	9	32.14
荒玉	50	15	30.00	9	18.00	11	22.00	11	22.00	30	60.00
鹿本	28	4	14.29	5	17.86	1	3.57	4	14.29	9	32.14
菊池	33	8	24.24	10	30.30	10	30.30	5	15.15	17	51.52
阿蘇	39	1	2.56	0	0.00	0	0.00	1	2.56	2	5.13
上益城	39	6	15.38	8	20.51	2	5.13	8	20.51	13	33.33
八代	35	7	20.00	6	17.14	8	22.86	4	11.43	16	45.71
芦北	26	2	7.69	1	3.85	1	3.85	1	3.85	4	15.38
球磨	38	0	0.00	3	7.89	1	2.63	2	5.26	4	10.53
天草	70	0	0.00	0	0.00	1	14.3	1	14.3	2	2.86
計	467	66	14.13	58	12.42	54	11.56	51	10.92	149	31.91

※小学校数については平成16年度を基準とする。また「H17」は平成18年3月1日現在。

集して、夏休み期間中に実施する古代体験キャンプ、古代デイキャンプである。歴史や郷土に対する「興味・関心」を高める内容とともに、体験を通して、じっくり学習できる内容としている。個人参加という性格から「社会教育」として大別した体験学習の取扱いとなる。

「赤米体験教室」は、岩原赤米生産グループ及び山鹿市鹿央町と共同で、子どもとその保護者を対象に参加者を募集して、実施する田植え（6月頃）、稲刈り（10月頃）である。「田植え」、「稲刈り」の体験自体を重視し、五感を通して体感できる内容とするが、学習のための時間を設けるなどして、歴史に対する「興味・関心」を高める内容も付加している。個人参加という性格から「社会教育」として大別した体験学習の取扱いとなる。

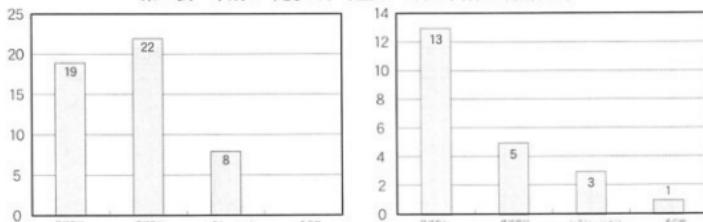
なお、過去4年間の定期体験教室参加者数については、第8表に掲げるとおりで、おおむね1,000名前後の参加者数で推移している。

② 利用者等の要望に応じて実施する体験学習

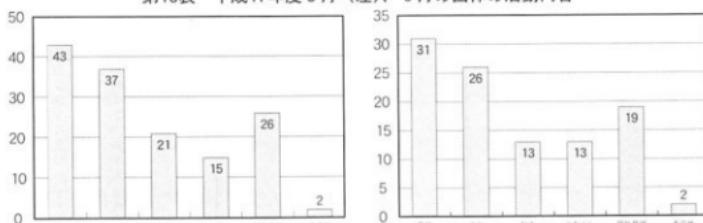
「一般体験教室」、「移動体験教室」は、利用者等の申し出（予約）を受けて対応するものである。利用者数のほとんどがこの体験学習関係のものである。

「一般体験教室」は、古墳館に来館する学校等、社会教育等、各種団体等の団体及び個人を対象に古墳館内で実施する体験教室である。体験内容は、原則として「古代勾玉づくり」、「古代火おこし」の2本立てをしているが、団体の要望があれば古墳館の体験プログラムの中から指定されるもので対応することもある。「学校教育」、「社会教育」、「その他」に大別した体験

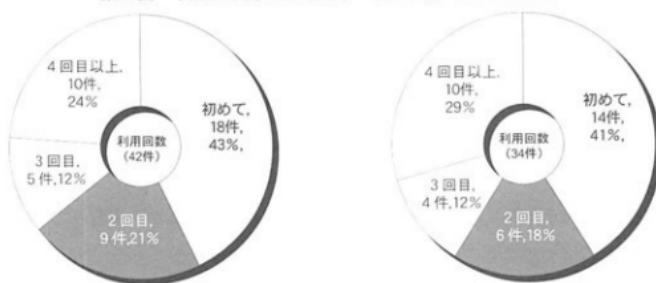
第9表 平成17年度5月（左）、6月の団体の利用目的



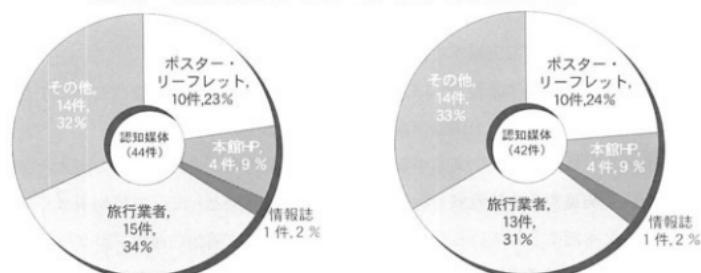
第10表 平成17年度5月（左）、6月の団体の活動内容



第11表 平成17年度5月（左）、6月の団体の過去利用回数



第12表 平成17年度5月（左）、6月の団体の古墳館認知媒体



学習のいずれにも対応するもので、各団体の要望に応じ、内容の簡素化も含めて柔軟に対応した内容とする必要がある。

過去4年間の県内の小学校の利用状況（第8表）では、熊本市の小学校と地元の鹿本教育事務所管内の小学校がもっとも多く、さらに玉名教育事務所管内、菊池教育事務所管内と続いている。一方、上益城教育事務所、宇城教育事務所以南の小学校は、低い利用率である。特に、阿蘇教育事務所、球磨教育事務所、芦北教育事務所、天草教育事務所では数%の利用に過ぎない。

「移動体験教室」は、学校等、社会教育等から依頼を受け、古墳館職員が現地に赴き実施する体験教室である。体験内容は、原則として「古代勾玉づくり」、「古代火おこし」の2本だけとする。「学校教育」、「社会教育」、「その他」に大別した体験学習のいずれにも対応するもので、各団体の要望に応じ、内容の簡素化も含めて柔軟に対応した内容とする必要がある。また、体験を通して、来館の布石となるような「興味・関心」を高める内容とする必要がある。

過去4年間の県内の小学校の利用状況（第8表）では、熊本市、玉名教育事務所管内、菊池教育事務所管内の小学校がもっとも多く、鹿本教育事務所管内の小学校の利用率は低くなる。また、上益城教育事務所管内や八代教育事務所管内の小学校の利用率が大幅に増加している。この体験学習の性格上、遠隔地での利用が高まるのは当然のことである。ただし、阿蘇教育事務所、球磨教育事務所、芦北教育事務所、天草教育事務所での利用は依然として低調である。

(3) 利用者の反応—アンケート調査から—

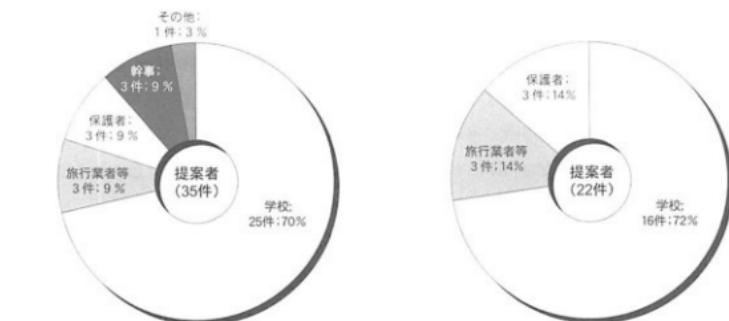
古墳館では、利用者の反応を知るためのアンケート調査を、遅れ馳せながら2005（H17）年度に始めた。したがって、これまでに蓄積したデータ採取数は、統計的な「確からしさ」には程遠いものがある。それはさて置き、古墳館の体験学習等がどのように利用者に受け止められているのかは、興味深いものがある。そこで、あくまでも中間報告ということで、利用者数がもっとも多い月である5月、6月のデータの一部を紹介し、古墳館の体験学習に対する利用者側の反応の概要を見てみることとした。

① 利用団体とその認知手段

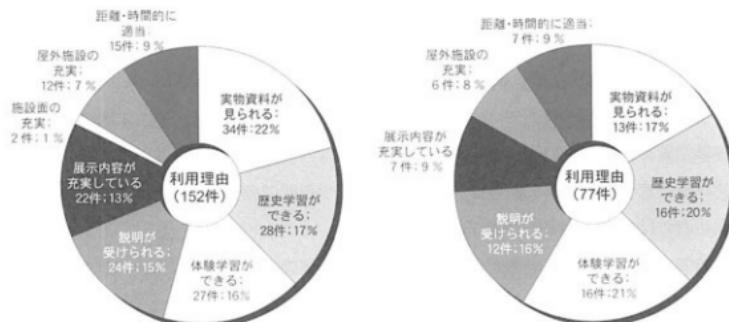
データを採取した団体（ほとんどが小学校であるが）の利用目的を聞いた。5月は、修学旅行22件、見学旅行19件、レクレーション（学級活動等）8件であった。6月（第9表）は、修学旅行5件、見学旅行13件、レクレーション（学級活動等）3件、その他1件であった（第9表）。

具体的な活動内容を聞いた（第10表）。5月は、「見学」43件、「映画視聴」37件、「古代勾玉づくり」21件、「古代火おこし」15件、「屋外見学」26件、「その他」2件であった。6月は、「見学」31件、「映画視聴」26件、「古代勾玉づくり」13件、「古代火おこし」13件、「屋外見学」19件、「その他」2件であった。

第13表 平成17年度5月(左)、6月の団体の提案者・判断者



第14表 平成17年度5月(左)、6月の団体の利用理由

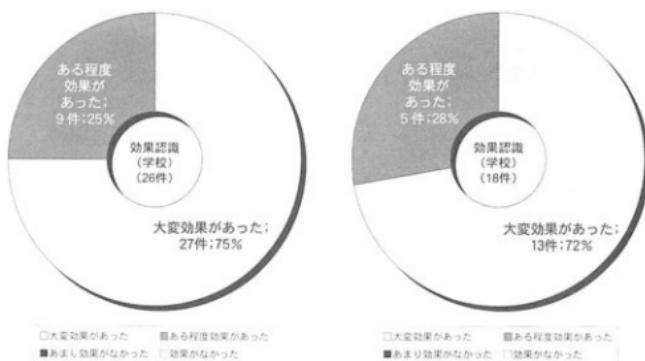


これまでに利用した回数を聞いた(第11表)。5月は、「初回」43%(18件)、「2回目」21%(9件)、「3回目」12%(5件)、「4回目以上」24%(10件)であった。6月は、「初回」41%(14件)、「2回目」18%(6件)、「3回目」12%(4件)、「4回目以上」29%(10件)であった。

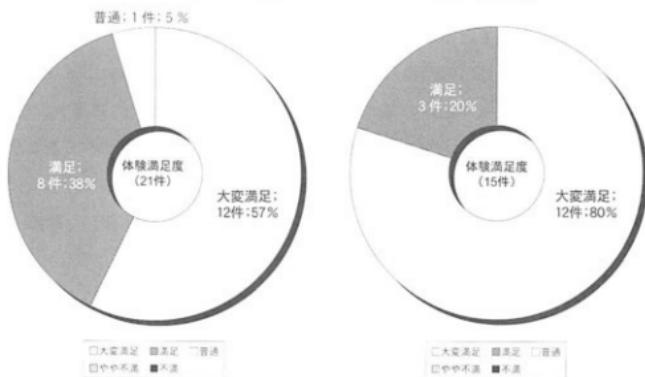
「初回」の団体は全体の4割強を占めている。ところが「2回目」20%前後、「3回目」12%と順次割合を半減させていくのである。回帰傾向が利用回数を増すに従い、減少していることが分かる。ところが「4回以上」の団体も3割弱あることから、高い回帰傾向を示していることも見逃せない。

古墳館利用を認知させた媒体について聞いた(第12表)。5月は、「ポスター・リーフレット」23%(10件)、「ホームページ」9%(4件)、「情報誌」2%(1件)、「旅行業者」34%(15件)、「その他」32%(14件)であった。6月は、「ポスター・リーフレット」24%(10件)、「ホームページ」10%(4件)、「情報誌」2%(1件)、「旅行業者」31%(13件)、「その他」33%(14件)

第15表 平成17年度5月（左）、6月の学校の効果認識



第16表 平成17年度5月（左）、6月の学校の満足度



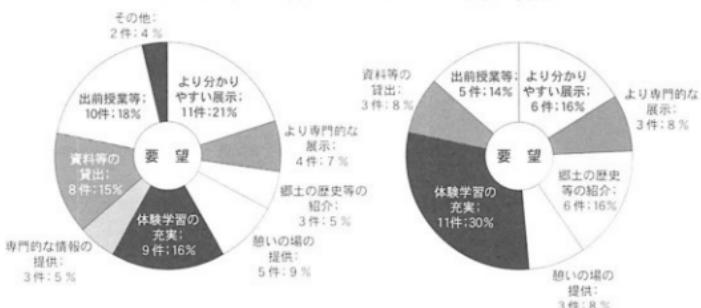
件）であった。

県内等の小中学校の児童生徒に年度当初に配布する「ポスター・リーフレット」は、25%弱と高く、特に県内の団体に認知させる媒体としては効果的なものである。また、旅行業者も3割を越えているように、県外の団体の認知には一定の存在感がある。さらに、古墳館のホームページも1割ほどと今後の積極的な展開を考えるうえで見逃せない媒体となっている。

② 利用団体の選択行動

古墳館を利用を選択した際の提案者・判断者を聞いた（第13表）。それによると、学校側が7割を越えていた。これは、修学旅行や見学旅行という教育課程の一環で行う学校活動では当然のことである。これに対して、学級活動の場合には、保護者等がその役割を担っている。この選

第17表 平成17年度5月（左）、6月の学校の要望



掲行動は、県内外の学校、児童生徒を介した保護者等への働き掛けの重要性を示すものであろう。

その選択理由について複数選択式で聞いた（第14表）。5月は、「実物資料が見られるから」22%（34件）、「歴史学習ができるから」17%（28件）、「体験学習ができるから」16%（27件）、「説明が受けられるから」15%（24件）、「展示内容が充実しているから」13%（22件）、「施設面の充実」1%（2件）、「屋外施設の充実」7%（12件）、「距離・時間的に適当」9%（15件）であった。6月は、「実物資料が見られるから」17%（13件）、「歴史学習ができるから」20%（16件）、「体験学習ができるから」21%（16件）、「説明が受けられるから」16%（12件）、「展示内容が充実しているから」9%（7件）、「屋外施設の充実」8%（6件）、「距離・時間的に適当」9%（7件）であった。

件数の違いがあるが、「実物資料が見られるから」、「歴史学習ができるから」、「体験学習ができるから」、「説明が受けられるから」が20%前後～15%と拮抗している。これらがあわせて全体の7割前後であることは、古墳館のサービスへの期待がそこに集まっていることを如実に示している。

③ 効果認識と満足度等

学習効果を選択式で聞いた（第15表）。5月では、「大変効果があった」75%（27件）、「ある程度効果があった」25%（9件）、「あまり効果がなかった」0件、「効果がなかった」0件であった。6月では、「大変効果があった」72%（13件）、「ある程度効果があった」28%（5件）、「あまり効果がなかった」0件、「効果がなかった」0件であった。

7割を越える団体がその効果を最大限評価し、一定の効果を含めるとすべての団体に教育効果を認めていることがわかる。教師が古墳館での活動に充実感を感じている証拠である。

満足度を選択式で聞いた（第16表）。5月では、「大変満足」57%（12件）、「満足」38%（8件）、「普通」5%（1件）、「やや不満」0件、「不満」0件であった。6月では、「大変満足」

80%（12件）、「満足」20%（3件）、「普通」0件、「やや不満」0件、「不満」0件であった。

5月と6月に多少の傾向の違いがあるが、全体として9割以上の満足度を得ているところは、効果認識と同様に、教師が古墳館での活動に充実感を感じている証拠である。

このように、古墳館活動への期待の大きさは、学習効果と満足度とに共通する傾向が如実に示している。それは、古墳館への要望としても色濃く表れている。「体験学習の充実」（第17表）では5月に16%（9件）、6月に30%（11件）であった。また、体験学習に関連するものとしての「出前授業等」（第17表）では、5月に18%（10件）、6月に14%（5件）であった。

5 おわりにー古墳館における体験学習の課題ー

1992（H4）年度の開館以来、古墳館では積極的に体験学習に取り組んできた。その過程の中で、体験学習の枠組みが構築されていったのだが、その整理が行われた2001（H13）年度までの体験学習では、古墳館が主体、という認識にあったことは否めない事実であった。ただし、このことはけっして批判されるものではなく、その構築過程の中で避けて通れないものであった。要は、こうした経緯が無ければ、今日の古墳館の体験学習が存在しないのである。そうはいっても、こうした認識が続く限り、漸く軌道に乗った「県民参加型博物館」の実現が進まないこともまた予想できることであった。

一方、これまでの2年間余りの取り組みは、2003（H15）年11月5日に定めた「体験教室実施方針」の基に実施してきたものであった。それは、古墳館側と利用者側、という双方の立場を反映した体験学習、という認識であった。その結果、まだ完全なものではないが、体験プログラムの意味付けが行われ、各種の体験学習の立場も明確化した。

アンケート結果に見ることのできる「体験学習の充実」、「出前授業等」への期待の大きさからも、古墳館の体験学習への期待は、相当なものがある。古墳館の体験学習に潜む可能性への期待であろう、と理解したい。

ただし、その一方で、古墳館が充分に現状での課題を認識し、より良い方向へと進む道筋を模索することも怠らないようにしなければならない。そのポイントが、双方向の立場を反映した体験学習の充実であることは論を待たない。特に、古墳館の利用者のほとんどを占める、「一般体験教室」と「移動体験教室」がその課題を抱えている。

これらの体験学習では、利用者側の意図や目的が大きなウェイトを占めるものである。特に、数からいえばそのほとんどを占めるのが学校教育での利用である。要は、「学校側がどのような問題意識を持って、古墳館の体験学習を活用しようとしているのか。」、「古墳館の体験学習を通じて、小中学校の児童生徒に何を体感させようとしているのか。」、を古墳館側が充分に認知しておく必要があるのでないだろうか。そのための仕組み作りに着手する必要があるのでだろう。

まず第1に必要なことは、24種類に及ぶ体験プログラムの教材化を進めることである。この教材化とは、体験プログラムの内容の分析と児童生徒に発信できるメッセージの抽出である。

1つの体験プログラムに1つのメッセージではなく、解析によって複数のメッセージを抽出することが可能である。これは、定期体験教室での実践から導きだされるだろうから、可能な限り、解説シート作りなどのいわゆる「教材研究」を通して積極的に取り組んで行く必要がある。

第2に必要なことは、「一般体験教室」や「移動体験教室」に活用できる体験プログラムをさらに考案し、追加することである。定期体験教室での実践の中からそうした体験プログラムが考案されていくものと期待できる。幅広いニーズに対応するためには、こうした取り組みは重要であるが、第1で行う教材化が必要であることは言わずもがなである。

第3に必要なことは、学校側への提案である。体験プログラムの教材化を進め、具体的な活用策を整理し、こうした体験プログラムがどういう学習で活用できるのかを明確に示すための資料作りが必要である。

先ずは、手始めに、近隣の小中学校との連携の中で古墳館の役割を明確化していくことはその第一歩となるはずである。

なお、最後になったが、ここでは触れることのできなかった、野外の古墳公園を取り込んだ見学についても同様の取り組みを行っていることを付記しておきたい。

たに あい 谷間の縄文時代

—熊本県五木谷における縄文時代早期の社会及び縄文時代の動態—

木崎 康弘

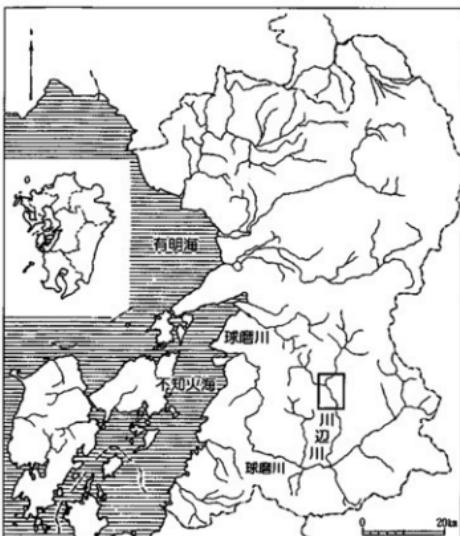
熊本県立装飾古墳館 主幹（学芸課長）

1 はじめに

「熊本県立装飾古墳館 研究紀要」第5号（熊本県立装飾古墳館編2005）掲載の「谷間の縄文人」（木崎2005a）は、「現状の縄文時代の研究がやや平地部での生活に偏りがちであることに鑑み、熊本県五木谷の「考古学的情報とその解釈を、現状の考古学的知見に照らして再考し、説明しよう」と起稿したものであった。そして、その中で、「五木谷全城を集落として、そこを周回移動する活動を展開していた、いわば領域内定住をしていた縄文人たちが五木谷にいた」らしいことを提起した。

- ・20人前後の規模の基本的で単位的な集団が活動。
- ・彼らの本拠としていた集落（I a類）は、川辺川と五木小川との合流点近くの谷部の広い河岸段丘上。
- ・I a類の集落の縄文人たちは、しばしば3つのグループに分散し行動することもあった。それぞれの規模は、10人を越えないものであった。
- ・3つのグループに分散した集団は、それぞれアユやマス、ヤマメなどの川魚漁、狩猟、ドングリ類の採集と製粉作業など、季節的な活動ごとに居住する集落（I b類）を変えながら暮らしていた。
- ・集落周辺には、こうした諸々の活動を行っていた派生的な活動地（II類）の存在が想定される。
- ・彼らの活動が終了すれば、3つのグループは、再度、本拠としていた集落（I a類）に集合した。

では、このように想定した活動は、縄文時代全体に適用できるものであろうか。筆者は、このことについて、「領域内定住（木崎2002）という、九州石槍文化（木崎1996a b c）で



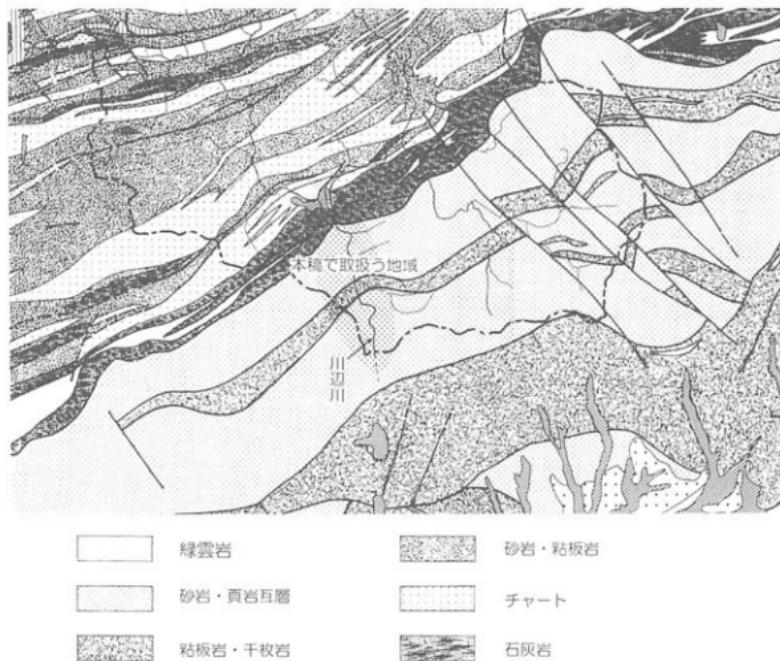
第1図 熊本県と五木谷

展開した活動を彷彿とさせるもの」と説明したように、領域の広狭はあるにしても、先土器時代から縄文時代にかけて展開された活動の可能性が高いと考えた。

本稿では、こうした想定を検証するために、比較的資料がまとまっている縄文時代早期を取り上げて、「どのような点が似ているのか。」、「どのような点が異なっているのか。」について考えることとした。そして、最後に、谷間の縄文時代で行われた縄文人たちの暮らしの移り変わりについて、若干の予察を試みたい。

ところで、ここで取り上げる五木谷は、「五木の子守歌」や「平家落人伝説」で全国的に有名である。また近年では、「川辺川ダム」問題が環境問題の事例として、社会的に取り上げられ、注目されている。その地勢的な特徴については、まさに山間、谷間の里であるが、具体的には前稿（木崎2005a）でも触れている。そこで、重複を避ける上でもその部分を抜き出す形で紹介したい。

「熊本県の南部には、国見山や市房山などの1000mを越える山々が豊かな森を育みながら連なる、奥深い九州山地がどっしりと腰を据えている。そんな九州山地の中を、球磨川や川辺川



第2図 五木谷の表層地質図

などの、大小の河川がうねりうねりしながら、網の目のように走っている。そこに清らかな水があるが、その水は、V字形の深い渓谷の中を、水しぶきを上げながら激しく流れ下っているのである。

球磨川の支流の中、もっとも流域面積の広い川辺川は、九州山地中に大きく口を開けた人吉盆地内で球磨川と合流する（第1図）。この川辺川は、上流へと行くにしたがい、わずかな面積の沖積地を狭めながら、大起伏山地、中起伏山地で、壯年期の山容を呈するといわれる九州山地中に切り込んでいく。それがV字谷の五木谷である。

この五木谷一帯には九州地方を北東から南西方向へと延びる大坂間構造線が通っているが、これによって周辺の地質は、構造線の北側の秩父帶、南側の四万十帶に区分されるという。秩父帶では砂岩や粘板岩、石灰岩、チャートなどが産し、四万十帶では砂岩や粘板岩が産する（第2図）。そうした五木谷一帯は、先史時代の人類にとって石器石材を供給してくれるものとして、魅力的でありがたい石材産地であった。」（木崎2005a）

なお、本稿は、熊本県立装飾古墳館で平成16年1月18日（日）から3月21日（日）まで開催した平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』（熊本県立装飾古墳館2004）に係る研究成果（木崎2005a）を別の切り口で展開させたものである。

2 対象とする遺跡の内容

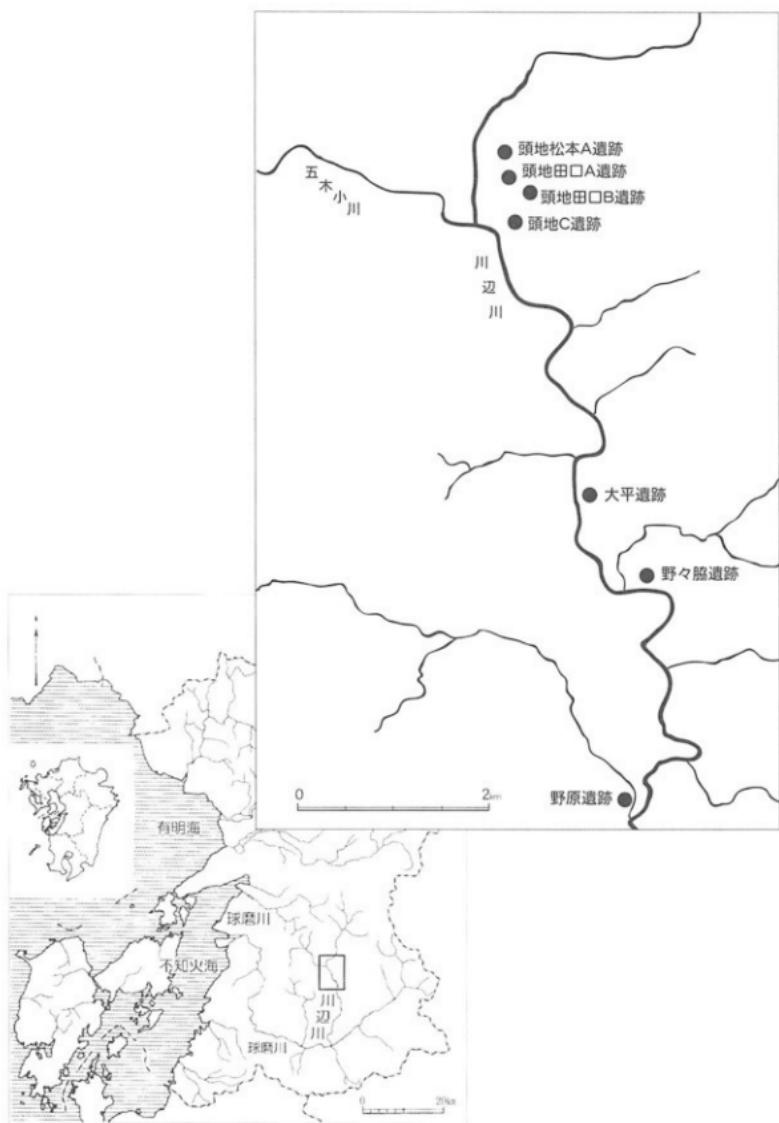
五木谷の縄文時代早期（以下、縄文時代を略して「〇期」という。）の遺跡には、頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡、頭地C遺跡、頭地松本A遺跡、大平遺跡、野々脇遺跡、野原遺跡、下鶴遺跡がある（第3図）。まずは、今回の検討遺跡である、早期関係の調査が行われた頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡、頭地C遺跡、頭地松本A遺跡、大平遺跡、野々脇遺跡、野原遺跡を取り上げ、その具体的な内容について見ていくことにしたい。

なお、川辺川とその支流の五木小川の合流地点周辺よりも上流には下鶴遺跡もあるが、調査が行われておらず、今回の検討から外している。

（1）頭地田口A遺跡

頭地は、川辺川とその支流の五木小川が合流する土地で交通の要所でもあり、平坦地も広く五木谷の中心地となっている。そこに五木谷の中ではもっとも広い河岸段丘がある。また、川辺川左岸山腹中には、東側の山腹から西方へと舌状に延びる、4本の丘陵によって形成された、半月形の平面形を呈する緩やかな傾斜地（以下、「緩やかな傾斜地」という。）が広がっている（第4図）。

頭地田口A遺跡（熊本県教育委員会2002）は、緩やかな傾斜地を構成する4本の丘陵の中、その中央北側を走る丘陵の先端にある遺跡である。標高は320～310mで、川辺川からの比高差



第3図 五木谷の位置と関係遺跡

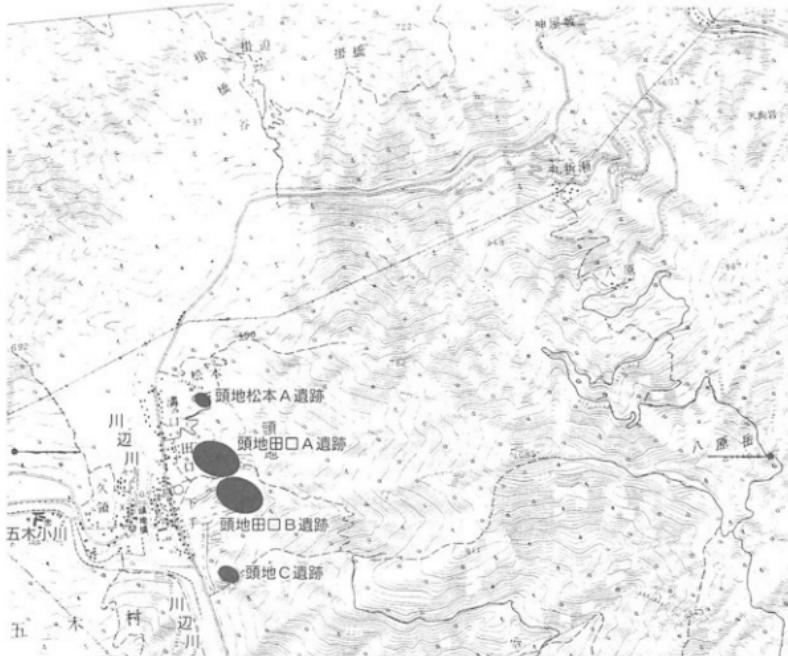
は約80~70m。2つの川の合流点を間近に見下ろせるポイントである。前稿（木崎2005a）において設定した合流地山腹遺跡に該当する。

早期の土器には、岩本式土器（以下、土器を略して「○式」、「○文」という。）や吉田式、中原式、押型文、平柄式、手向山式、塞ノ神式、撫糸文、条痕文などがあった（第5図～第6図）。石器は、2696点が検出された。その内訳は、石鏨1908点、石槍33点、搔器5点、削器8点、石匙112点、楔形石器6点、揉錐器6点、環状石斧3点、打製石斧1点、礫器8点、石錘3点、磨石・敲石490点、石皿・台石113点であった。また、石製品も18点が検出された。トロトロ口石器6点、十字形・半月形・三日月形・糸巻状12点があった（第7図）。

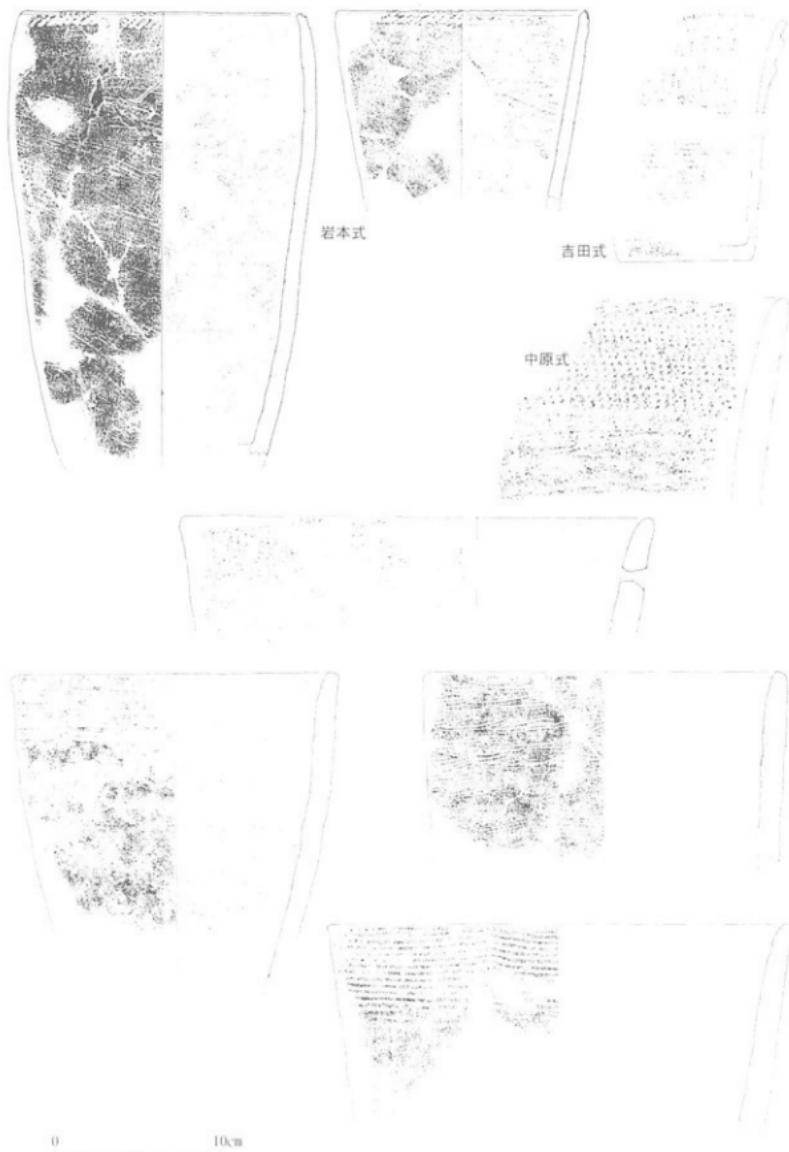
早期の遺構としては、石組垣や集石、土坑があった。5層で確認されたもの、4層で確認されたものがあったので、層ごとに見ていこう。

5層中の遺構については、集石9基、土坑10基と報告されているが、その状況を検討した結果、ここでは石組垣2基、集石7基、土坑10基と認識しておきたい。

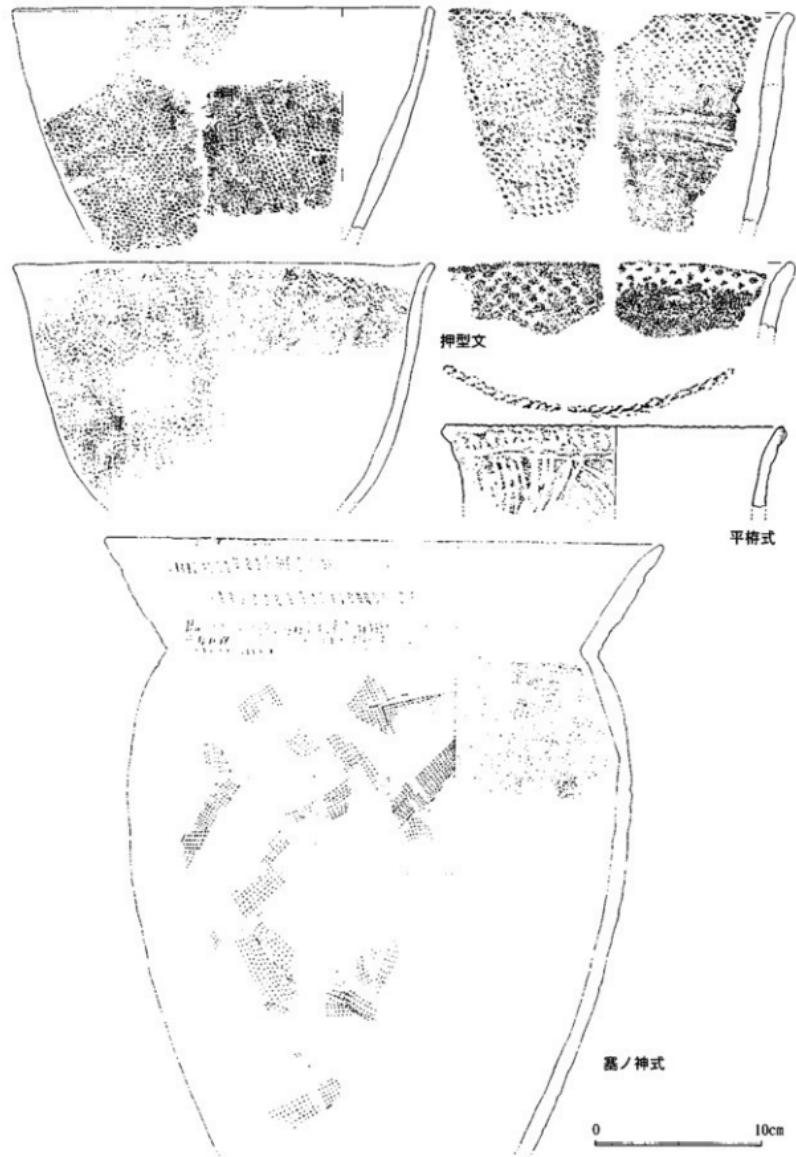
1基の石組垣（第8図）は、扁平な石8個を花弁状に配置して作られていた。長軸0.6m、短軸0.5mのほぼ円形を呈したものであった。受熱により、赤変した扁平な石、その中に入り込



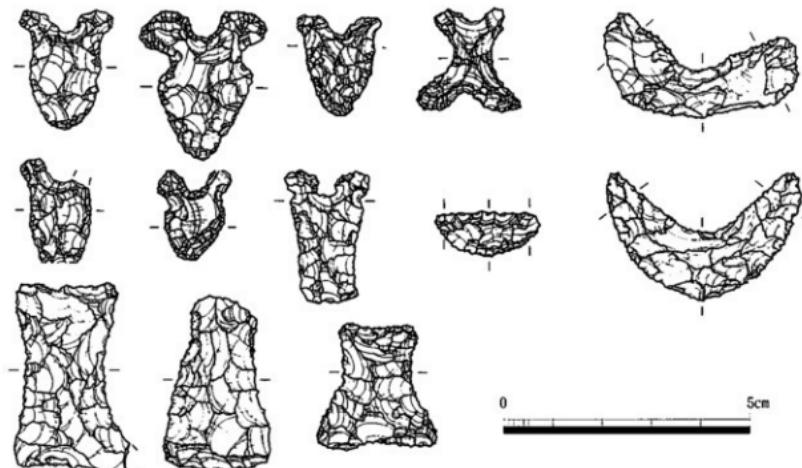
第4図 頭地一帯の地形図



第5図 頭地田口A遺跡の土器（1）



第6図 頭地田口A遺跡の土器（2）



第7図 頭地田口A遺跡の石製品

んだ焼けた礫41個、と明らかに炉と認識できるものであった。もう1基の石組炉（第8図）は、集石として報告されているが、石組炉の可能性が高いものである。掘り込みを確認されていないが、厚さ0.2m弱の礫集積が認められること、礫集積の最下面で板状の扁平な石が水平に造されていたことから、そのように判断した。おそらく、石組炉が破損したものであろう。

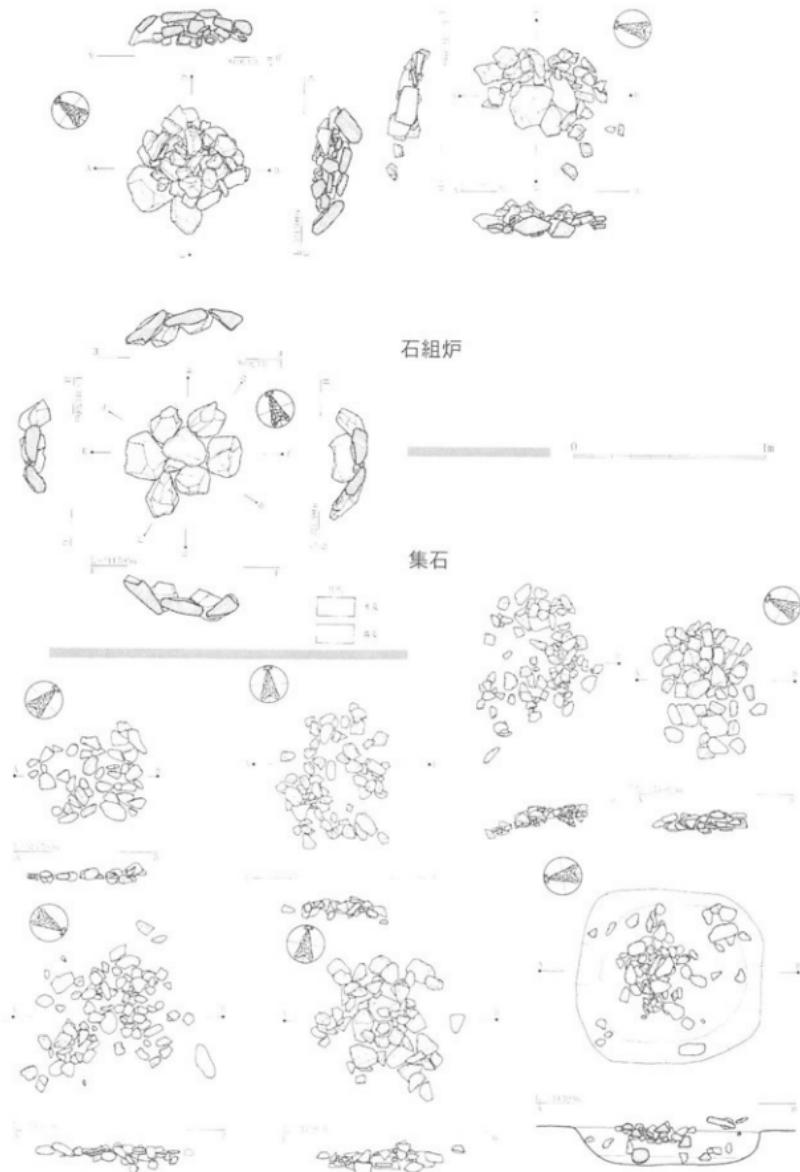
なお、これらは、火を使った厨房施設と認識することができるだろう。

集石（第8図）は、集中的に集まった数10個～100個程度の石の単位として認識できる¹¹。通常、下部造構として掘り込みを伴うもの²²と、伴わないもの³³があるが、5層で掘り込みを伴ったものは無かったようだ。石の集合の状況は、0.5m～1m前後の円形若しくは梢円形を呈していた。構成する石は、円礫と破碎礫で、ほとんど受熱によって赤変していた。

なお、これらの集石については、註3）の中で「使用前礫の仮保管、使用済み礫の集積、そしてそれらの崩壊過程を示すものと認識するのが合理的な理解」と指摘したように、生活に係わる直接的な施設と認めるることはできないだろう。従って、5層の厨房施設としては、石組炉2基ということになろう。

土坑には、浅い皿状のものと深いピーカー状のものがあった。

皿状のもの（第8図）は、1基であった。報告では、集石に伴うものと認識されていた。ただし、状況的には両者は分離できるものと判断した。長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸方形を呈し、深さ0.2mであった。機能については、不明であるが、石組炉からの石材抜き取りの可能性もある。



第8図 頭地田口遺跡の石組炉、集石（5層）

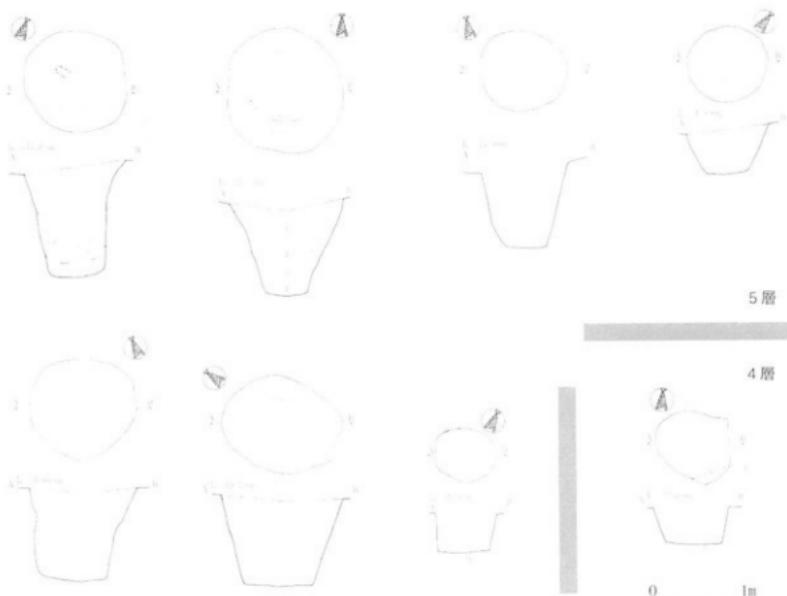
ピーカー状のもの（第9図）は、9基であった。直径1m前後の円形を呈し、深さ1m前後のもの、0.8m～0.5m前後の円形を呈し、深さ0.8～0.5m前後のものがあった。機能としては、埋土の状況¹¹から墓ではなく、貯蔵穴である可能性が高い。

4層で確認された遺構としては、集石12基、土坑5基と報告されている。

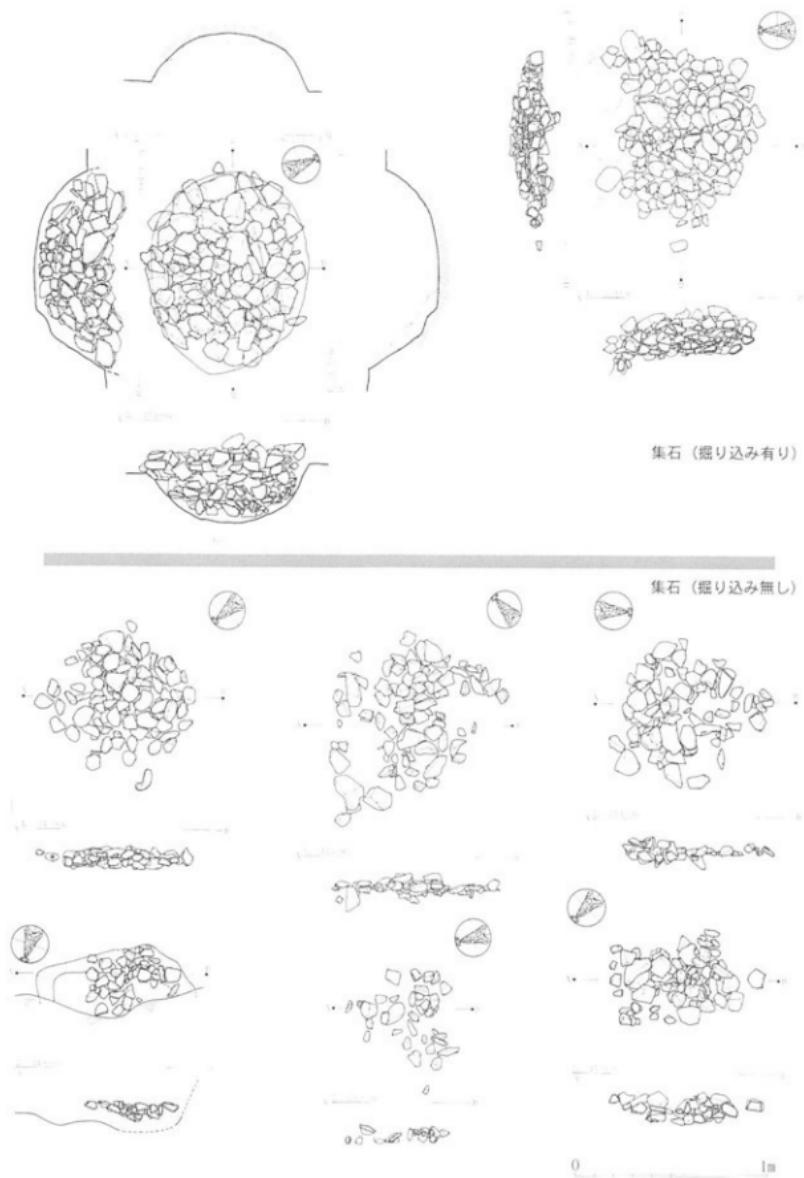
集石（第10図、第11図）には、掘り込みを作うものと、伴わないものがあった。

掘り込みを作うもの（第10図）は、2基であった。その中の1基は、一部が風倒木によって破壊されていたが、長軸0.9m、短軸0.8mの円形を呈する範囲で、厚さ0.2mの間に241個の石が充満していた。調査では土坑の確認が行われていなかったが、ほぼ石の充満範囲を基準にその規模や形状を推測できる。礫の最下面から5cmほどの深さまで炭化物が顯著に認められたというから、火を使った厨戸施設と認識することができるだろう。もう1基は、長軸1.05m、短軸0.83mの楕円形を呈し、深さ0.4mの土坑内に282個の石が充満していた集石であった。土坑の底面から7cmほどの深さまで炭化物が認められたという。こうした状況から厨戸施設と認識することができるだろう。

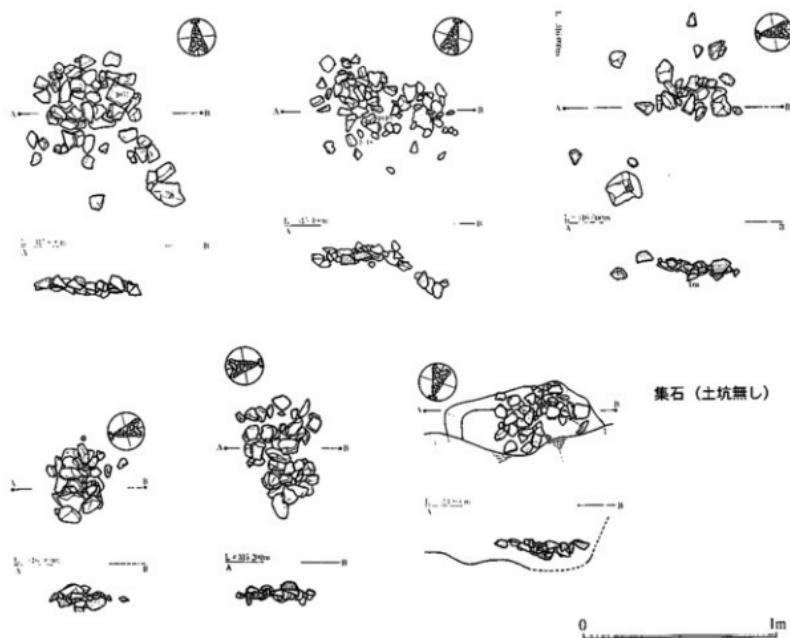
土坑を作わないもの（第10図、第11図）の石の集合状況は、0.4m～1m前後の円形若しくは楕円形を呈していた。構成する石は、円礫と破碎礫で、ほとんど受熱によって赤変していた。



第9図 頭地田口遺跡の土坑



第10図 頭地田口遺跡の集石（4層）（1）



第11図 頭地田口遺跡の集石（4層）（2）

これらは、先述したように、厨房施設と認識することができないだろう。

従って、4層の厨房施設としては、集石2基ということになろう。

土坑には、浅い皿状のもの（第11図）と一端が極端に深くなったものがあった。

皿状のものは、1基であった。長軸0.78m、短軸0.71mの円形を呈し、深さ0.41mであった。

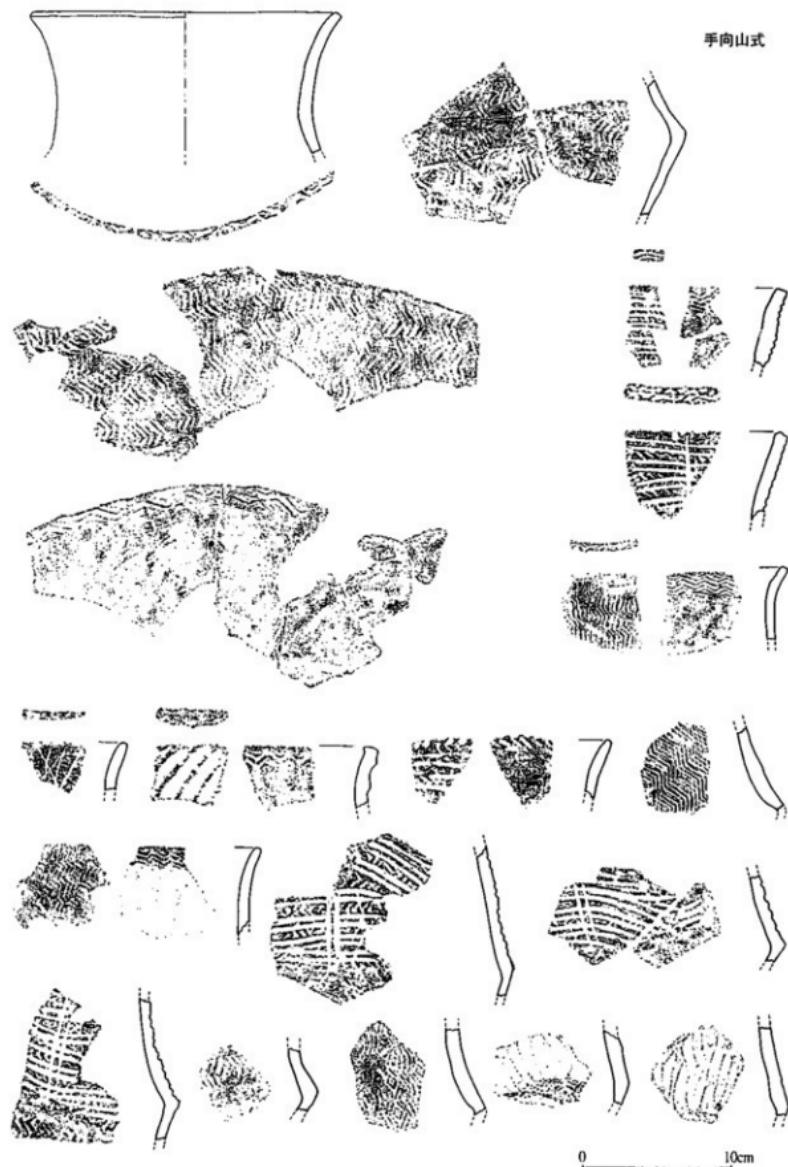
機能については、不明である。

一端が極端に深くなったものは、4基であった。長軸1.42m～0.77m、0.81m～0.61mの梢円形を呈している。機能については、不明であるが、この種の「掘り込み」を検討した東和幸氏によれば「地下茎植物採掘痕」の可能性があるという（東2001）。この見解には同意できるところがある。この見解に従えば、この種は、集落に付属する施設と認めることはできないだろう。

従って、4層の土坑としては、1基ということになろう。

(2) 頭地田口B遺跡

頭地田口B遺跡（五木村教育委員会1997）は、緩やかな傾斜地を構成する4つの丘陵の中、



第12図 頭地田口B遺跡の土器

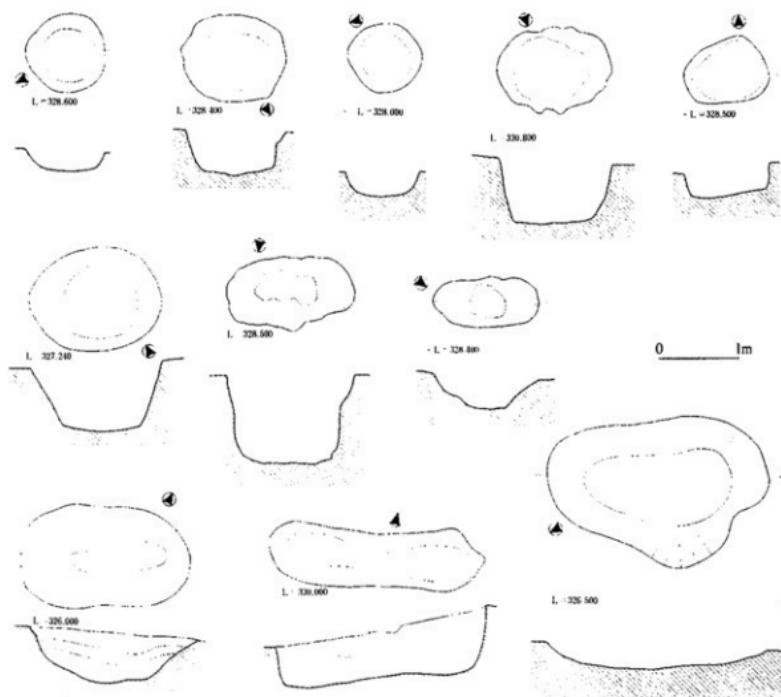
その中央南側を走る丘陵の基部付近にある（第4図）。頭地田口A遺跡が位置する丘陵の南隣りの丘陵に当たっている。前稿（木崎2005a）において設定した合流地山腹遺跡に該当する。

土器は、手向山式であった（第12図）。石器は、91点が出土した。その内訳は、石鏃48点、削器10点、石匙4点、抉入石器1点、石錐1点、二次加工ある不定形石器1点、使用痕ある剥片26点であった。

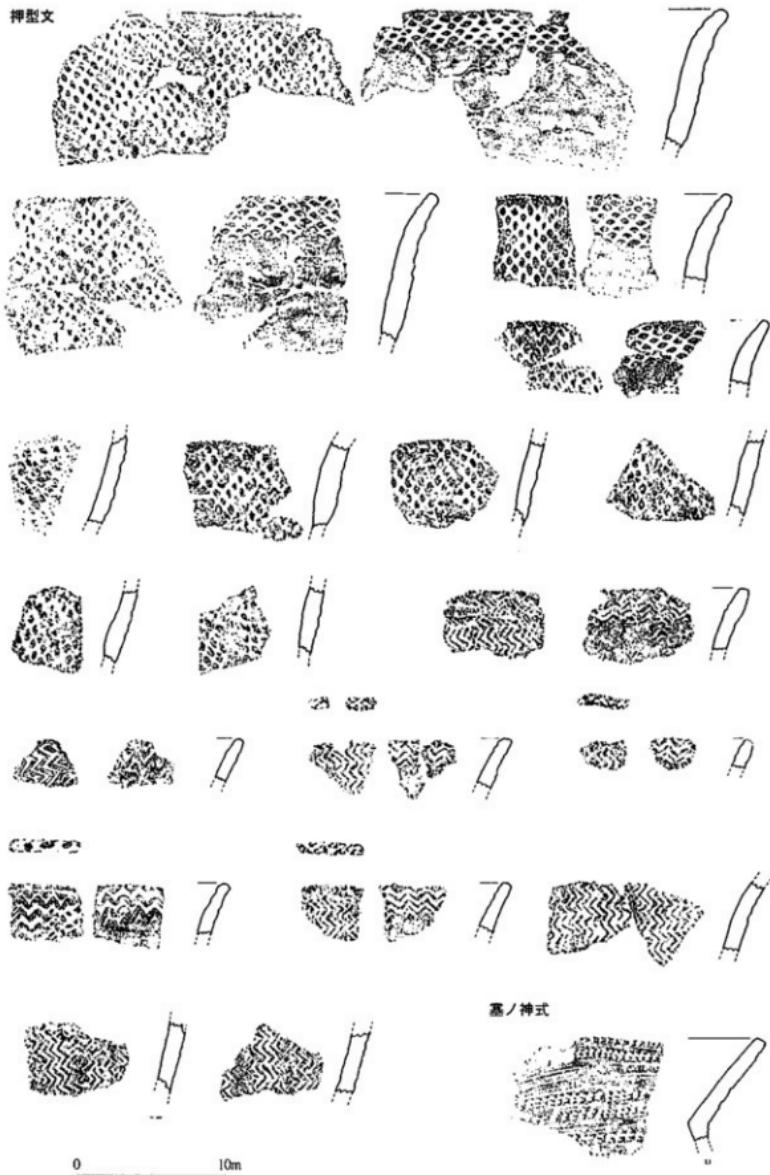
遺構としては、17基の土坑（第13図）があった。平面形が楕円形を呈するものと、円形を呈するものがあった。楕円形を呈するものには、長軸2.3m、短軸1.6m、深さ0.5mのものと長軸2.27m、短軸0.65m、深さ0.45mのものが最大で、後は長軸1.77m～1.11m、短軸1.08m～0.5mのものがある。円形を呈するものは、1m～0.7mのものであった。

(3) 頭地C遺跡

頭地C遺跡（五木村教育委員会1996）は、緩やかな傾斜地を構成する4本の丘陵の中、その



第13図 頭地田口B遺跡の土坑



第14図 頭地C遺跡の土器

南端を走る丘陵にある（第4図）。標高は300m前後で、川辺川からの比高差は約50mを測り、2つの川の合流点を間近に見下ろせるポイントである。前稿（木崎2005a）において設定した合流地山腹遺跡に該当する。

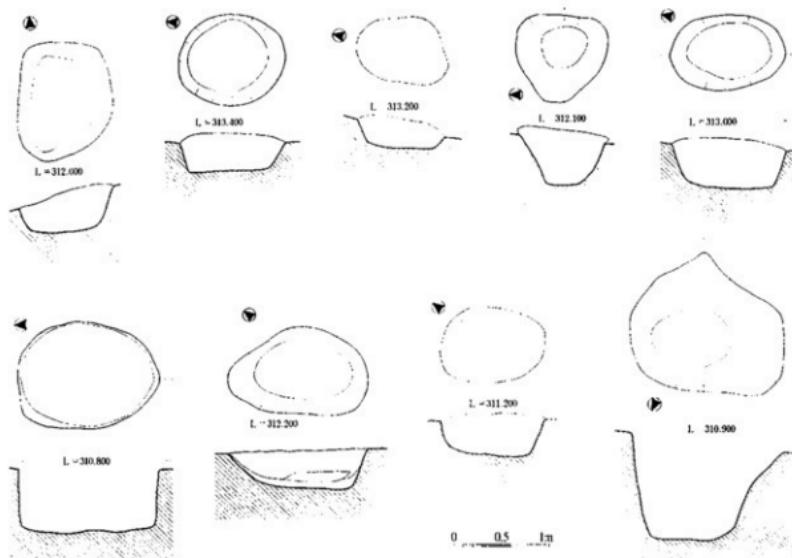
土器では、押型文が中心で、塞ノ神式が1点出土している（第14図）。石器類では、26点が出土した。その中、石器では、石鏃5点、削器3点、石匙1点、礫器1点、磨石・敲石7点、石皿・台石3点、二次加工ある不定形石器2点があった。

造構としては、土坑9基があった。1.6m～0.8m前後の円形若しくは楕円形を呈するもので、深さは1.05mを越えるものを最深として、0.7m～0.3mであった。

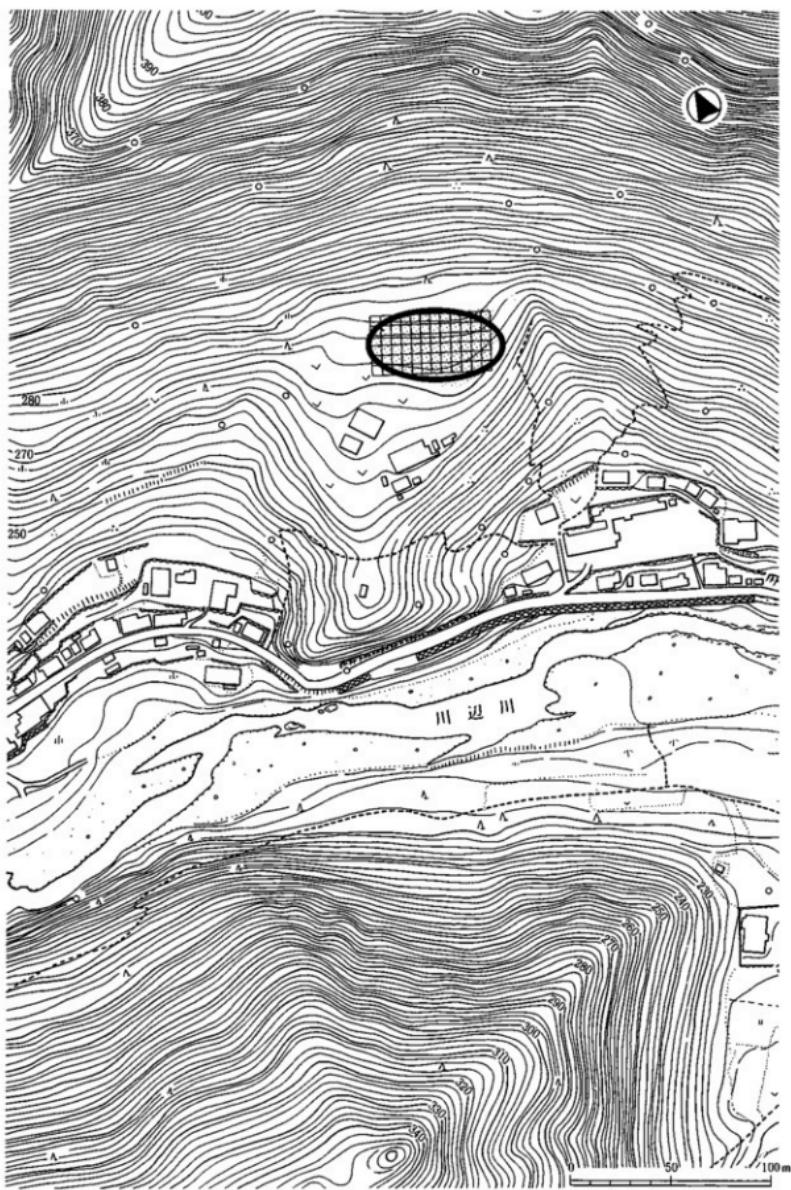
（4）頭地松本A遺跡

頭地松本A遺跡⁷⁾は、緩やかな傾斜地を構成する4本の丘陵の中、その北端を走る丘陵にある（第4図）。標高は380～370m前後で、川辺川からの比高差は約80～70mを測る。前稿（木崎2005a）において設定した合流地山腹遺跡に該当する。

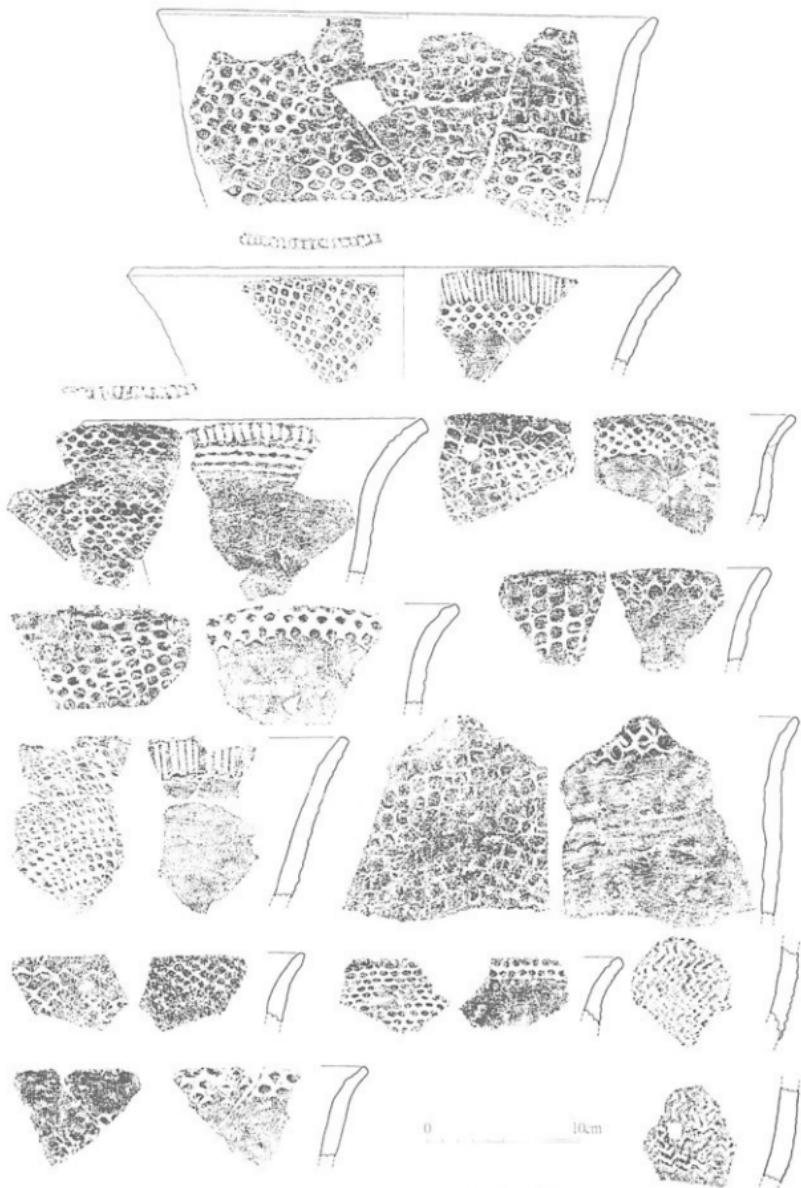
土器では、押型文、無文がそれぞれ数点出土している。石器類も20点ほどと僅かで、石器では石匙1点、楔形石器2点であった。



第15図 頭地C遺跡の土坑



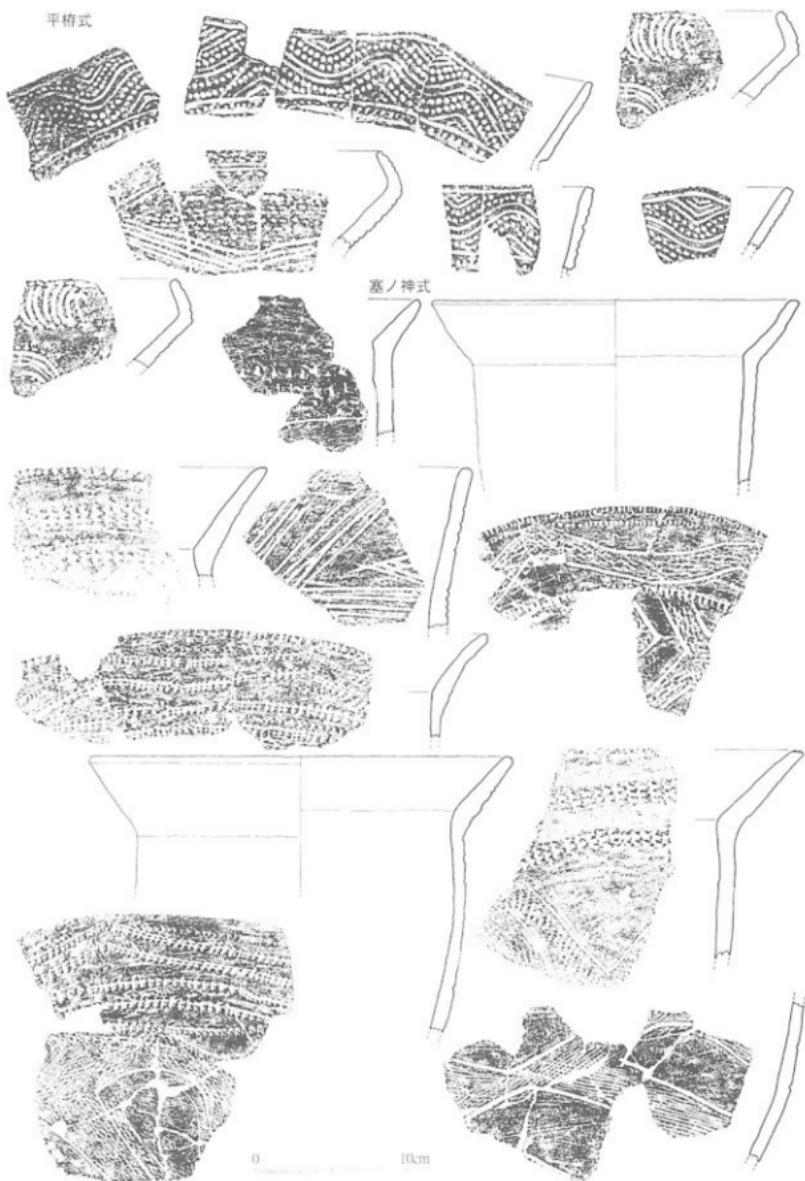
第16図 野々脇遺跡周辺地形図



第17図 野々脇遺跡の土器（1）（押型文）



第18図 野々脇遺跡の土器（2）（燃条文、手向山式）



第19図 野々脇遺跡の土器（3）（平柄式、塞ノ神式）

遺構は、伴っていない。

(5) 大平遺跡

大平遺跡¹¹⁾は、五木村大平の、川辺川に沿うV字谷左岸山腹の急な斜面の中でも少し傾斜を緩くした土地にあった。標高は250m～240mである。前稿（木崎2005a）において設定したV字谷山腹遺跡に該当する。

整理作業中でもあり、具体的な内容は明らかでないので、その概略を紹介する。土器では、中原式が中心で、それに押型文などが伴っている。石器では、石鏃がもっとも多く40点前後を数え、他に、削器、石匙、石錘、磨石・敲石、石皿・台石などがあった。石鏃以外では、磨石・敲石が20点前後と多かった。

遺構には、集石2基があった。

(6) 野々脇遺跡

野々脇遺跡（五木村教育委員会1995）は、五木村野々脇の、川辺川に沿うV字谷左岸山腹に舌状に張り出した傾斜のある段丘上にある。標高は270mで、川辺川からの比高差は約125mである（第16図）。前稿（木崎2005a）において設定したV字谷山腹遺跡に該当する。

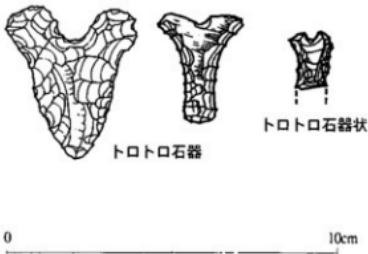
早期の土器では、押型文、手向山式、平柄式、塞ノ神式があった（第17図～第19図）。石器は、158点出土した。その内訳は、石鏃65点、石槍2点、削器13点、石匙4点、抉入石器2点、石錐1点、楔形石器1点、磨製石斧1点、磨石・敲石219点、石皿・台石28点、二次加工ある不定形石器15点などであった。石製品としては、2点があった。トロトロ石器1点、トロトロ石器状の石製品1点であった（第20図）。

遺構については、集石9基、土坑21基と報告されているが、その状況を検討した結果、ここでは石組炉の可能性のあるもの1基、集石8基、土坑21基と認識しておきたい。

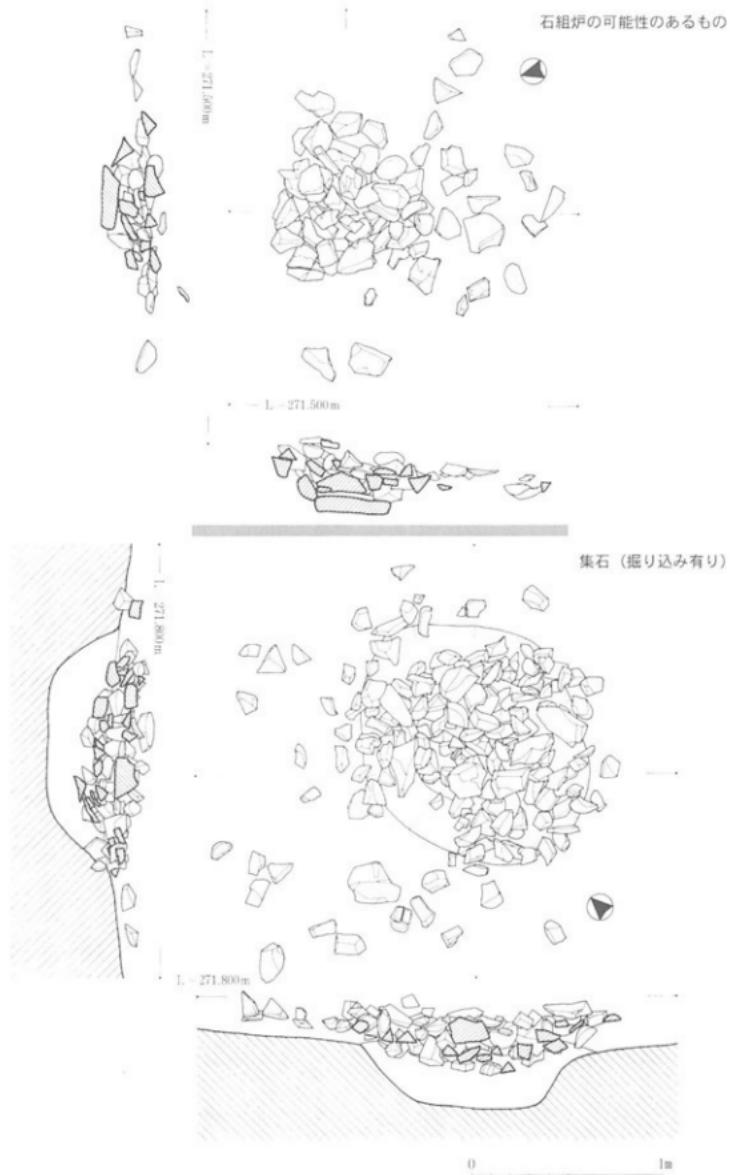
石組炉の可能性のあるもの（第21図）の認定については、掘り込みを確認されていないが、厚さ0.3m弱の礫集積が認められること、その集積状況が皿状を呈していること、礫集積の最下面に板状の扁平な石が水平にあることから、そのように判断した。そうであるならば、長軸1.0m、短軸0.6mの大きさの石組炉となるだろう。

集石には、掘り込みを伴うものと、伴わないものがあった。

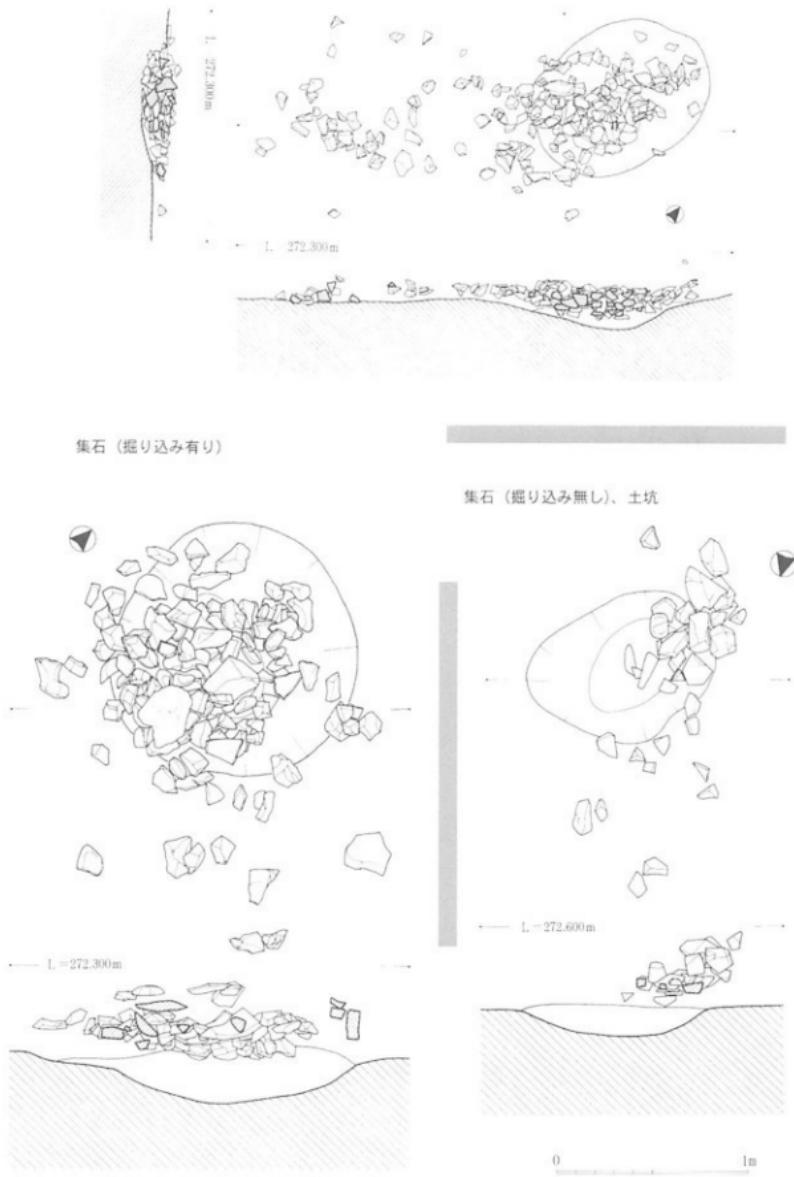
掘り込みを伴うもの（第21図、第22図）は、



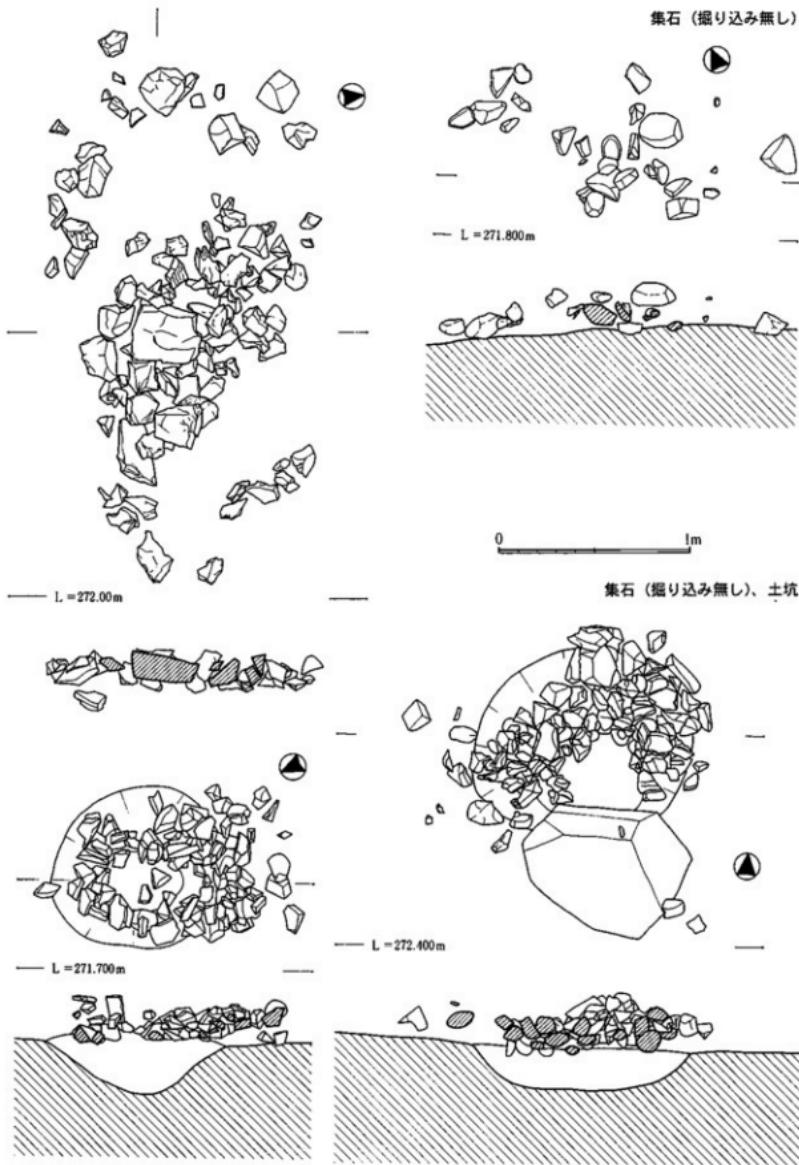
第20図 野々脇遺跡の石製品



第21図 野々脇遺跡の石組炉、集石



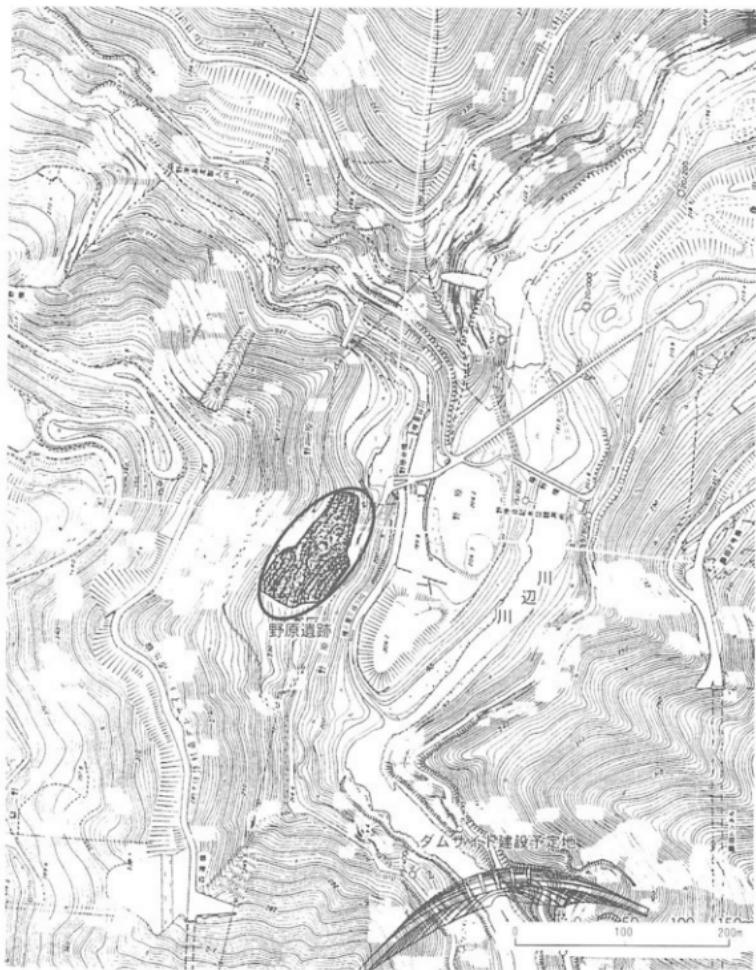
第22図 野々脇遺跡の集石（1）



第23図 野々脇遺跡の集石 (2)

3基があった。礫を充満させた集石で、直径0.9m、0.8mの円形を呈するもの2基、長軸1.0m、短軸0.8mの楕円形を呈するもの1基がある。

上坑を伴わないもの（第22図、第23図）は、5基があった。石の集合の状況は、長軸2.7m、短軸1mを最大に、長軸0.9m～0.6m、短軸0.6m～0.5mの楕円形のもの、長軸0.5m、短軸0.5mの円形のものがある。ただし、礫の集合状況は、ほとんどが不正形であったり、集合が



第24図 野原遺跡周辺地形図

散在的であったりしている⁵⁾。これらは、生活に係わる直接的な施設と認めることはできないだろう。

土坑には、21基があった。その形状は、楕円形を呈するものが中心で、円形のもの、不正形のものがあった。楕円形のものは、長軸2.3m～0.65m、短軸1.05m～0.3mと、大きさでもばらつきがある。円形のものは、直径が0.95m～0.85mであった。また、不整形なものも3基ほど確認された。これらの遺構の機能については、堆積状況⁶⁾から墓の可能性は低く、一部貯蔵穴と考えることもできる。

(7) 野原遺跡

野原遺跡⁷⁾は、相良村野原の、川辺川に沿うV字谷右岸山腹の急斜面の中でも少し傾斜を緩くした土地にあった(第24図)。標高は230～210mで、川辺川と遺跡中心域との比高差は約40～35mである。前稿(木崎2005a)において設定したV字谷山腹遺跡に該当する。

早期の土器では、中原式、押型文、撫糸文があった。石器は、104点が出土した。その内訳は、石鏃91点、磨製石斧1点、石錐3点、磨石・敲石8点、石皿・台石1点であった。

遺構としては、石組炉2基、集石10基、土坑16基があった。石組炉は、遺存状態が芳しくないのが、土坑底面に板石が見られるものであった。集石には、掘り込みを伴うものと、伴わないものがあった。掘り込みを伴うものは4基、土坑を伴わないものは6基であった。これらの中、土坑を伴わないものは、先に指摘したように、厨房施設と認識することができないだろう。従って、厨房施設としては、石組炉2基、集石4基ということになろう。

3 五木谷における早期の石器相

これまで関係する遺跡についてその概要を紹介してきた。そこで、次には、それぞれの遺跡の石器組成を検討するが、その手順を、前稿(木崎2005a)に従い、遺跡の規模と立地の概観、それから見た遺跡の類型化、その後の石器相の検討、そしてその評価、という段階を踏みながら進めていきたい。

なお、検討を進めるうえの遺跡の規模と立地の概観においては、前稿(木崎2005a)で提示した合流地山腹遺跡(川辺川とその支流の五木小川の合流地点周辺にある遺跡)とV字谷山腹遺跡(川辺川沿いのV字谷にある遺跡)に分けて行うこととした。

(1) 遺跡の規模と立地

① 合流地山腹遺跡

合流地山腹遺跡としては、頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡、頭地C遺跡、頭地松本A遺跡がある。これらは、その規模や内容から、大きく3つにまとめることができる。

1つ目の遺跡には、頭地田口A遺跡が該当する。川辺川からの比高差が80m程の高所にある遺跡である。その緩やかな傾斜地の中での位置は、その中央部にあり、しかもその先端近くである。この傾斜地は東側の山腹から舌状に延びる4つの丘陵によって形成されているが、この遺跡は、その中でももっとも広い丘陵上にある。土地の傾斜は、10%の勾配であった。

遺跡の内容をかいとまんで整理してみよう。

土 器：岩本式、吉田式、中原式、押型文、平椿式、手向山式、塞ノ神式、撚糸文、条痕文。

石 器：石鏃（1908点）や石槍（33点）、搔器（5点）、削器（8点）、石匙（112点）、楔形石器（6点）、揉錐器（6点）、環状石斧（3点）、打製石斧（1点）、礫器（8点）、石鎌（3点）、磨石、敲石（490点）、石皿・台石（113点）。

石 製 品：トロトロ石器（6点）、十字形・半月形・三日月形・糸巻状の石製品（12点）。

生活施設：5層 石組炉2基、土坑10基。

4層 集石2基、土坑1基。

これら、遺跡の内容は、質量共に、他の遺跡を凌駕するものである。多様な土器型式、多量な遺物量、遺構が示すように、この場所は、早期の初頭から終わり頃まで、という長い期間、断続的にでも集落として利用されていたものと考えができるだろう。

2つ目の遺跡には、頭地田口B遺跡、頭地C遺跡が該当する。

頭地田口B遺跡は、その緩やかな傾斜地の中央部の広い丘陵上にある。この遺跡では、手向山式に伴って、石鏃（48点）、削器（10点）、石匙（4点）、抉入石器（1点）、石錐（1点）が検出された。また、遺構としては、17基の土坑があった。石鏃、削器、石匙など、狩猟具や二次的な処理のための石器が伴っていること、土坑という生活施設が伴っていることから、この場所は、早期の中頃、という限られた時期（手向山式）に集落として利用されていたものと考えられる。

頭地C遺跡は、その緩やかな傾斜地の中の南端の狭い丘陵上にある。土器では、塞ノ神式が1点出土したのみで、残りは押型文であった。石器には、石鏃（5点）、削器（3点）、石匙（1点）、礫器（1点）、磨石、敲石（7点）、石皿・台石（3点）、二次加工ある不定形石器（2点）が検出された。遺構には、土坑9基があった。石鏃、削器、石匙という狩猟具や二次的な処理のための石器、磨石、敲石、石皿・台石というドングリ類処理のための石器が伴っていること、土坑という生活施設が伴っていることから、この場所は、早期の前半と終わり頃、という限られた時期（押型文、塞ノ神式）に集落として利用されていたものと考えられる。

3つ目の遺跡には、頭地松本A遺跡が該当する。その緩やかな傾斜地の中での位置は、その南端や北端のような狭い丘陵上である。また、頭地松本A遺跡では、僅かな土器（押型文、無文）と僅かな石器（石匙1点、楔形石器2点）の出土だけであった。また、遺構も存在していないかった。この状況から、この場所は、集落として利用されていなかったものと考えられる。

② V字谷山腹遺跡

川辺川とその支流の五木小川の合流地点周辺を過ぎれば、川辺川沿いの急峻なV字谷に至る。このV字谷は、細長く蛇行しながら、およそ16km続いている。ここでも早期の遺跡は存在する。ただし、その立地は、急な傾斜地の中腹に僅かに広がる狭窄な土地であったり、中腹から短く突き出た傾斜のある段丘であったりしている。その遺跡をあげれば、大平遺跡、野々脇遺跡、野原遺跡がそれである。これらは、その規模や内容から、大きく2つにまとめることができる。

1つ目の遺跡には、野々脇遺跡が該当する。V字谷の中腹に舌状に張り出した傾斜のある段丘上にある遺跡である。この一帯では、比較的広い面積が確保できる土地である。

遺跡の内容をかいづまんで整理してみよう。

土 器：押型文、手向山式、平椿式、塞ノ神式。

石 器：石鏃（64点）、石槍（2点）、削器（13点）、石匙（4点）、抉入石器（2点）、石錐（1点）、楔形石器（1点）、磨製石斧（1点）、磨石・敲石（219点）、石皿・台石（28点）。

石製品：トロトロ石器（1）、トロトロ石器状の石製品（1）。

遺 構：集石3基、土坑21基。

この内容から多様な土器型式から早期の前半から終わり頃までという長い期間、断続的にでも集落として利用されていた場所であったと考えることができるだろう。

2つ目の遺跡には、大平遺跡、野原遺跡が該当する。

大平遺跡は、V字谷左岸の山腹の一角、傾斜を少し緩くした狭窄な土地にあった。中原式を中心で、それに押型文などの土器、石鏃、削器、石匙、石錐、磨石・敲石、石皿・台石などの石器、集石2基があった。この場所は、早期の中頃という限られた時期（手向山式）に集落として利用されていたものと考えられる。

野原遺跡は、V字谷右岸の山腹の一角、少し傾斜を緩くした狭窄な土地にあった。中原式、押型文、燃糸文の土器、石鏃（91点）、磨製石斧（1点）、石錐（3点）、磨石・敲石（8点）、石皿・台石（1点）の石器、石組炉2基、集石4基、土坑の遺構があった。これらの場所は、早期の前半という限られた時期（中原式、押型文）に集落として利用されていたものであったが、その利用の頻度は、極めて低かったと考えられる。

(2) 規模と立地から見た遺跡の類型

これまで、関係する遺跡について、前稿（木崎2005a）において設定した合流地山腹遺跡とV字谷山腹遺跡に分け、それぞれの遺跡の時期、石器組成、規模を紹介してきた。その結果、それぞれに特徴を違える、複数の種類の遺跡が存在することが明らかとなった。

1つ目の種類は、複数の土器型式から窺えるように断続的にでも長い期間に集落として利用されていた遺跡である。合流地山腹遺跡の頭地田口A遺跡とV字谷山腹遺跡の野々脇遺跡が該

当する。2つ目の種類は、限られた時期に集落として利用されていた遺跡である。合流地山腹遺跡の頭地田口B遺跡、頭地C遺跡、V字谷山腹遺跡の大平遺跡、野原遺跡が該当する。3つ目の種類は、限られた時期に利用されていたが、集落として利用されていなかった可能性のある遺跡である。合流地山腹遺跡の頭地松本A遺跡が該当する。

これら3つに取りまとめた遺跡は、立地環境的にも、内容的にも、それぞれに特徴のある遺跡であるが、その共通項として「集落であるか否か」という観点で整理すれば、次のI、IIの2つの類型にまとめることができる。

I類は、1つ目の種類と2つ目の種類の遺跡である。お互いの立地環境に違いはあるが、集落遺跡であるところでは共通している。さらにこの類型は、遺跡の存続時期を基にして、断続的にでも長い期間に集落として利用されていたものと、限られた時期に集落として利用されていたものの2つに細分できる。前者をIa類と、後者をIb類と呼んでおきたい。

Ia類の遺跡には、頭地田口A遺跡や野々脇遺跡が該当する。集落としての遺跡の存続時期、遺物の出土量、遺構の数、立地する丘陵の面積など、他の遺跡とは比較にならない規模を誇っている。このことは、移動を繰り広げていた早期にあって回帰性の強い集落であったことを示すものだろう。

Ib類の遺跡には、頭地田口B遺跡、頭地C遺跡、大平遺跡、野原遺跡が該当する。この遺跡は、1つの土器型式の時期に何回かの集落利用が行われただけで、それ以上はその利用が継続されなかつたことを示すものだろう。

II類の遺跡には、頭地松本A遺跡が該当する。集落ではなく、別の役割が想定される遺跡である。

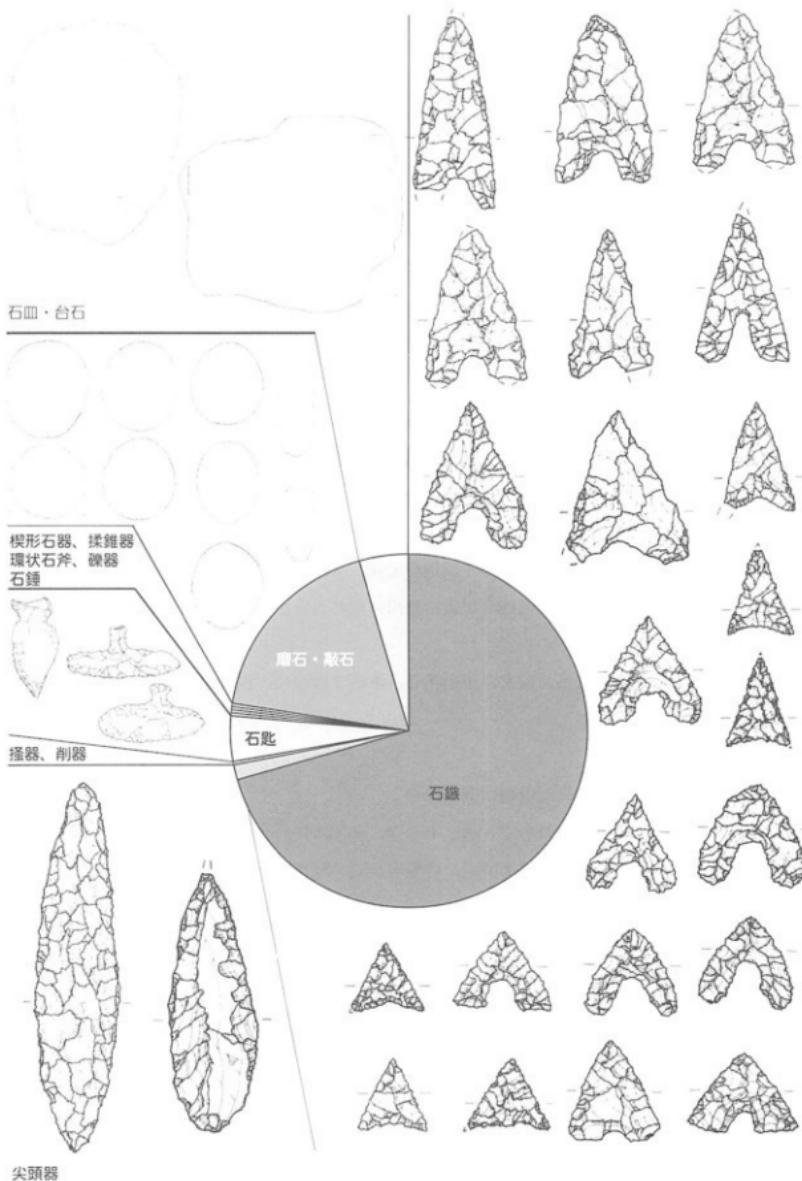
(3) 遺跡類型と石器相から見た遺跡類型の性格

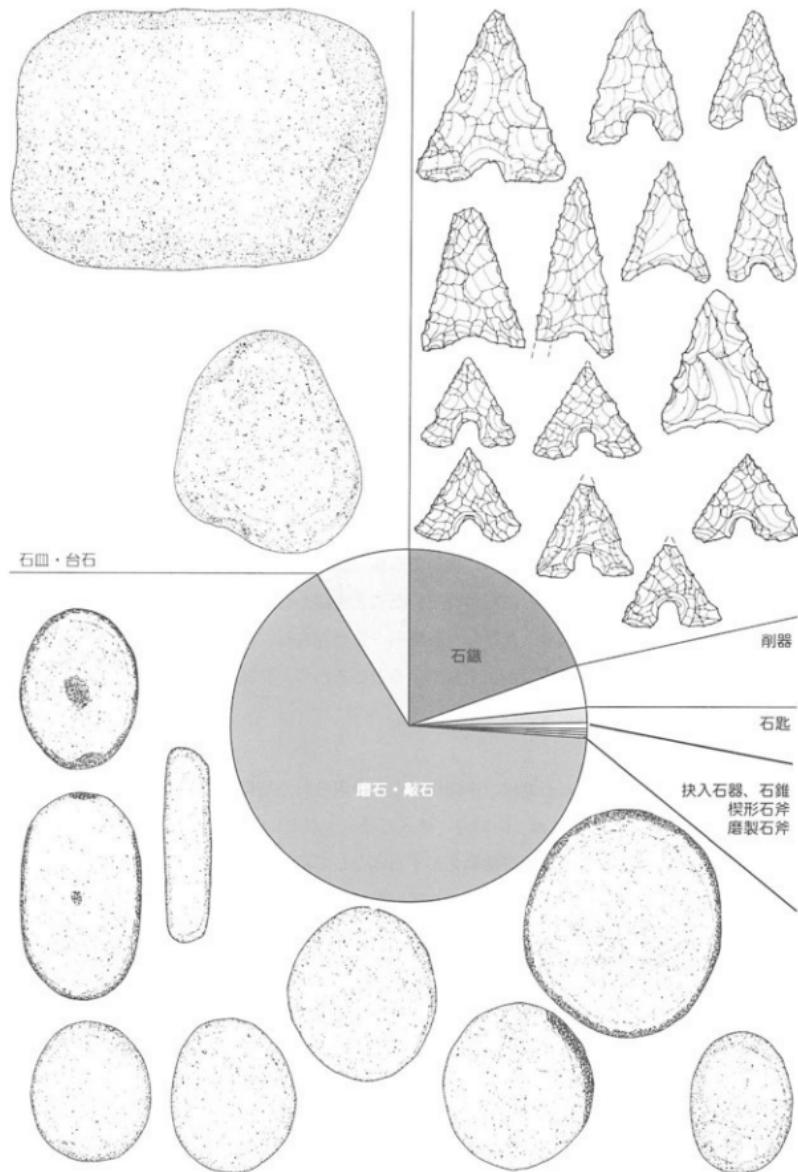
前項において、関係する遺跡をIa類、Ib類、II類という3つの類型に峻別した。そこで、石器相の特徴、遺構の種類を遺跡類型ごとに整理して、遺跡類型の性格をみてみよう。

① Ia類

頭地田口A遺跡で出土した石器は、石鎌（1908点；84.8%）、石槍（33点；1.5%）、搔器（5点；0.2%）、削器（8点；0.4%）、石匙（112点；5.0%）、楔形石器（6点；0.3%）、揉錐器（6点；0.1%）、環状石斧（3点；0.1%）、打製石斧（1点）、礫器（8点；0.4%）、石錘（3点；0.1%）、磨石・敲石（490点；22%）、石皿・台石（113点；5.0%）であった（第25図）。

直接的な食物獲得活動を示す石器としては、狩猟具としての石鎌と石槍、漁労具としての石錘、ドングリ類処理具としての磨石・敲石と石皿・台石が検出されている。その傾向については、石鎌の出土量が極端に多くて全体の85%を占め、次に多いのが磨石・敲石（22%）で、石錘はほとんど無い（0.3%）、というものであった。本来、これらの石器は、使用する場所が異





第26図 野々脇遺跡の石器組成

なったり、使用回数が違っていたりするなど、その比率を単純に比較することはできない（熊本県教育委員会1995）が、ある程度の活動内容を把握することは可能であろう。

まず、狩猟に重点を置いた活動が活発に行われていた可能性が高いだろうことは容易に想像がつく。また、トロトロ石器（6点）、十字形・半月形・三日月形・糸巻状（12点）の石製品という、狩猟祭祀に係わる可能性が指摘されている石製品（木崎1997）が出土していることも重要である。この集落で狩猟祭祀が行われていた、とも考えられ、石鎌の傾向との整合性が注目されるところである。ドングリ類処理については、磨石・敲石が22%という割合で存在することから、行われていたことは確かである。これに対して、漁労については、低調であった可能性が高い。

野々脇遺跡で出土した石器は、石鎌（64点；19.1%）、石槍（2点；0.6%）、削器（13点；3.9%）、石匙（4点；1.2%）、抉入石器（2点；0.6%）、石錐（1点；0.3%）、楔形石器（1点；0.3%）、磨製石斧（1点；0.3%）、磨石・敲石（219点；65.4%）、石皿・台石（28点；8.4%）であった（第26図）。

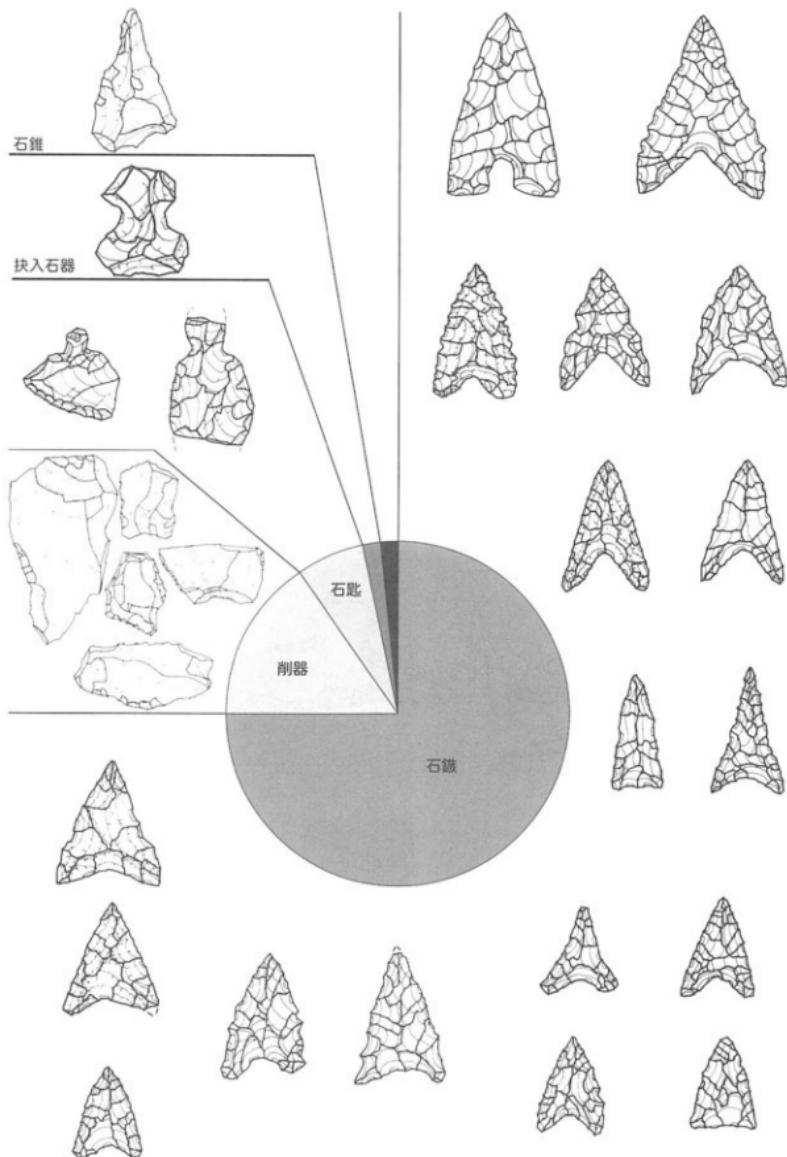
直接的な食物獲得活動を示す石器としては、狩猟具としての石鎌と石槍、ドングリ類処理具としての磨石・敲石と石皿・台石が検出されている。その傾向については、磨石・敲石の出土量が極端に多くて全体の65.4%を占め、次いで石鎌（19.1%）であった。この傾向は、ドングリ類処理を中心とした活動が盛んに行われていたことを窺わせるもので、先に取り上げた頭地田口A遺跡とは逆の関係にある。ただし、石鎌も一定量存在し、かつトロトロ石器（2点）やトロトロ石器状の石製品（1点）が出土しているところから、狩猟やそれに係わる祭祀が行われていたは確かである。

② I b 類

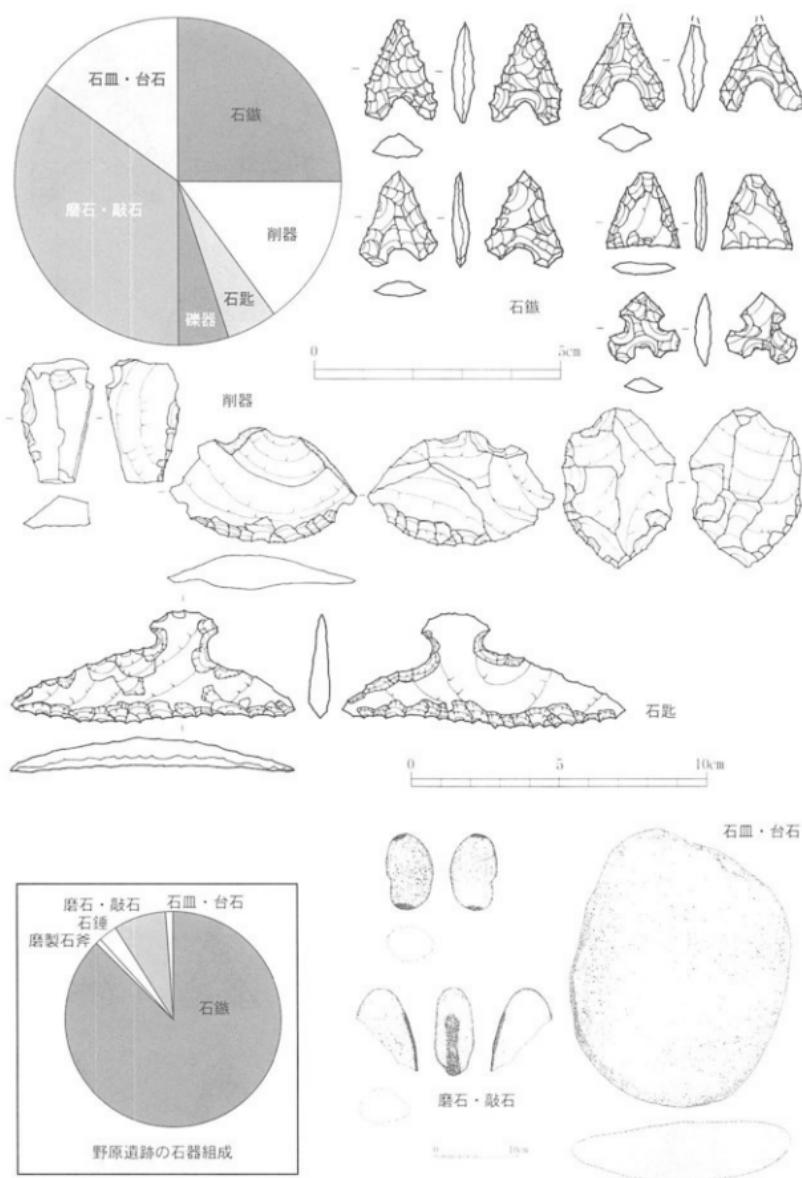
頭地田口B遺跡で出土した石器は、手向山式という限られた時期の、石鎌（48点；75%）、削器（10点；15.5%）、石匙（4点；6.3%）、抉入石器（1点；1.6%）、石錐（1点；1.6%）であった（第27図）。直接的な食物獲得活動を示す石器としては、狩猟具としての石鎌が検出されている。その比率は、75%で、狩猟に重点を置いた活動が活発に行われていた集落の可能性が高いと考えられる。

頭地C遺跡で出土した石器は、押型文、塞ノ神式という限られた時期の、石鎌（5点；25%）、削器（3点；15%）、石匙（1点；5%）、礫器（1点；5%）、磨石・敲石（7点；35%）、石皿・台石（3点；15%）であった（第28図）。直接的な食物獲得活動を示す石器としては、狩猟具としての石鎌、ドングリ類処理具としての磨石・敲石と石皿・台石がある。数量が少なくて明確な比率を求ることは難しいが、両方の活動が行われていた集落の可能性が高いと考えられる。

大平遺跡で出土した石器は、中原式、押型文という限られた時期の、石鎌、削器、石匙、石



第27図 頭地田口B遺跡の石器組成



第28図 頭地C遺跡、野原遺跡の石器組成

錐、磨石・敲石、石皿・台石などであった。直接的な食物獲得活動を示す石器としては、狩猟具としての石鏃、漁労具としての石錐、ドングリ類処理具としての磨石・敲石と石皿・台石がある。点数が明らかでないが、石鏃が多く、磨石・敲石が一定量存在している。

野原遺跡で出土した石器は、中原式、押型文、撲糸文という限られた時期の、石鏃（91点；87.6%）、磨製石斧（1点；0.9%）、石錐（3点；2.8%）、磨石・敲石（8点；7.8%）、石皿・台石（1点；0.9%）であった（第28図）。直接的な食物獲得活動を示す石器としては、狩猟具としての石鏃、漁労具としての石錐、ドングリ類処理具としての磨石・敲石と石皿・台石がある。その傾向については、石鏃の出土量が極端に多くて全体の87.6%を占め、他を凌駕している。この傾向は、狩猟を中心とした活動が盛んに行われていたことを窺わせるものである。

3 第II類

頭地松本A遺跡で出土した石器は、押型文、無文という限られた時期の石匙1点、楔形石器2点だけであった。直接的な食物獲得活動を示すものではなく、動物解体などの二次的な処理のための石器だけであった。

4 五木谷における早期の遺跡連鎖と社会

（1）遺跡類型とその連鎖

五木谷の早期においては、I類の遺跡とII類の遺跡があった。このI類の遺跡とII類の遺跡については、当時の集落（I類）に対する派生的な活動地（II類）という関連で捉えられるものであった（第29図）。さらに、I類の遺跡においては、中心的な集落であったIa類と、限られた時期に集落として利用されていたIb類が存在していた。

そこで、これら、Ia類、Ib類、II類という遺跡類型について、その連鎖関係を定住化社会以前の早期という時代

性も考慮に入れながら、

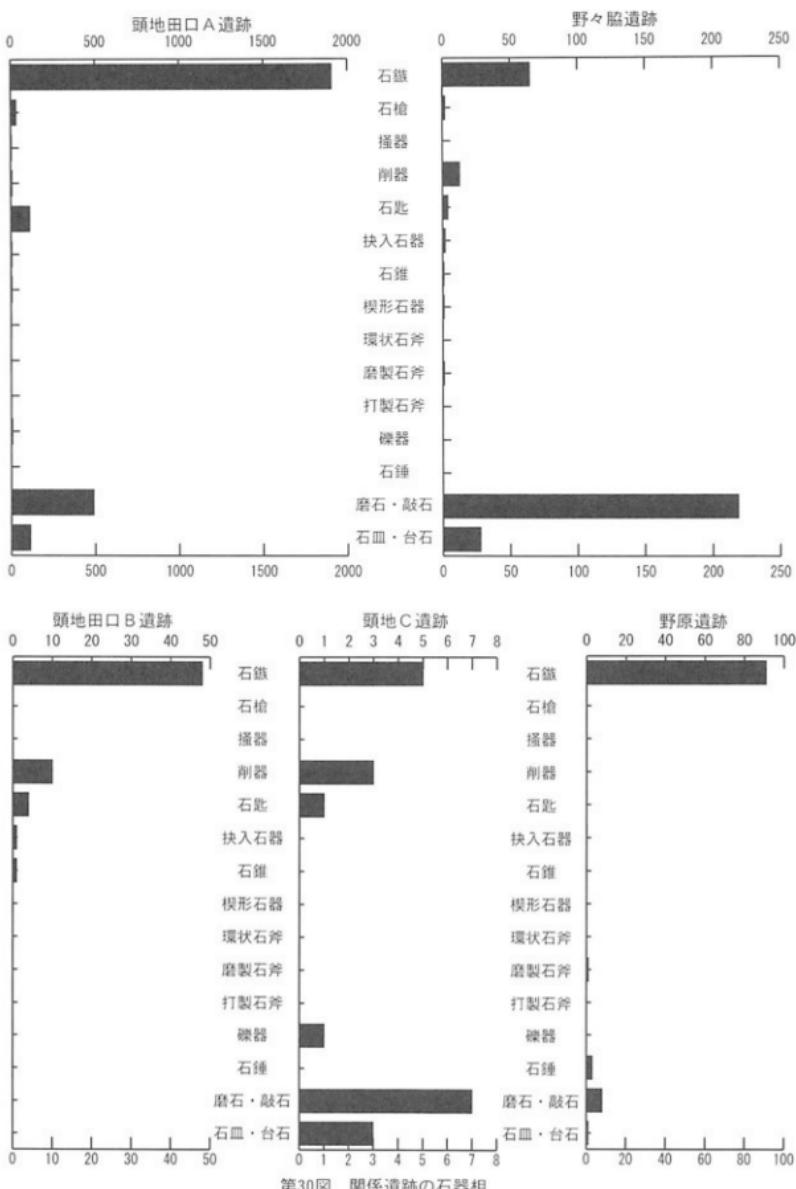
考えてみたい。

前項で見たように、Ia類の頭地田口A遺跡と野々脇遺跡は、石器相において対照的であった（第30図）。それは、石

鏃が際立つ頭地田口A遺跡に対して磨石・敲石が際立つ野々脇遺跡という
もので、これを活動の面



第29図 第I類、第II類位置関係概念図



第30図 関係遺跡の石器相

から換言すれば、狩猟に重点を置いた活動の頭地田口A遺跡に対してドングリ類処理を中心とした活動の野々脇遺跡ということになる。両者は、明らかに主となる活動内容が異なっていたのである。しかも、それぞれの遺跡は、時期幅に差があるとはいっても、中頃から後半期には併存していたのであって、例えば、時期差の関係があると考えることもできないだろう。

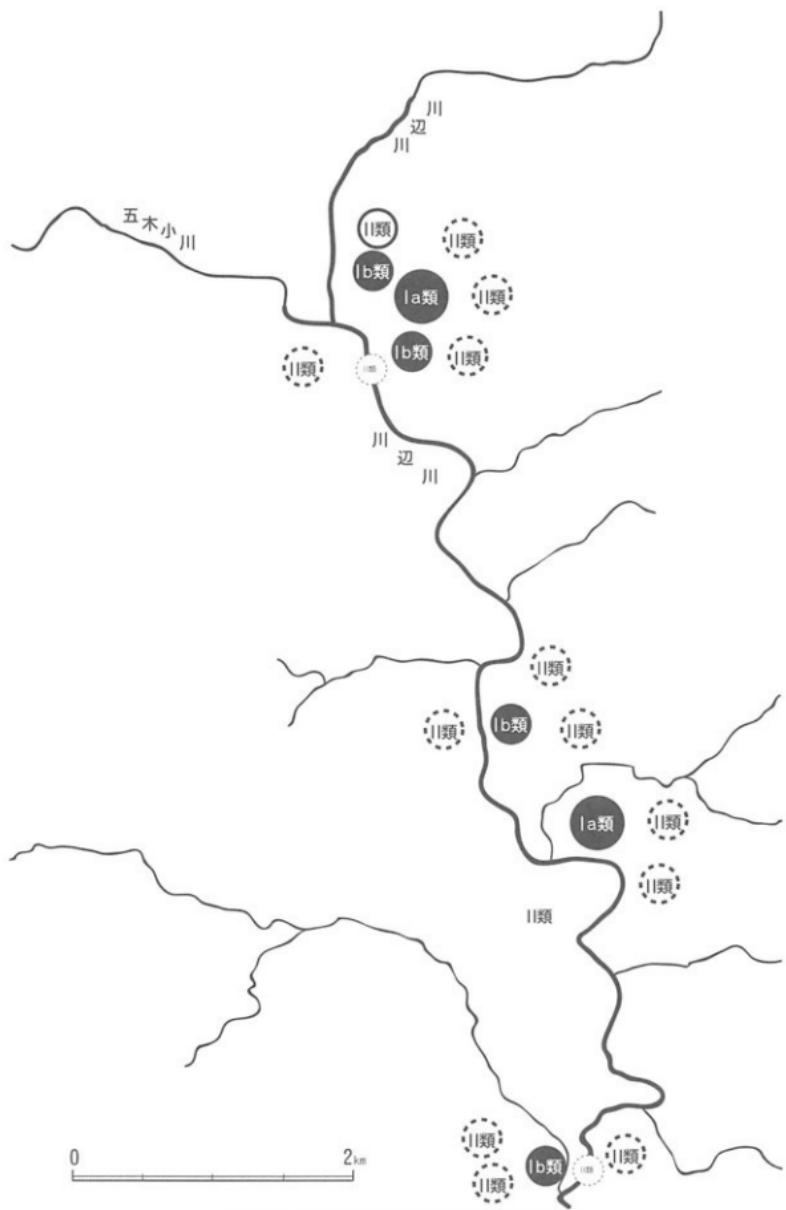
このように考える時、I a類の遺跡の石器相の違いを活動における季節性を反映した活動内容の違いに結びつけるのがもっとも考えやすい。つまり、この2つの遺跡は、決して個々独立したものではなく、集団が移動する過程で残した、各所での活動の結果であった、と評価できるのである。換言しよう。同じ集団が移動生活を行う中で、狩猟を専ら生業の中心においた季節に利用した場所が頭地田口A遺跡であり、ドングリ類の採取とその処理を専ら生業の中心においた季節に利用した場所が野々脇遺跡であった、と評価できるのである。しかも、頭地田口A遺跡の時期が早期の全時期、野々脇遺跡の時期が中頃から後半期というように、どの場所もその利用頻度が高く、回帰性の強い土地であった。

一方、極めて短い期間の限られた時期に集落として利用されていたI b類の遺跡（表）においても、I a類に似た石器相の違いを示す遺跡の存在を予測することができる。それは、すでに前記していることであるが、石器のみが突出した比率の頭地田口B遺跡や野原遺跡の場合（第30図）を例にとれば、うなずけるところである。

ただし、現在のところ、狩猟を専ら生業の中心においた集落や、ドングリ類の採取とその処理を専ら生業の中心においた集落がそれぞれの時期毎に場所を替えて多数存在していた節はない。現実に、こうした遺跡があるとするならば、土器型式毎に遺跡が存在しなければならぬ、相当数が確認されなければならぬはずである。川辺川ダム事業関連の発掘調査でこれほどの遺跡が確認されていないのは、I b類の遺跡が恒常的に残されていたわけではないことを示しているのだろう。そういう意味では、I b類は、I a類を集積させた1つの要素にすぎず、何かの理由でI

表 遺跡の継続

類型 土器型式	遺跡	I a		I b		
		頭地田口A遺跡	野々脇遺跡	頭地田口B遺跡	頭地C遺跡	太古遺跡
縄文時代早期	岩本式	●				
	前平式	●				
	中原式	●			●	●
	押型式（早水台式）	●				
	押型式（下管生B）		●			
	吉田式	●				
	押型式（沈目式）	●	●		●	●
	手向山式	●	●	●		
	平拵式	●	●			
	塞ノ神A式	●	●		●	
	塞ノ神B式		●			



第31図 五木谷における縄文早期集落の展開

a類から臨機的に出たもので、継続性の無いものであったのだろう。狩猟を専ら生業の中心においた集落であるIa類の頭地田口A遺跡の近くに、狩猟を専ら生業の中心においた集落であるIb類の頭地田口B遺跡が存在していることはけっして偶然ではなく、極めて興味深いものである。

以上のように、五木谷の早期におけるIa類、Ib類、II類という遺跡類型は、五木谷において展開した当時の社会の構図を示唆する可能性が高いものとして評価できる（第31図）。その構図は、季節性を帯びた移動で遺されたIb類、その中で回帰が幾度と無く繰り返されたIa類という関係で成り立っていた。また、Ia類やIb類の集落から出張っての活動によって遺されたものがII類であった。つまり、Ia類とIb類の間には、何ら質的な差は無く、量的な差のみが存在しただけで、社会的な構造上の位置付けの違いを見出せない。また、II類も活動内容上での位置付けにあり、I類の間に社会的な構造上の位置付けの違いを見出すことができない。

（2）集団構成と社会

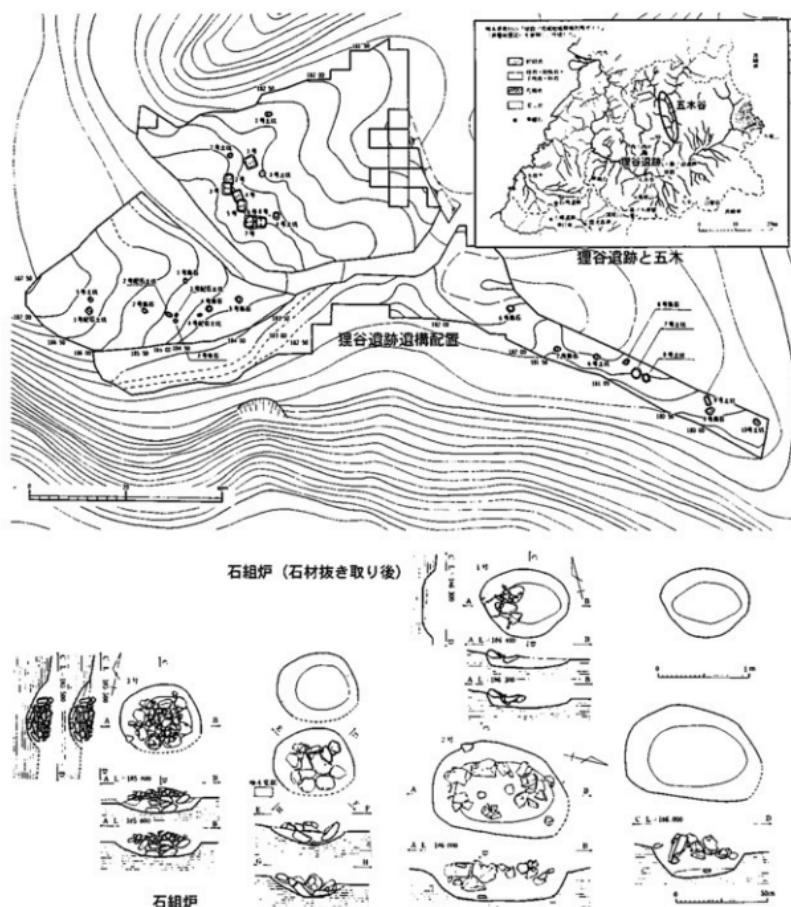
先に、五木谷において展開した早期の社会の構図を示唆する可能性が高い、Ia類、Ib類、II類という遺跡類型について、I類を中心にして説明してきた。では、このような五木谷における早期の集団構成をどのように推察することができるだろうか。そこで、当時の集落であるI類の遺跡について検討を加えたい。

Ia類の頭地田口A遺跡の生活施設では、5層で石組炉2基、土坑10基、4層で集石2基、土坑1基が見つかったが、竪穴式住居跡が検出されていないことから、この遺跡類型を担った集団の規模を推測することはできない。ただし、熊本県狸谷遺跡の事例（第32図）の、2基～3基の竪穴式住居に対して1基～2基の石組炉若しくは集石、すなわち2～3の世帯によって構成された基本的で単位的な集団に対して1基～2基の石組炉、という対応関係（熊本県教育委員会1987、木崎2005b）は参考となるだろう。

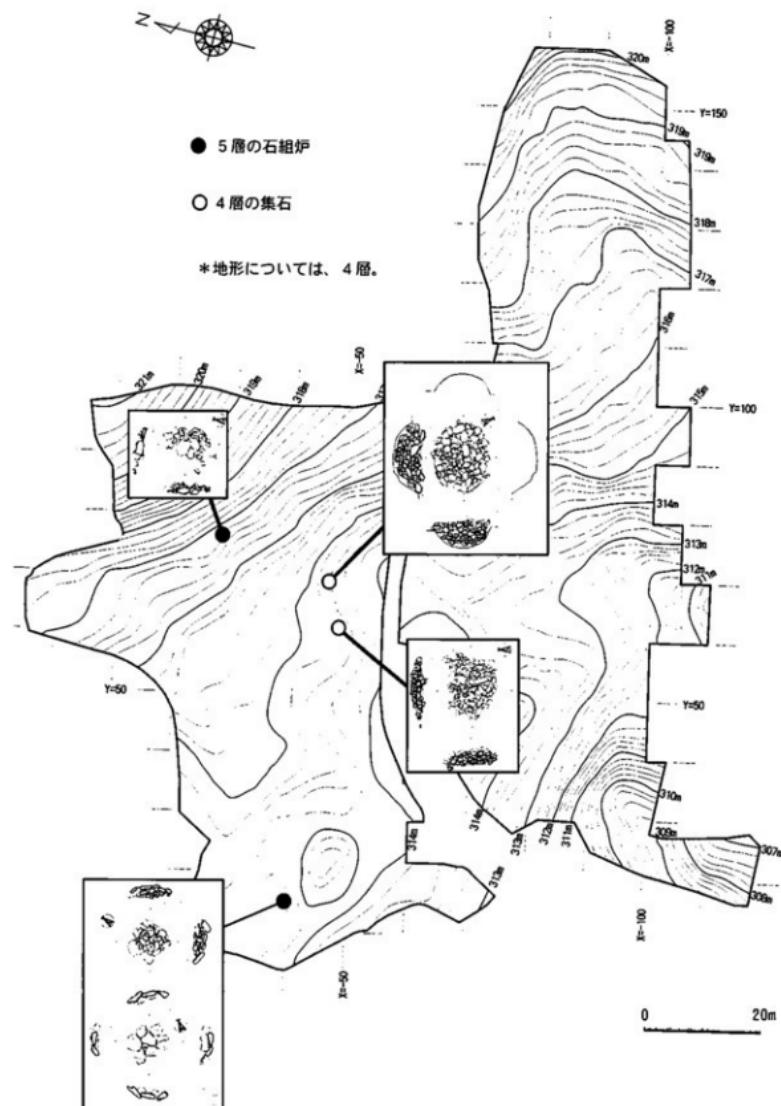
5層では石組炉が2基検出されているが、それぞれの位置は、ほぼ東西に70mほど離れていた（第33図）。この距離関係で併存するものなのかどうかの判断については、一考を要するが、現状でそれらを併存したものと考えるには無理があるようだ。しかも、2つの石組炉（第8図）では、1基が完全な状態で残っていたのに対して、もう1基は破損していた。他の遺跡でもそうしたことが起りうると思うが、立地環境が狭い丘陵地に制約されて、占地面積が狭い集落では、使い古した施設が廃棄される中で石材が抜き取られたり、破壊されたりすることが十分に想定可能である¹⁰⁰。そこで、こうした可能性を考慮し、それぞれを時間差と認識して、頭地田口A遺跡の5層においては、狸谷遺跡の事例を参考に、2～3の世帯によって構成された基本的で単位的な集団と想定しておきたい。また、集石2基がある4層でも、5層を参考に

時間差があるものとして、同じような集団と想定しておきたい。

次に、同じ類型の野々脇遺跡の厨房施設としては、石組炉の可能性が高いもの1基、集石3基があった。これらの分布状況、遺存状況を見れば同時併存と考えることもできるだろうが、頭地田口A遺跡では時間差と認識したように、同時併存を想定することは難しいだろう。やはり野々脇遺跡でも、1基の石組炉若しくは集石の可能性が高い、と認識したい。従って、この遺跡においても、2~3の世帯によって構成された基本的で単位的な集団、おそらくは10人前後の集団と想定しておきたい。

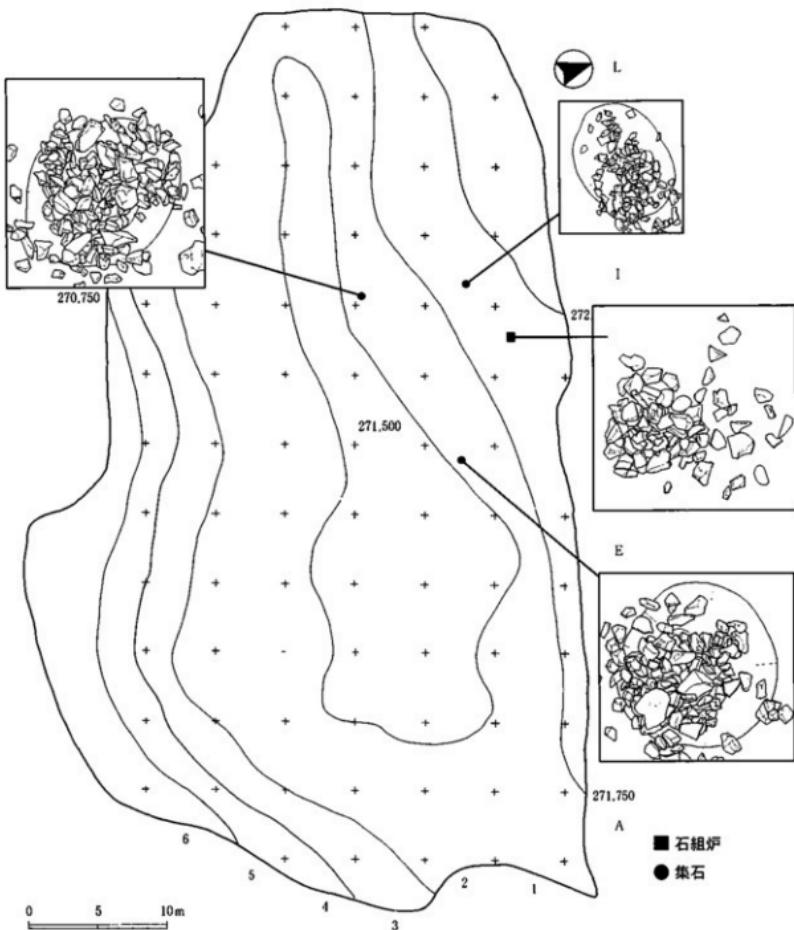


第32図 猿谷遺跡と石組炉関係資料



第33図 頭地田口A遺跡の石組炉・集石配置図

五木谷には、10人前後の規模の基本的で単位的な集団が移動しながら集落を構えて暮らしていたものと考えられる。その移動のタイミングは、食物獲得活動の背景となった季節の変化であつたらしく、狩猟が専らの季節に利用された集落の頭地田口A遺跡や、ドングリ類の採取とその処理が専らの季節に利用された集落の野々脇遺跡が同じ時期に併存していた。仮にその季節性を考えれば、狩猟が専らの季節は、獣がもっとも脂を蓄えた冬場が最適であろうし、ドングリ類の採取とその処理が専らの季節は、秋から冬にかけてであろうから、必然的に秋から冬



第34図 野々脇遺跡石組炉、集石配置図

にかけての野々脇遺跡から冬場の頭地田口A遺跡へと移動したことが類推できるはずである。しかも、その間の移動は少なくとも早期の中頃から後半期までは続いているよう、五木谷での集落の選地は、かなり固定的であったと考えられる。おそらく、谷間という平坦地の少ない地形環境によって、限定された集落の選地が余儀なくされたことが原因であったと考えられる。

さて、早期の社会について、資料の蓄積が進んでいる南九州を中心に検討したことがあった（木崎2005b）。その中で、早期の社会が、2～3前後の世帯によつた基本的で単位的な集団と、その集団が2～5程度集合して組織された大単位の集団によって成り立っていたらしいことを指摘した。また、その社会を維持するために、基本的で単位的な集団では祭祀用の道具を使った個別祭祀が、大単位の集団では祭祀施設を使った集団祭祀が行われていた可能性を指摘した。こうした早期の社会の枠組みの中に、五木谷はどのように位置付けられるのだろうか。

五木谷では、大単位の集団が組織化された形跡は認められなかつた。例えば、複数の基本的で単位的な集団が集合できるだけの面積を確保できる土地は存在していない。また、五木谷の中でもっとも広い丘陵地にある頭地田口A遺跡では、そのことを窺わせるような数の遺構や集団祭祀の存在を窺わせる遺構も存在していなかつた。

一方、春から夏の期間の活動としての内水面漁労が積極的に行われていたことを示す遺跡も認められなかつた。例えば、合流地谷底遺跡やV字谷谷底遺跡など、水辺に近い集落は存在していない。また、石錘を大量に出土する遺跡も存在していない。

このように、五木谷は、秋から冬場の期間、基本的で単位的な集団が谷間を移動しながら集落を構えて暮らしていた土地だったと考えられる。つまり、五木谷は、大単位の集団の領域の一部に位置しながら、基本的で単位的な集団が秋から冬において活動した土地であったと考えられるのである。

5 谷間の縄文時代

これまで五木谷の早期の遺跡で見つかった土器や石器、遺構を取り上げて遺跡の類型化を行い、その石器相、遺構（石組炉）を検討する中で、遺跡類型の連鎖関係、集団構成、社会及び活動について考えてきた。その結果、次のような類似点、相違点を知ることができた。

- ・中期～後期の五木谷には20人前後の基本的で単位的な集団。

一方、早期の五木谷にも基本的で単位的な集団であるが、その規模は小さい可能性が高い。

- ・中期～後期においては、基本的で単位的な集団が本拠の集落（I a類）から、川魚漁、狩猟、ドングリ類の採集と製粉作業など季節的な活動を行うために、3つのグループ程度に分散。それぞれが設けた活動ごとの小規模な集落（I b類）間を移動し、また本拠の集落（I a類）へ回帰。五木谷での活動は通年。

一方、早期においては、基本的で単位的な集団が活動の基本で、その集団が秋～冬と冬場

の活動ごとに設けた集落（I b類、回帰の累積でI a類に）を移動し、春から夏までは五木谷外へと移動。

・中期～後期においては、集落周辺には、そうした諸々の活動を行っていた派生的な活動地（II類）が存在。

一方、早期においても同様の派生的な活動地（II類）が存在。

そこで、最後に、谷間の縄文時代で行われた縄文人たちの暮らしの移り変わりについて、若干の予察を試みたいと思う。

【早期】基本的に単位的な集団は、大単位の集団を離れて秋の五木谷に立ち入った。それは、秋から冬場を過ごすための入谷であった。

彼らは、まずドングリ類の採取と処理を行うためにV字谷内の小丘陵に集落（野々脇遺跡）を構えた。そこは、毎年訪れているところで、集落作りは比較的容易であった。彼らが毎年そこを選んでいるのは、その付近にここほどの平場が無いからであったが、それにも増して彼らが求めたドングリ類が豊富に採れる所だったからに違いない。

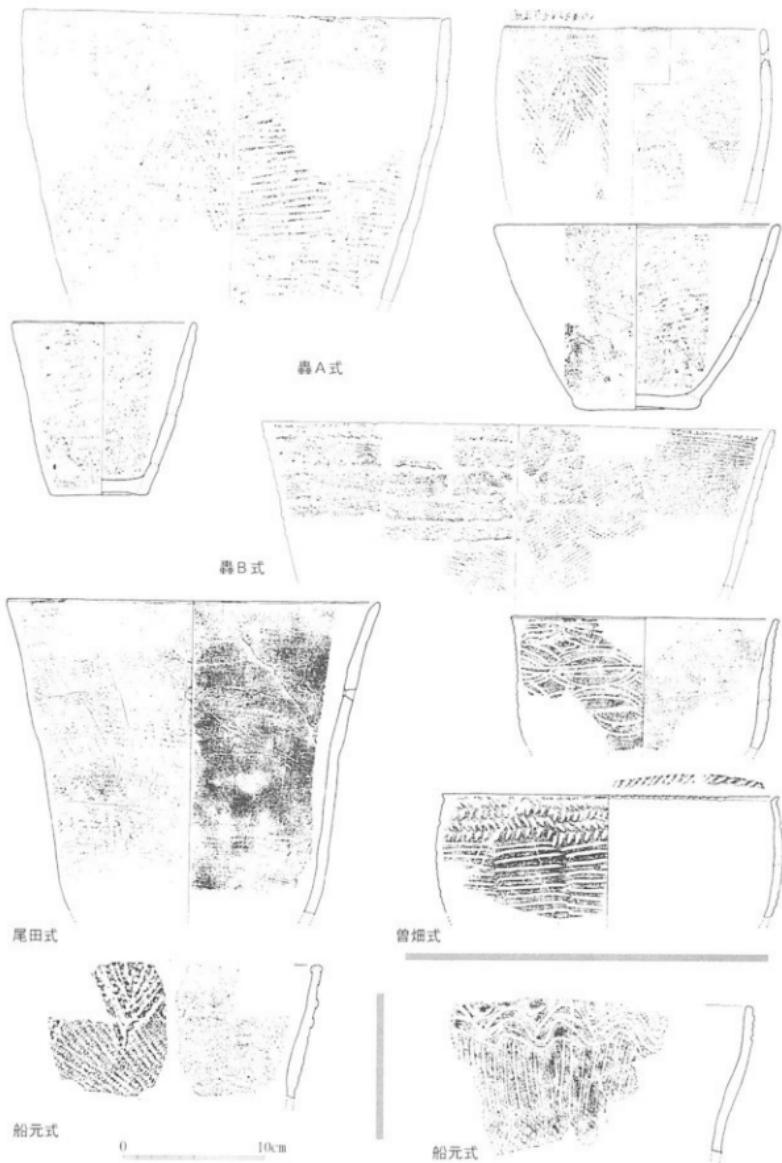
そこで活動が終了し、冬場を迎えるようとしていた頃、彼らは、冬場をしのぐためのドングリ類やその粉を持って、その集落を離れた。次の目的地は、川辺川を遡った所にあり、この川筋でも一番開けた土地であった。その土地は、この川筋で一番広く、またとても眺めの効く所で、ずっと昔から利用してきた所であった。彼らは、その土地に集落を構え、狩猟を始めたのであった。その集落が頭地田口A遺跡であった。

一方、長い期間、同じ土地に回帰を続けた彼らであったが、どういう契機か分からぬが、その過程で臨時に集落を移したことがあった。ただし、それはけっして継続したものではなく、一過性に近いものであった。その結果残されたのがI b類の遺跡であった。

なお、彼らが住む集落の周りには、狩猟のためやドングリ類採取のための活動地（II類）が点在していたはずである。

狩猟の季節が過ぎ、周りに新芽が芽吹く頃、彼らは、別の土地へと移動した。次の場所では、川魚漁などを行った。また、大きな集落で仲間と合流したり、そこで共同の祭祀を行ったりした。そして、彼らは、次の秋が来るまで、そこで過ごすのである。その場所がどこにあったのか、定かではないが、同じような土器が見つかる遺跡が集中している人吉盆地のどこかにあつたのかもしれない。

【前期～中期初め】早期に活発であった五木谷の利用は、前期から中期初めにかけて低調となつた。一部、頭地田口A遺跡では前期～中期初めの遺物（第35図）が見つかったり、頭地田口C遺跡では中期初めの遺物（第36図）が見つかったりしているが、遺物量が早期ほどではなく、また遺跡数も減少した。これにどのような理由があるのか分からぬが、五木谷への回帰数が減少したことだけは間違いない。しかも、こうした傾向は、人吉盆地でも認められることであ



第34図 頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡の前期～中期の土器

る。アカホヤ火山灰の降灰に伴う一時的な環境変化が、こうした縄文人の行動を変化させた可能性は否定できない。

【中期～後期】中期～後期は、縄文人が五木谷を活発に利用した時期であった。

阿高式の頃、縄文人の五木谷の利用が本格化した。五木谷の縄文人は、3つの世帯による、20人程度の基本的で単位的な集団であった。彼らは、川辺川と五木小川との合流点近くの谷部の広い河岸段丘上に大規模な集落（I a類、頭地下手遺跡）を設け、拠点とした。そこは早期の縄文人が利用しなかった場所であった。おそらく、合流点が間近にあり、2つの川で漁が可能な場所であったことから、とても便利な場所だったのだろう、と考えらえる。

また、その集団は、3つの世帯に分散して、それぞれ合流点よりも上流の2つの川筋（川辺川と五木小川）と下流の1つの川筋（川辺川）で、季節的な活動を行った。アユやマス、ヤマメなどの川魚漁、狩猟、ドングリ類の採集と製粉作業などの活動であるが、その季節的な活動は、それぞれに居住する集落（I b類）を変えながら行われた。川魚漁が中心で、狩猟も行った集落が逆瀬川遺跡で、ドングリ類の採集と製粉作業を専ら行った集落が野原遺跡で、狩猟とドングリ類の採集と製粉作業を行った集落が小浜遺跡であった。特に興味深いのは、ドングリ類が豊富に採れる場所だったので、と指摘した野々脇遺跡の近隣に、野原遺跡や小浜遺跡があることである。この周辺では、縄文時代を通じてドングリ類が豊富に収穫できたのでは、と思わせるのである。

そして、こうした活動を終えると、3つの世帯は、再度、本拠としていた集落（I a類、頭地下手遺跡）に集合した。五木谷の縄文人は、1年を通じてこの谷間で暮らしていた。

なお、集落周辺には、集落を設げずに、諸々の活動を行っての土地（II類）もあった。その場所は、I a類やI b類の周辺にあり、遺跡として残された土地もあれば、残されなかつた場所もあった。その中で、頭地田口A遺跡が立地する土地は、早期のほぼ全期間を通じて、冬場の活動のために設けた集落（I b類、回帰の累積でI a類に）として利用されていたが、中期～後期、集落として利用されることはない。川辺川での川魚漁が彼らの生業の中でかなりのウェイトを占めるようになっていたのである。

それに引き続く、後期終わり頃～晚期。それまで活発に利用されていた五木谷は、ほとんど利用されなくなった。無人となってしまったのか、それとも細々と利用が続けられたのかは、不明のままであるが、確実に言えるのは、中期～後期に五木谷一帯で領域内定住をしていた縄文人は、完全に別の地域に定住地を移したであろうことである。縄文時代の中で大規模な集落が造られた時期の1つ、後期～晚期は、このような地域的動態の中で展開したのであろうか。

そして、五木谷で人類の暮らしが現れるようになるのは、弥生式土器時代後期後半になってからのことであった。

6 おわりに

本稿では、前稿で想定した中期～後期における縄文人の活動が縄文時代全体に適応できるものかどうか、という問い合わせ下、早期を取り上げて、同じような視点で検討を加えた。その結果、似ている点、異なっている点について明らかにできたと考えている。また、最後に、谷間の縄文時代で行われた縄文人たちの暮らしの移り変わりについて、若干の説明も試みたが、この地域の縄文時代を通時間的に捉える機会ともなったと認識している。

さて、川辺川ダム関係の発掘調査は、現在も行われているが、この地域の歴史や伝統、文化を考える上で、極めて重要な歴史資料を提供し続けている。それらは、単なる土器の破片であったり、陶磁器の破片であったり、石の破片であったりするかもしれないが、それだけではけっして終わらないものである。五木谷で暮らす、五木の地域文化を形づくってきた人びとの証言にも近いものとして、いわば、五木のアイデンティティーを示す資料である、とも評価できるのである。その意味では、こうした成果をけっして埋没させることなく、積極的に活用することが必要なのである。そして、それは、五木谷における人びとの暮らしの歴史を明らかにするという意味で重要な試みである。

平成15年度に実施した企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』は、まさにそうした観点での企画であった。そしてまた、その研究をさらに踏み込んで説明を試みた2つの論文もそうした観点のものであった。本展覧会と本研究の成果が、今後の活用の一助にでもなれば幸いである。

最後になったが、本稿に関して御協力いただいた方々がいるので、御芳名を掲げて、感謝の意を表したい。

清田純一、出合光宏、福原博信、帆足俊文、江本直、角田賢治、池田朋生、増田香織、吉里美枝子、大友由紀、櫛木節代、相良村教育委員会、五木村教育委員会、山江村教育委員会（敬称略）

註

- 1) 縄文時代の集石等に関係する遺構として先土器時代の礫群がある。これについては、すでに私見を述べている（木崎2002）ので、それを紹介したい。

先土器時代の関係遺構については、礫の散布状況や下部構造の有無によって、次のように分類できる。

- ・集石A—礫が円形や四角形などの形状に集まるもので、下部構造として振り込みを伴うもの。
- ・集石B—礫が円形や四角形などの形状に集まるもので、下部構造として振り込みを伴わないもの。
- ・礫群—集合性の無い礫の分布として認識されるもの。

そして、これらの関係については、本来の遺構が集石Aであり、使用前段の仮保管であったり、使用済み礫の集積であったりするのが集石Bで、集石Bの崩壊過程を示すのが礫群、と考えたが、先土器時代の所謂「礫群」の合理的な説明であると認識している。

縄文時代の集石等については、基本的に先土器時代の所謂「礫群」と同じような説明ができるだろうが、石組の有無は決定的な相違点であると認識できる。

- 2) 土坑を伴う集石については、註1)で扱った集石Aに対応するものである。そこで指摘したように、この集石については、本来の遺構と認識するのが合理的な理解であろう。

- 3) 土坑を伴わない集石については、註1)で扱った集石Bや礫群に対応するものである。そこで指摘したように、この集石については、使用前疊の仮保管、使用済み疊の集積、そしてそれらの崩壊過程を示すものと認識するが合理的な理解であろう。従って、この集石を生活に係わる直接的な施設と認めるることはできないだろう。
- 4) 埋土については、自然堆積状態を示している。
- 5) ここで見られる疊の状況は、註3)で指摘した、「集石B」や「疊群」が崩壊していく過程を示すもの、と認識できる。
- 6) 埋土については、自然堆積状態を示している。
- 7) 五木村教育委員会の福原博信氏の御教示による。
- 8) 五木村教育委員会の福原博信氏の御教示による。
- 9) 相良村教育委員会の出合光宏氏の御教示による。
- 10) 廃棄した石組炉からの石材の抜き取りについては、熊本県狸谷遺跡でも認められ、報告の中でも指摘している(熊本県教育委員会1987)が、集落と石材補給地との位置関係からすれば、その再利用は十分に可能性が高い。こうした過程の中で、使用前疊の仮保管や、使用済み疊の集積が行われたものと認識できるだろう。

参考文献

- 五木村教育委員会1995『野々脇遺跡』
- 五木村教育委員会1996『頃地C遺跡』
- 五木村教育委員会1997『頃地田口B遺跡』
- 五木村教育委員会1998『小浜遺跡』
- 五木村教育委員会2003『逆瀬川遺跡』
- 木崎康弘1996a 「九州地方の様相について－九州石棺文化の成立と展開－」『石器文化研究』第6号 石器文化研究会
- 木崎康弘1996b 「九州石棺文化の展開と細石器文化の出現」(『九州旧石器』第3号(1997)再掲載) 九州旧石器文化研究会
- 木崎康弘1996c 「石棺の出現と気候寒冷化－地域文化としての九州石棺文化の提唱－」『旧石器考古学』第53号 旧石器文化談話会
- 木崎康弘1997 「男性器形石製品とトロトロ石器のただならぬ関係について－トロトロ石器の性格を考える－」『人間・遺跡・遺物』3 発掘者談話会
- 木崎康弘2002 「九州石棺文化の南九州とその特徴」『後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』川南町教育委員会・後牟田遺跡発掘調査団
- 木崎康弘2003 「ナイフ形石器文化団研究序論－石器文化の類型とその評価－」『旧石器人たちの活動をさぐる－日本と韓国との旧石器研究から－』大阪市文化財協会
- 木崎康弘2005a 「谷間の櫛文」『熊本県立装飾古墳館 研究紀要』第5号 熊本県立装飾古墳館
- 木崎康弘2005b 「ナイフ形石器文化における定住化と祭祀」『地域と文化の考古学I』明治大学考古学研究室
- 熊本県教育委員会1987『狸谷遺跡』
- 熊本県教育委員会1995『無田原遺跡』
- 熊本県教育委員会2002『頃地田口A遺跡』
- 熊本県立装飾古墳館2004『肥後の至宝展II 球磨来展～球磨の考古と歴史に遊び～』
- 熊本県立装飾古墳館編2005『熊本県立装飾古墳館 研究紀要』第5号
- 小林久雄1968 「肥後国球磨郡五木村頃地下手遺跡」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿集刊行会
- 相良村教育委員会2003『野原遺跡I』
- 田辺哲夫編1980『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社
- 東 和幸2001『地下茎植物採掘痕と考えられる掘り込み』『物質文化』第57号 物質文化研究会

熊本の縄文時代住居跡から見た定住化の様相

池田 朋生

熊本県立装飾古墳館 主任学芸員

はじめに

南九州において縄文時代草創期・早期の調査事例から、定住生活の開始と発達がそれまでの縄文時代のイメージから飛躍して、より先進的であったことについては多くの先行研究がある^(注1)。ここでは、熊本の地から見て、この見解について新たに指摘できそうな事例を述べたい。また、この考察を進めるにあたって今後注目すべき視点についても私見を述べたい。

熊本における定住生活の兆し

後期旧石器時代、AT上位の最寒冷期とされる時期以降、気候の温暖化と共に、植生・動物相の変化が見られるとされる^(注2)。一方、考古サイドからは土器・磨石・石皿の増加による堅果類の利用、祭祀遺物、装身具の出現などから、徐々に遊動の暮らしが、細石器文化期から縄文時代草創期・早期へと時代が下るに従い、気候の温暖化・植生の変化に促されるがごとく、定住化が開始、浸透したという解釈が為されている^(注3)。

熊本では、定住生活の様相を見いくうえで重要な時期の遺跡、特に後期旧石器時代終末である細石器文化期、縄文時代草創期の良好な遺跡は、南九州の他の地域に比べると数は少ない^(注4)。やはり、定住化がどの程度進んでいたのかを見るには、遺構の分析を抜きには語れないのでないのか?ということや、草創期の直前、後期旧石器時代細石器文化期の様相にまで、注目すべきと言う立場から見ると、議論としては低調になりがちではある。

そこで、統く縄文時代全体にまで目を向けて、鹿児島・宮崎の調査事例と比較し、南九州での定住化の様相、特にその拡がりについて指摘できそうな事例について述べてこの問題に答えたい。今回、定住化の様相を見ていく要素として、竪穴住居跡、特に住居跡の規模について一つの仮説を立てて注目してみる。熊本県下では、縄文時代後期終末から晩期前半をピークに、竪穴住居の規模が拡大する傾向が窺える^(注5)。こうした竪穴住居跡の大型化が進む背景には、屋内施設の増設や、生活に必要な容積を拡大する必要が出たためであり、そうした背景には、長期に渡って止まる生活様式(定住生活)が浸透するが故に、起こりうる現象と仮に捉えて話を進めてみたい。

尚、データの考察については、主に第10回九州縄文研究会福岡大会(2000)、第13回九州縄文研究会宮崎大会(2003)時点の資料を中心に行った。時期の設定については、鹿児島・宮崎の竪穴住居跡が検出されている時期を勘案し設定した。また、中期、後期、晩期の境に位置づけられる各土器型式については、研究者で異なる認識があることを考慮し、項目を分けた。刻目突帯文の時期についても弥生早期とする見解を考慮して別項目とした。

以下、熊本県内で検出された竪穴住居跡の様相をいくつかの項目に分けて示し、宮崎、鹿児

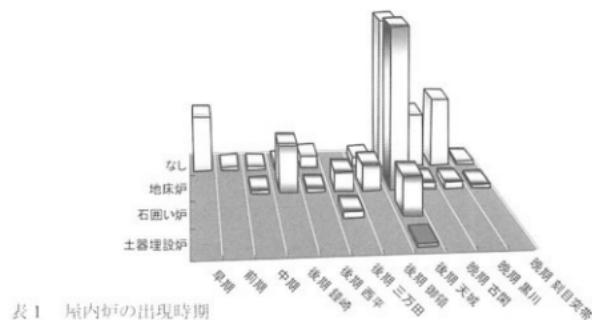


表1 屋内炉の出現時期

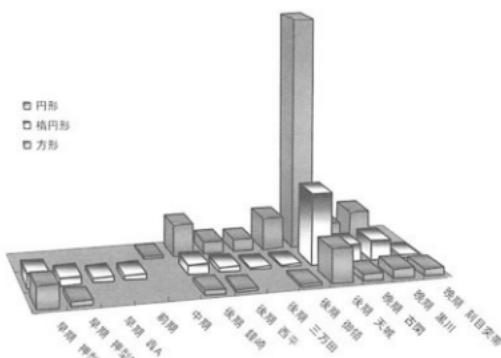


表2 壇穴住居の形態別出現時期

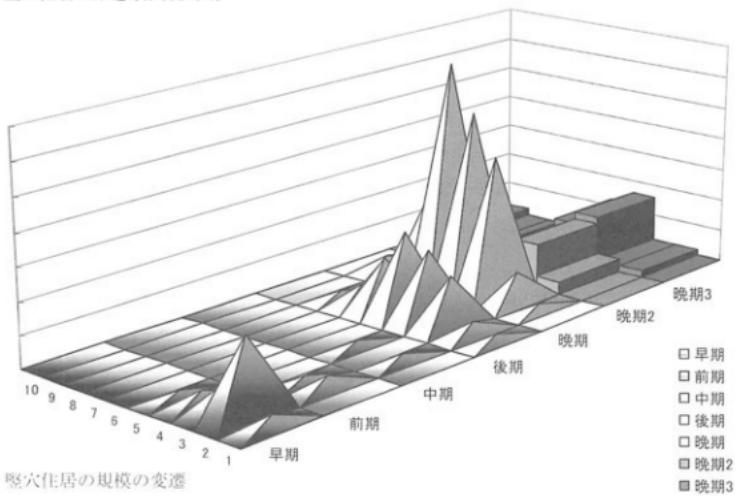


表3 壇穴住居の規模の変遷

島県のものと比較する。まず、熊本県下での竪穴住居跡の時期ごとの屋内炉の出現時期・形態・規模との関係を表1～3に示す。前期・中期の検出数の少なさが課題ではあるが、早期の竪穴住居には炉は無く、方形・若しくは長方形を呈し、2メートル～3メートルクラスのものが多い。最も、早期には炉が無いこと、方形若しくは長方形のプランを呈することは、宮崎、鹿児島でも基本的に変らない。屋外施設である集石・炉穴の使用頻度の高さは3県とも同様である。熊本の場合、後期・晩期に検出数が最も多くなり、屋内炉を持つものが増える。最もその半数は依然として炉を持たず、屋外施設を利用する傾向は残るようである。また、最初に述べたように、屋内炉の保持数とリンクするかのように、竪穴住居跡の規模が拡大し、5～6メートルの大型のものが多く見られる様になる。またこの時期は、東日本からの影響と見られる土器炉・石囲炉が出現する^(注6)。これは大分県での検出時期よりやや下ることが言えそうだ。その後は方形プランの増加と共に、竪穴住居跡の規模は縮小する。おそらく屋内活動若しくは施設の一部が、竪穴住居外で行われ出したのだろう^(注7)。

今のところ熊本では、後期旧石器時代の下城遺跡の事例を除いて、早期の押型文段階から竪穴住居が作られるが、おそらく前期・中期を通じて、大型化の一途を辿っている。屋内炉の利用も始まり、おそらくは東からの生活様式も一部で受け入れる一方、様々な持ち物が増え、定住する期間が長くなったのではないだろうか。

晩期前半以降、住居が小型化するのは、例えば焼き畑の導入と言う生業の変化の開始のため、新たな生活様式を取り入れ、屋外に専用の施設を設けたためではないかと想定している^(注8)。屋内炉の使用頻度との関係も考えられなくはないが、依然として持たない事例も見られるので、火廻に関する行為とは限らないだろう。結果、竪穴住居内で行っていたスペースを確保する必要がなくなったのではないだろうか。

一方、宮崎県を見てみると、やはり前期での事例が無いものの中期の事例が認められ、熊本より傾向が掴める。草創期、早期後半の竪穴住居跡の検出例が見られないものの、早期前半は、熊本と同様で長方形プランで、屋内炉を持たない。この時期の竪穴住居の規模は2メートル～3メートルと、やはり熊本のものと変わらない。最大規模になる時期も熊本の状況と酷似している。

統いて鹿児島県を見ると、屋内炉を持たないことや、長方形プラン（若しくは方形プラン）を呈することと共に、規模も変らない。鹿児島の場合も、数少ない中期の事例がある。ここで熊本・宮崎と大きく異なるのは、早期以降、アカホヤ降灰後の住居の規模である。前期・中期の事例が少ないため、暫定的なことしか言えないが、鹿児島の場合明らかに住居の規模が縮小傾向にある。しかしながら屋内炉が全く無いわけではなく、地床炉のありかたが、規模を決めているとは言いがたい。つまり火廻の有無の問題ではない。ところが、宮崎・熊本で最大の規模を誇る後期～晩期の時期においては、早期のときとさほど規模は変わらない。

これについての一つの可能性として、アカホヤ火山灰の影響の地域差を考えることができないだろうか。草創期・早期を通して、温暖化・植生の変化が進み定住化の様相が整いつつあったものの、鬼界カルデラの噴火の影響によって、他地域より自然環境・植生が著しく異なったためではないか。アカホヤ降灰以降の影響は、他地域では難を逃れて、着実に定住化、若しくは一定期間滞在する時間が長くなっていたのに対し、直接影響を受けた鹿児島では早期の規模程度の容量で足りる住居しか必要なかったのではないだろうか。言い換えれば、草創期・早期程の遊動生活がひきつづき必要な時期であったと想定したい。

一方、早期の住居規模・屋内炉にそれほどの違いは無く、宮崎と同規模の大きさで推移する熊本の地においては、やや後出ながら定住化への道を歩んだと思われる。

炉穴・集石など屋外施設の状況は、熊本で塞ノ神式期など早期後半の炉穴が報告されるなどの違いはあるが、宮崎・鹿児島との屋外施設の機能的な差異は今のところ見出しえない。少なくとも住居の規模から考えて、早期前半以降は鹿児島・宮崎と同様な生活様相であったと推測される。南九州の縄文文化の優位性を示す資料である耳栓・壺形土器についても、数は決して多くはないが、白鳥平遺跡・灰塚遺跡などで手向山式・天道ヶ尾式期に認められる。また、瀬田裏遺跡では精緻な押彫文の壺形土器が見られることは、南九州の縄文時代早期の生活様式を受け入れながら、定住化への動きがあったことの傍証になるだろう。恐らく熊本の北側では早期前半の段階でいち早く押型文土器様式での生活が始まっており、南九州からの強い影響は地域を限定したものになったと考えたい。

以上のことから、前期以降の鹿児島における住居跡の大型化が比較的ゆるやかであること、鹿児島・宮崎の最大規模となる住居跡の時期が熊本での時期と相似しながらも、その規模については熊本に比べ小さいこと、この二つが指摘できる。その理由としては、例えば焼き畑の導入時期や定畑の導入時期。また、その受容割合の差などが想定できないだろうか。農耕の受容などの地域差は、水稻耕作の導入が、ごく近年である地域もあることなど、広く知られている事実である^(註9)。一様に変化していくという現象が認められながらも、農耕の導入時期の差、導入の程度は、更にミクロの視点で捉え直す必要があるだろう。

時期／規模 (m)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
草創期後葉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
早期前半	2	12	4	1	0	0	0	0	0	0	0
早期後半	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
前期	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
中期	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
中期末後期前葉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
後期	1	2	8	11	13	8	3	1	0	0	0
後期後半晚期初頭	0	1	5	22	28	35	14	3	2	0	0
晩期	0	1	2	14	11	5	3	0	0	1	0
刻目突帯文	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0

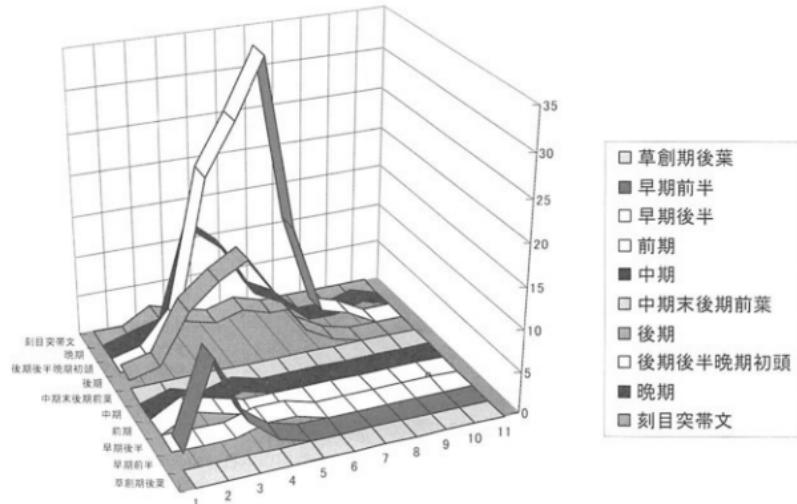
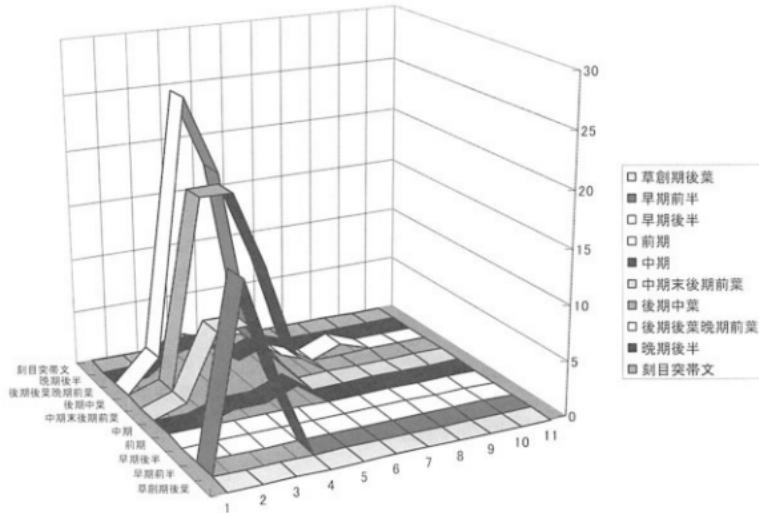


表4 熊本での堅穴住居跡の規模の変遷

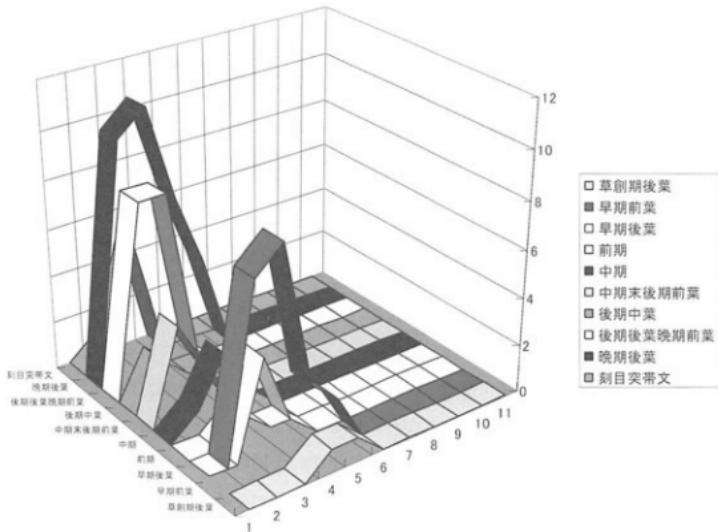
時期／規模 (m)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
草創期後葉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
早期前半	0	16	7	0	0	0	0	0	0	0	0
早期後半	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
前期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中期	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0
中期末後期前葉	0	1	7	7	3	0	0	0	0	0	0
後期中葉	0	1	18	18	11	2	0	0	0	0	0
後期後葉晚期前葉	0	3	26	19	3	1	0	1	0	0	0
晚期後半	0	0	2	2	0	1	0	0	0	0	0
刻目突帯文	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0



	なし	石囲い炉	地床炉	土器埋設炉
早期前半	6		1	
早期後半	4			
前期				
中期	2	?		
中期末後期前葉	10		3	
後期	47		5	
後期後葉晚期前葉	42	1	9	
晚期後半	6			
刻目突帯文	1			

表5 宮崎での堅穴住居跡の規模の変遷、戸内施設の状況

時期／規模 (m)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
草創期後葉	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
早期前葉	1	8	9	3	2	0	0	0	0	0	0
早期後葉	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0
前期	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
中期	0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0
中期末後期前葉	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0
後期中葉	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0
後期後半晚期前葉	0	8	8	1	0	0	0	0	0	0	0
晚期後葉	0	10	11	7	4	0	0	0	0	0	0
刻目突蒂文	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0



	なし	石囲い炉	地床炉	土器埋設炉
草創期後葉	1		1	
早期前葉	28			
早期後葉	13	1		
前期				
中期	5			
中期末後期前葉	2		2	
後期	5		2	
後期後葉晚期前葉	15		9	
晚期後葉	16	1	27	
刻目突蒂文	1	2	4	

表6 鹿児島での堅穴住居跡の規模の変遷、屋内施設の状況

今後の課題

この時代の生活様相を検討するにはほど遠い分析であるが、一試論として提示したい。特にアカホヤ降灰以後の影響を考える際、半定住の生活様相、定住化の問題を、別の時期から問うモデルとして見ることができ、例えばサツマ火山灰の影響が、早期初頭にどの程度起こっていたのかなど考えるきっかけになると思う。更に述べるならば、定住化の問題は後期旧石器時代を含めた視点で解決する問題であると思われる。後期旧石器時代AT降灰後まで下って考察していく必要性もあると言うことを、もう一つの視点として話題のみ提示しておきたい。AT上位の九州では、石刃技法が廃れ、切出型のナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器など多様な石器群が見られる。この段階の剥片剥離技術は、一見、前の段階の石刃技法より非効率的に見られるが、こと狸谷型ナイフ形石器においては、それまでのナイフ形石器の機能とは異なる、飛び道具としての機能が備わっている。今回のテーマとは大きく異なるので詳しくは触れ得ないが、そうした石器の登場は、後の槍先形尖頭器、細石刃の導入、石鏃の出現の遠因と考え始めている。飛び道具の機能を持つ石器の登場と、その後のToolの小型化の問題解決は、後期旧石器時代の検討のみならず、縄文時代の定住生活を結びつける複数の要因が繋がっているものとした仮説を通して検討していきたい。その際の道具の検証は、民具等からの検討が重要となってくることのみここでは指摘しておきたい。

最後に、県内での当該期の調査について基本的な注意事項を述べたい。熊本の地においては、年代決定の際に利用される火山灰は、往々にして二次堆積土である。このような認識を持った調査を行わなければ、時期決定に誤認が生じる。また、炭素年代測定で出される炭化物は、その出土状況が厳格に区別されないまま採取していたならば、とんでもない測定値が出ることになる。どちらも自然科学分析とからむ話題ながら、堅実な調査事例を積み重ねなければ有益な情報は提示できないし、また、そうした誤認が起こりやすい土層の堆積が見られるエリアである。従って、一次堆積の火山性噴出物によって覆われた調査例が見られる、宮崎、鹿児島の調査報告を真摯に受け止めていく必要性があると共に、一次堆積のテフラが確認できる県内での調査事例があるならば恒常的に注視していく必要があるだろう。

謝辞

本文は平成17年5月15日、宮崎県立西都原考古博物館に於いて行った講演要旨を基にしている。講演の機会を与えて下さった北郷泰道氏、東憲章氏、二宮満夫氏等西都原考古博物館の皆様に感謝したい。また、本文執筆にあたり宮崎敬士氏、中村幸弘氏（熊本県教委文化課）の二人には、熊本県のデータ整理に尽力して頂いた。更に、雨宮瑞生氏、黒川忠広氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、桑畑光博氏（都城市教委）からも有益な助言を頂いた。文末ながら御礼申し上げます。

今後の課題の一例

遺跡名	遺構名	時期	年代測定値（及び樹種）	出土した遺物
櫛島遺跡	1号.pref穴	早期	14C年代 9410±125Y. (9150±120Y.) (木炭)	寒ノ神式
櫛島遺跡	2号.pref穴	早期	14C年代 9320±185Y. (9060±180Y.) (木炭)	寒ノ神式、条痕文土器
石の本17区	SX-01.pref穴	早期	14C年代 3400±40 (アカガシ亜属)	寒ノ神式
石の本17区	SX-05.pref穴	中期	14C年代 3310±40 (アカガシ亜属)	寒ノ神式
瀬田裏山の神地区	6・1号.pref穴	早期	14C年代 8,180±280BP(ケヤキ)	山形押型文、楕円押型文、無文土器
瀬田裏山の神地区	7・2号.pref穴	早期	14C年代 7,890±310BP(ヤブツバキ)	山形押型文、楕円押型文、無文土器、石器
瀬田裏山の神地区	7・4号.pref穴	早期	14C年代 10,070±230BP(カヤ)	山形押型文、楕円押型文、無文土器、石器
瀬田裏山の神地区	10号.pref穴	中期	14C年代 6,940±120BP(木炭)	山形押型文
瀬田裏山の神地区	15・1号.pref穴	中期	14C年代 8,850±160BP(ヤブツバキ)	楕円押型文、無文土器
瀬田裏山の神地区	17・1号.pref穴	中期	14C年代 9,170±270BP(ケヤキ)	楕円押型文、山形押型文
瀬田裏山の神地区	17・4号.pref穴	中期	14C年代 4,830±390BP(ケヤキ)	楕円押型文、山形押型文
瀬田裏山の神地区	22号.pref穴	中期	14C年代 8,600±270BP	楕円押型文、山形押型文
瀬田裏山の神地区	27号.pref穴	中期	14C年代 9,030±210BP(クマシデ属の一種)	斜行縦文土器
瀬田裏山の神地区	30・1号.pref穴	中期	14C年代 9,030±190BP(ヤブツバキ)	楕円押型文、山形押型文、条痕文、無文土器
牟池水谷遺跡	集石	早期	4970±160BP	-

熊本県での早期の.pref穴・集石とされる遺構から検出した炭化物の年代測定（及び樹種同定）一覧



カタモリ（鉈先、天草牛深で使用、刃部の大きさ10cm）



狸谷型ナイフ形石器（熊本市石の本No.54遺跡出土）スケール不等一

- (註1) 最新では、新東晃一（2005）「南九州の縄文早期土器型式の諸問題－南九州の早期前葉の貝殻文系円筒土器と早期後葉の土器型式組列について－」『西日本縄文文化の特徴 第1回西日本縄文文化研究会』など
- (註2) 杉山真二氏の研究による。例えば「第7章 植物珪酸体（プラントオバール）」（2000）辻誠一郎編『考古学と自然科学－③ 考古学と植物学』同成社など。
- (註3) 雨宮瑞生氏の一連の研究成果がある。最新では、「縄文定住狩猟採集民から派生する諸問題」（2004）『南九州縄文通信 No.15』など。
- (註4) 現時点では、県内の報告例は所謂遺物包含層レベルでの検出例と筆者は捉えている。菊池郡大津町瀬田池ノ原遺跡、阿蘇郡西原村西原F遺跡が良好な出土状況を示しそうだ（前者は熊本県教育委員会調査中、後者は熊本大学により報告書並びに調査が継続中）。
- (註5～8) 槙稿（2000）「火廻を囲む諸問題－縄文時代後晩期を中心に－」『2000.7 熊本歴史学研究会発表要旨』より。
- (註9) 玉永光洋（1995）「山の生活－大野川上・中流域集落遺跡の調査より－」小田富士夫編『風土記の考古学④ 豊後国風土記の巻』同成社

主要参考・引用文献

- 雨宮瑞生（2004）「縄文定住狩猟採集民から派生する諸問題」『南九州縄文通信 No.15』
- 池田朋生（2000）「火廻を囲む諸問題－縄文時代後晩期を中心に－」『2000.7 熊本歴史学研究会発表要旨』
- 新東晃一（2005）「南九州の縄文早期土器型式の諸問題－南九州の早期前葉の貝殻文系円筒土器と早期後葉の土器型式組列について－」『西日本縄文文化の特徴 第1回西日本縄文文化研究会』
- 杉山真二（2000）「第7章 植物珪酸体（プラントオバール）」辻誠一郎編『考古学と自然科学－③ 考古学と植物学』同成社
- 玉永光洋（1995）「山の生活－大野川上・中流域集落遺跡の調査より－」小田富士夫編『風土記の考古学④ 豊後国風土記の巻』同成社
- 山崎純男（2005）「西日本縄文農耕論－種子圧痕と縄文農耕の概要－」『西日本縄文文化の特徴 第1回西日本縄文文化研究会』
- 九州縄文研究会福岡大会（2000）『九州の縄文住居』
- 九州縄文研究会宮崎大会（2003）『九州の墓制』
- 熊本県教育委員会（2002）『石の本遺跡群IV』『熊本県文化財調査報告第195集』

資料紹介 熊本県下の石工道具二例

池田 朋生

熊本県立装飾古墳館 主任学芸員

経緯

本資料の紹介は、平成14年度・15年度に当館で行った「阿蘇の灰石展」調査上で実見したものの一部を基に掲載している。本展示は、肥後の装飾古墳展示の事前調査に活用できる内容であることを意識した構成を取っている。特にその調査方法の確立と、新たな装飾古墳の情報を得る事が最大の目的である。装飾古墳のほとんどは、保存・公開という大きな問題を常に孕む。そうした問題解決には、様々な工学的手法が用いられている。一方、それらの保存修復事業に際しては、基礎調査として理科学的な調査データを十二分に蓄積し検証する時間が必須であるが、限られた予算・時間の中でそのような問題を克服するには、多くの困難が予想される。一口に装飾古墳の基礎調査といつても、単に予想される項目を考えるだけでも枚挙に暇がない。古墳石室や石棺石材の特性はじめまり、彩色系の装飾古墳ならば彩られた顔料そのものの調査といった材質の特定、目に見える形で風化している原因の特定、カビ・地衣類の与える影響、経年変化による影響等々、いくつものデータを、目的をもって収集していく必要が出てくる。

また、保存整備着手の前には当該装飾古墳が存在する地域にとってどのような活用を図ることがふさわしいのか、如何に市民への還元が可能なのか等が話題となるだろう。それを議論するにも、可能な限りの既存データを集め、その上で必要な最小限度の調査を行うことが必須である。実際の整備事業の多くは、当該市町村教育委員会文化財担当者の不断の努力によって進められている。おそらく、装飾古墳の整備に伴う基礎調査を行うのに、何のデータをどれだけ集める必要があるか、そのことを決めるだけでも、多くの困難が伴うことと思う。

装飾古墳の専門館である本館が県内の石工道具に着目するのは、調査研究事業の一環であると共に、装飾古墳である石棺・石室の材質の特性を調査する手法として、伝統的な石工の技に行政側が拾い切れていない情報が多分にあると踏んだためである。伝統的な石工、とりわけ阿蘇溶結凝灰岩を対象に生計を立てる職人の目は、数値データにしきれない数多くの情報を瞬時に捉え見極める。そのことが、聞き取り調査を重ねるなかで強く感じることができた一番の成果であった。例えば、製品を作る際に引く線引きは墨引きでは無くベンガラが用いられる。しかも触媒は水、瞬時に岩に染み込み百年経っても色あせる事はないという。この事実だけでも彩色系装飾古墳を理解する手掛かりになるだろう。こうした職人の智恵や目利きを客観的な数値データで表して公表することと、職人の経験・助言を積極的に活用した際の成果とを出来る限り紹介していくことで、整備事業の一助となれば幸いである。

県内での伝統的な石工道具の紹介施設

既に、伝統的な石工道具は民具として取り扱われ、民俗学の範疇として資料が収集されている。全国には行政単位で地元の特徴的な産業と再認識し、悉皆調査を行っているところも見られる^(注1)。

また、県内の博物館、及び博物館相当施設において伝統的な石工道具の収集・展示を行っているところもあり、その重要性は以前から認識されているものであろう^(注2)。特に眼鏡橋の研究・調査成果は抜きん出でおり、八代市石匠館の活動を始め珠玉の先行研究がある。企画展調査の際に、筆者が知りえた県内で石工道具の展示、または収集を行っているところは、先に挙げた石匠館の眼鏡橋建設に伴う道具の他、本渡市歴史民俗資料館の下浦砂岩の細工道具、熊本県伝統工芸館の玉名市天水町で作られた凝灰岩の石工道具、山鹿市立博物館の山鹿市で作られた凝灰岩の石工道具、県文化企画課の民具収集資料などである。阿蘇溶結凝灰岩（以下、地元石工の言葉に倣り、「灰石」（はいし））が豊富に産出するほか、天草砂岩、島崎石など古くから活躍する石工集団が多く居た事実から^(注3)、ここ以外でも広く収集されているだろう。

熊本県下の石工道具二例

今回資料紹介するのは、本渡市歴史民俗資料館所蔵の天草下浦石工の道具と、本館の企画展調査の際、山鹿市大林鍛冶工場から収集させていただいた植木町正清の石工道具（一部、旧所有者未特定）の二例である。また、両者からの聞き取り調査の他に、和水町江田の小林石材からの助言も踏まえて紹介していく。小林石材は、主に「江田石」と称する灰石を生業にしてきた、地元の伝統的な石工さんである。特に山鹿市から収集した資料について多くの知見を得たこと、軟石系道具と硬石系道具の違いについてご教示頂いたことを先に述べておきたい。

今回この二例を紹介するのは、民具学、若しくは土木工学では、石材を大きく「硬石」「軟石」に大別していることから、それに合わせた報告を考えたからである。前述の石工道具を収集・展示を行っている県内の施設を見ると、この「硬石系」と「軟石系」の石工道具が入り混じっていることに気づく。民具は、その時代折々の社会背景や從事する個人の考え方などから様々な技術交流が想定されるものであり、当然と言えば当然のことではある。しかし、全国的に石工道具の悉皆調査を行っているところの成果^(注4)を見るとどちらか一方の系統に集約されている。この他県との違いは何か。緻密な聞き取り調査によって、確かな情報を未だ集約できていないことも課題と思われる。しかし、一つの仮説としては「天草砂岩」「島崎石」などの硬石系を利用する集団がいる一方で、軟石系である「灰石」を利用する集団も同じ地域で活動する故に起る熊本の独自色として捉える見方もできる。個々の先行研究との違いは、フィールドの広さの違いもあるので一概には言えないが、この仮説を基に両系統の石工道具が存在する地域として紹介することとした。但し、この二つの石工道具の系統から、多くの石工集団の

活動との関連性を追うという展開はあまり想定していない。各地の石工集団の登場、活躍時期、活動する内容は様々であり個別研究の蓄積を待つ他はない。あくまで、経緯で述べたような目的を念頭に置いて、二系統の道具が活躍する素地となる原石が熊本にあったことを民具から説明すること。このことが本紹介の第1の目標である。この知見から得られる装飾古墳を見る新たな考え方については別稿に譲る。この他、墓石の使用石材として一般的となつた御影石を主に扱う石工業とも区別するよう心がけたことも付記しておく。また、【 】書きのものは名称不明のため筆者が付したものである。その際の名称は、和田晴吾氏の分類（和田1983）に拠った⁽¹⁾⁽²⁾。また、石工の作業を指す名称について、聞き取り調査が及んでいないものについても同文献を参考に、（ ）書した。

下浦石工の石工道具

下浦石工の集団としての活躍、石工の作業工程等については別文献⁽¹⁾⁽²⁾を参照されたい。図示した資料9点は、何れも本渡市歴史民俗資料館で展示中のものである。資料は収集した際に、柄が全て失われていた由である。呼称・使用目的は同館展示説明に倣った。

- 1 【チョウナ】柄が装着していたが、展示の際のものである。横刃が両端につく。細工道具の一種で、壁面を平滑にする時に使う。両刃が僅かに錯交しているところから、左右の刃を使い分ける時は道具を使う向きを変えたようである。重さ2.0kg
- 2 ヨキ この種の道具は、刃側、槌側の両方を使う細工道具である。特に槌側の使用が顕著で、カドがネラレてしまって歪んでいる。槌側のカドはこのようになると、石の角を綺麗に落とすことができず、シボリ直さなければ使えないとのこと。重さ1.5kg
- 3 タタキ 刃はゆがみ、大きく反れている。やはり細工道具の一種である。重さ2.0kg
- 4 アラビシャン(中ビシャンと併記) 一般的には、仕上げ上に表面に目を作り化粧仕上げ時に使う道具であるが、使用の詳細は不明。角がかなり潰れており、良く使い込まれている。重量1.5kg
- 5 タテビシャン アラビシャンと同様な使用と思われる。やはり角が丸くなつておらず、良く使い込まれている。重量1.0kg
- 6 百枚(ヒヤクマイ) 10×10の目を作ったビシャンの一種。側面は反れ、表面は突出しており、使い込まれている。重量1.0kg
- 7 アヒルザキ 細工用のタガネの一種。重量0.5kg
- 8 チクサ 細工用のタガネの一種。重量1.0kg
- 9 角ノミ 矢穴キリ用とのこと。(山取り) 原石を切り出す際の矢穴を掘る道具。重量1.0kg

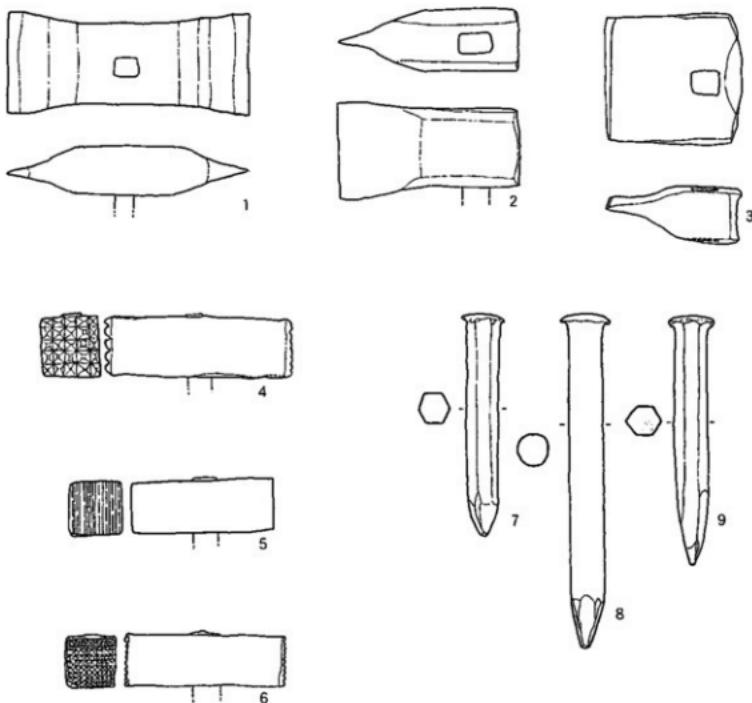


図1 下浦石工の道具 S=1/4

灰石石工の石工道具

灰石を専門とした石工さんは各地に残っているものの、その多くは兼業、若しくは廃業している。原因は様々あるが、一番はニーズの減少である。間知石・割石はコンクリートに、墓石は御影石に取って代わった。伝統的な技を持つ石工さんは減り、後継者もいない。何と言っても、石工道具を作ることの出来る鍛冶屋さんが地元にいない。知る限り現役の石工道具を作ることのできる鍛冶屋さんはただ一軒である。県伝統工芸館に展示してある一連の石工道具は、玉名市天水町尾田の鍛冶屋さんが後世に石工道具を作る技を残すべく、廃業を機に寄贈されたとのことである。この方のお蔭で、同館では軟石系の灰石専用の石工道具を真新しい姿で、しかも纏まった数を見ることができる。石工道具は分厚く、重い。その重みと鋼本来の鋭さが要求される。何も知らない筆者は、石工さんから無理を言って預かった石工道具を復元してもらおうと、熊本市内の鍛冶屋さんに頼んだ。ところが「できない」と断られた。「これだけの身幅の鋼を鍛える事はできない、人吉の山道具を作る鍛冶屋なら、或いは作ることができるかもしない。」石工の需要が減っている上、超硬質合金など特殊合金を仕込んだ道具が主流となれ

ば、町の鍛冶屋さんの需要も減るわけである。

紹介する14点の資料は、そのような事情の後大林鍛冶工場から預かった資料である。この資料は植木町正清の石工さんが使っていたものだが、その方が亡くなられたので引き取って頂いたものである。多くは、大林鍛冶工場で作って納品したもので、どこに納品していたかよく憶えているとの由である。道具の用語はその際の聞き取りによる。

- 10 ツルハシ 細工の際、大まかな整形・粗く平滑にする際（ムシリ）に使われる。尖った先端側と反対の槌側の両側を使うものであろう。先端は永年手入れを繰り返したためか、細くなっている。角はあまりネブラレでおらず、道具の整備をして大切に保管されていたものではないだろうか。柄は別のものを挿げ替えたらしく、穿孔が2箇所見られる。図左側、柄の持ち手のところを抉った加工が見える。重量2.4kg
- 11 ヤ 山道具で、石切りに欠かせない。大きさ、形状は使用する場所によって各種あるが、今回収集したのは1点のみである。ヤの形状、その変化については別稿で説明したい。ここでは、現在の軟石系道具にヤが含まれる事実のみ指摘するに留める。重さ0.5kg
- 12 タガネ 細工用か、詳細不明。断面が八角形のものは、木製の電柱に使われていたものを転用したもので、新しい道具のこと。大林氏は「石ノミ」とも呼称された。重さ0.36kg
- 13 タガネ 細工用か、詳細不明。重さ0.6kg
- 14 ソコトリ⁽²⁶⁾（矢穴キリ）の際、矢穴を整形するのに用いる。矢穴を観察すると、矢穴の底にこの道具の痕跡を見ることができる。重さ0.2kg
- 15 ヨキ(小) チュウヨキ、チュウヨ、或いはチュウノと呼ぶ同種の道具より一回り小さい。刃側と槌側両面を使う。刃側は、細工の際平滑にする仕上げに使用する。小林石材によると、このヨキの類は人に貸すことは特に避けたいとのこと。槌側の角がすぐ曲がり綺麗に角取りが出来なくなるのがその主な理由。大林良幸氏は「ハヅチ」とも呼ばれていた。重さ1.6kg
- 16 ハビシャン(小) ツルハシによるムシリのあと、さらに平滑にする道具。小林石材によると、御影石の道具の影響を受けて入ってきた新しい道具で、昭和20～30年代には菊池川周辺では使われ始めたのではないか、とのことであった。御影石のビシャン仕上げに対応した道具とのことである。4・5・6のような下浦石工が使う角ビシャンは、「石が煮えて使えない」という。「煮える」とは石の表面が脆くボロボロになるという状態を指す。前述の伝統工芸館の資料にはこの「刃ビシャン」が含まれておらず、新しい道具であるという話を裏付けるものと思われる。重量0.55kg
- 17 ハビシャン(大) 16と使用方法は同様、仕上げとして使う場合と、平滑に仕上げる一段階として使う場合がある。また、柄にベンガラが付着している。重量1.7kg
- 18 【セット】(小) 大きさから、細工用のタガネに使うと思われる。重量0.4kg

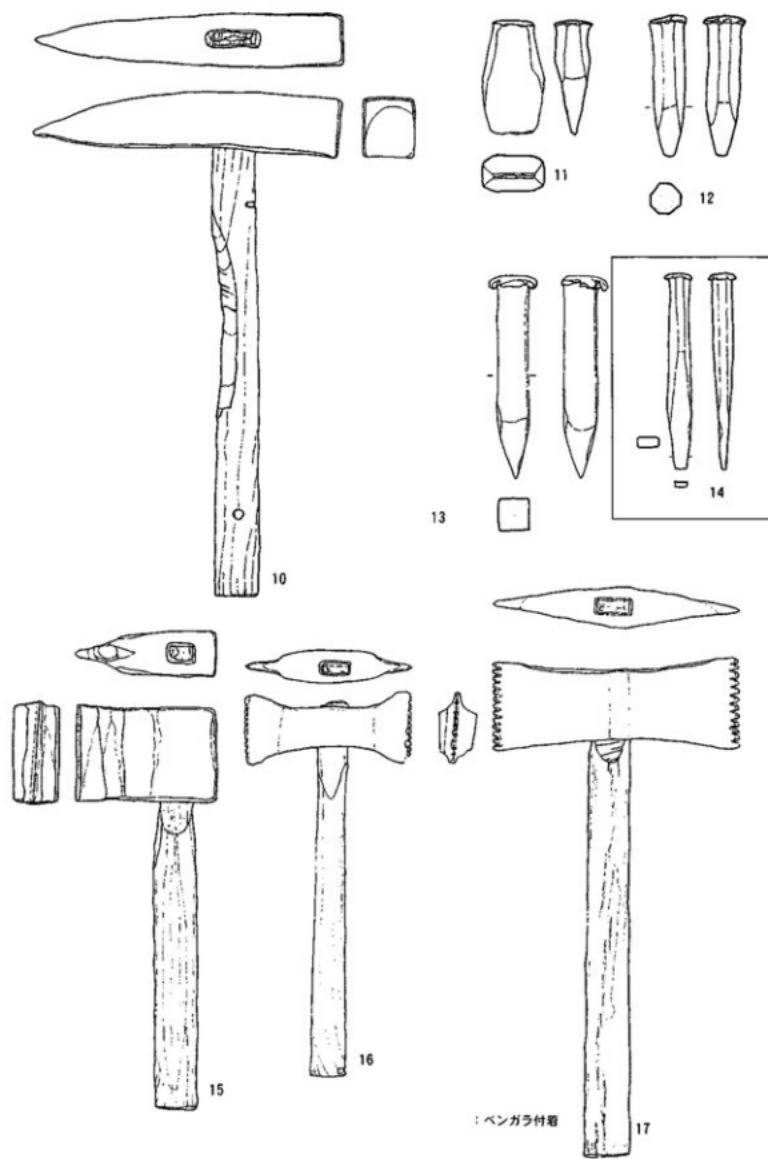


図2 灰石を扱う石工の道具 (1) S=1/4

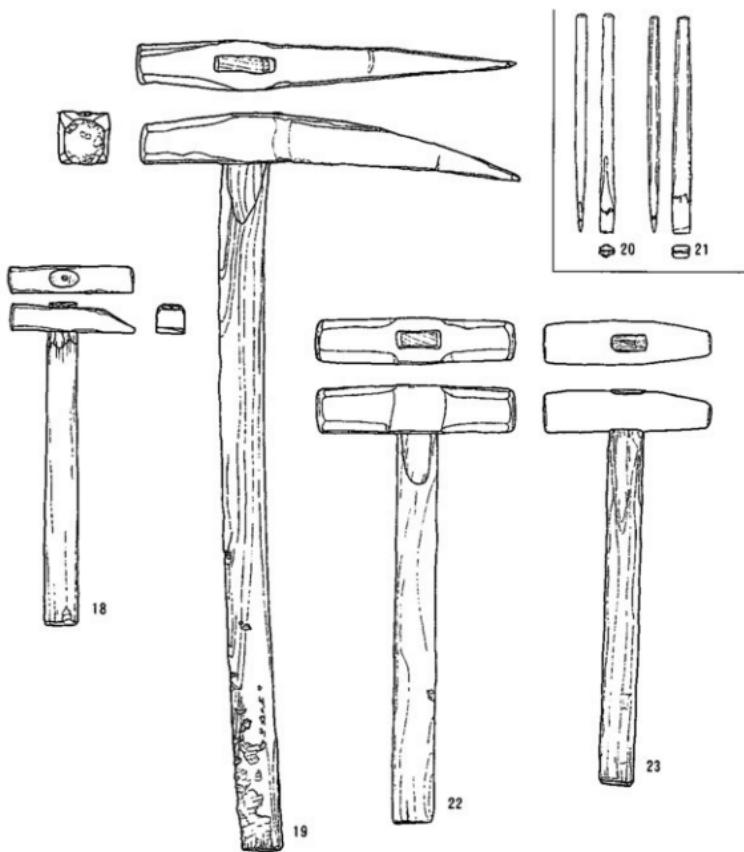


図3 灰石を扱う石工の道具(2) S=1/4

- 19 イワキリ(ツルハシ)⁽²⁷⁾ 大型のツルハシ。石工道具としては柄が長く細身である。矢を用いずに柔らかい石を掘るのに使うとのこと。いわゆる「掘削技法」に用いる道具か。柄には多くの敲打痕が残るが、はっきりとした理由が判らない。重量 2kg
- 20 タガネ⁽²⁸⁾ 細工用の石工が持つ道具。ヨキなどで平滑に仕上げた素材に、繊細な彫刻や名前などを刻む際に用いる。18などの小型の【セット】を用いると思われる。重量 0.2kg
- 21 タガネ⁽²⁹⁾ 細工屋と呼ばれる灰石の石工が持つ道具の一つ。20と同様な使い方と見られる。重量 0.25kg
- 22 【セット】(大) 細工用か。重量 1.6kg
- 23 【セット】(中) 細工用のセットか。重量 1.0kg

まとめ

両者とも、石工道具のなかでも細工屋の道具が多く含まれている。また、砂岩と凝灰岩という石材差と共に硬石系軟石系の違いを象徴する典型的な例と見られる。実際は、このような道具の基本的な構成をある程度保持しながらも、地域の様々な事情に応じていくつものバラエティに富むものとなっていると想定したい^[註10]。例えば灰石にも強溶結のものと、弱溶結のものがあり、その程度も場所によって異なる。このことは、灰石の産地にさらに固有の名称が付していることからも理解できる。異なる石質だからこそ、互いの産地の石には商品価値があり別の名称が付される。故に部分的に硬石系の道具が採用されることもあるだろう。

具体的な道具の差はツルハシの有無、タタキの有無、ビシャンの形状（角ビシャンか刃ビシャンか）、ヨキの身幅、タガネの身幅などの差が大きな違いであろうか。今後さらに調査を行い、（山採り）と呼ばれる原石取り出し、或いは切り出しについてもその差を調べたい。

単なる石材の差だけではなく、石質差に応じて作る商品を違え、或いは商品価値の差とする灰石の石工技術については、民俗学等の調査を丁寧に行うことを前提に、装飾古墳研究の一視点として見てみたい。

なお、本調査の経緯である企画展示「阿蘇の灰石展」については、江本直（当時学芸課長）の原案である。

また文末ながら、小林石材小林範美氏、牛島公良氏、並びに大林鍛冶工場大林良幸氏の御理解と御協力に厚く御礼申し上げたい、ありがとうございました。

〔註1〕 熊本県穴道町の「来待石」、香川県牟礼町の「牟礼石・庵治石」、兵庫県高砂市の「竜山石」など。

〔註2〕 熊本の「石工」を、民俗学的な調査手法により報告したものは、『熊本県の諸職 熊本県文化材調査報告第72集』(1985 熊本県教育委員会)のなかの「石工」の章(故原口長之本館初代館長著)などが挙げられる。

〔註3〕 〔註2〕参照。この他、下浦砂岩、下浦石工については、本波市歴史民俗資料館が企画展示を行っている。また、島崎石・島崎石工については神社明細帳(明治26年)の石神神宮の頃から窺い知る事もできる。

〔註4〕 例えば、『来待石石切場遺跡群』(1998 熊本県教育委員会 日本道路公团)『竜山石切場－竜山採石道路詳細分布調査報告書－』(2005 高砂市教育委員会)など。

〔註5〕 和田昭吾(1983)『古墳時代の石工とその技術』北陸の考古学 石川考古学研究会誌第26号の工具の図に掲った。

〔註6〕 12-13の機能を開き取る際、「ソコトリですか？」と尋ねたところ、「矢穴を掘るソコトリはこれですよ」と日の前で作っていただいた。15分程で出来上がっていた。

〔註7〕 小林石材によると、「炭坑用の道具ではないか」とのこと。転用品の可能性もあるが、改めて検証したい。福岡県八女市教委赤崎敏男氏によると八女の石灯籠を作る石工が石を掘り出す際、使うとのこと。

〔註8〕 20-21のタガネは、共に参考資料として提示した。18のような【セット】が存在するところから、この道具を使った石工は細工仕事も行っていたと考えられる。そこで、小林石材が所有していたタガネ2本を同一サイズで復元してしたものを作成した。

〔註9〕 小林石材によると、灰石専門の石工はノミを持たない。順和初期は、灰石の石工産業は隆盛を極めたようで、「細工屋」「問知石屋」といった専業化が進んでいたようである。もちろん、今日では山採りから細工まで一つの石工が行うケースも見られる。

〔註10〕 大林鍛冶工場で聞いたところ、熊本6・26水害や国道3号線建設(昭和28年頃)の際に、長崎・福岡・大分・宮崎から石工達が来熊したとのこと。今回紹介した灰石用の石工道具の一部は、横木町正清の方の道具で、昭和

28年頃、福岡から来られたと聞いた。角ビシャンを持つことなど、先祖代々灰石専門の石工を生業とする方の道具とは違いが見られる。昭和の代に入ってきた石工さん達の多くは、川沿いに店を構えたという。

上な調査協力機関・調査協力者（順不同・敬称略）

小林範美、牛島公良、大林良幸、和田晴吾、北垣惣一郎、永井 燐、朽津信明、藤原清尚、中村 弘、清水一文、北井利幸、高木正文、山下義潤、高木恭二、今田秀樹、本多康二、坂田和弘、前川清一、岡本真也、青木勝士、中村幸史郎、前田軍司、上塙尚孝、赤崎敏男、小林石材、大林鑛治工場、本渡市歴史民俗資料館、熊本県伝統工芸館、石匠館、山鹿市立博物館、高砂市教育委員会、牟礼町石の民俗資料館、八女民俗資料館

主要参考文献

- 金子久明（1999）『下油石工物語』※自費出版
北垣惣一郎（1994）『播磨國風土記』に見る石作りについて『風土記の考古学2 播磨國風土記の巻』同成社
熊本県教育委員会（1985）『熊本県の諸職』『熊本県文化財調査報告第72集』
鳥根県教育委員会 日本道路公団（1988）『来待石石切場遺跡群』
高砂市教育委員会（2005）『竜山石切場－竜山採石遺跡詳細分布調査報告書－』
牟礼町教育委員会・牟礼町石の民俗資料館（1998）『牟礼・庵治の石工道具』
和田晴吾（1983）『古墳時代の石工とその技術』（1983）『北陸の考古学 石川考古学研究会会誌26』

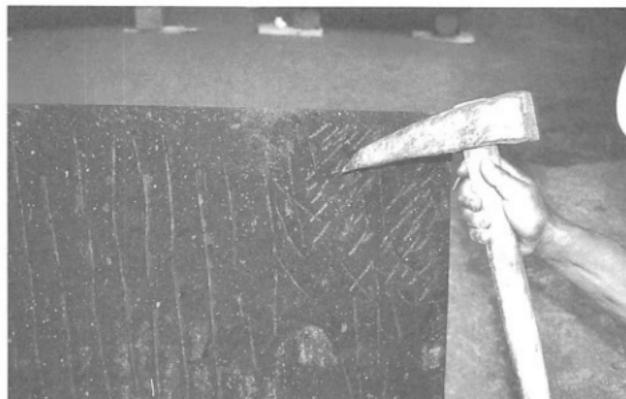


写真1
ツルハシを使って削る（コムシリ）
※石板左側がオオムシリの痕



写真2
ハビシャンで細かく削る

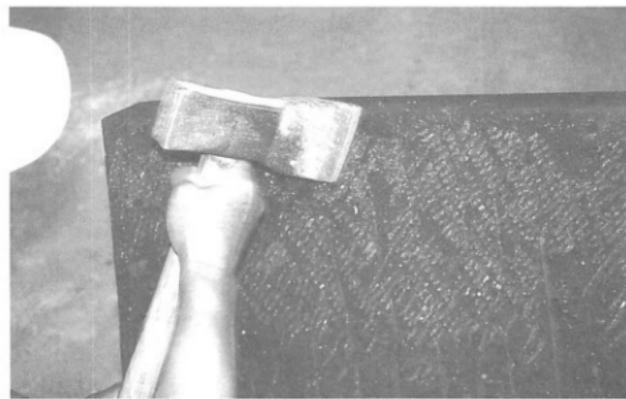


写真3
チュウヨで平らに仕上げる



写真4
チュウヨで仕上げる
様子



写真5
寸分の狂いなく平滑
に仕上げる

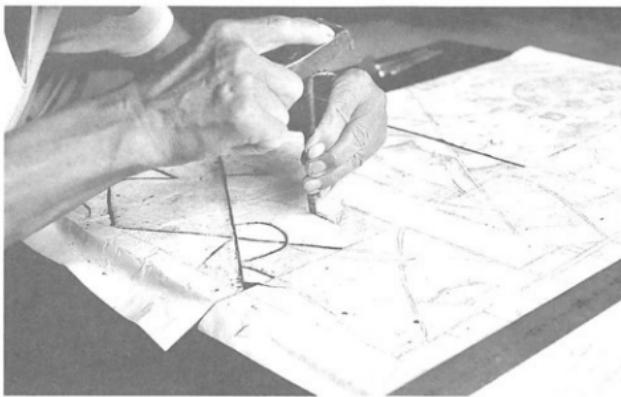


写真6
平らな石板を寝かせて
タガネで文様を彫る



写真7 玉名の石工道具（伝統工芸館蔵）



写真8 植木の石工道具



写真9 植木の石工道具



写真10 植木の石工道具

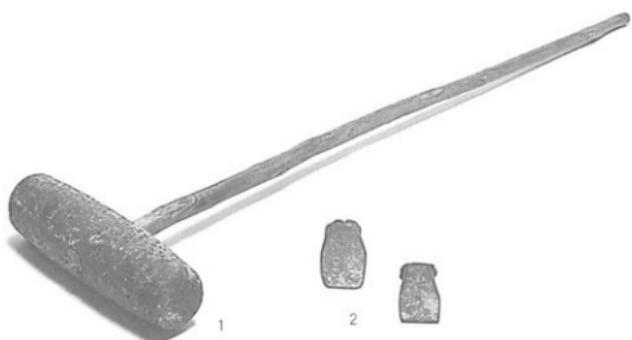


写真11 和水町江田の石工道具（原石切り出し用・個人蔵）

1 : ゲンノウ 2 : ャ (2)

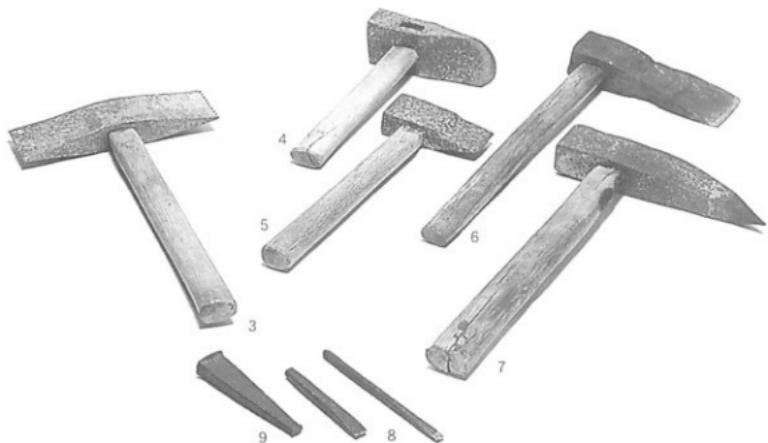


写真12 和水町江田の石工道具（細工用・個人蔵）

3 : ハビシャン 4 : ソコトリ 5 : ヨキ 6 : チュウノ 7 : ツルハシ 8 : タガネ(2)
9 : (エヌキ) 8のタガネを使う際、セットとして用いていた。

資料紹介 山鹿市鹿央町で採取された勾玉

池田 朋生

熊本県立装飾古墳館 主任学芸員

経緯

本資料は、平成17年12月22日、鹿央在住の方からのご厚意により本館に持ち込まれたものである。「個人で持っているより、館で展示活用して頂けるとうれしい。」という有難い申し出であった。

実はこの方からのこのような申し出は2度目で、その際は余りに状態の良いものであったため、丁重に辞退した経緯がある。本館は年間5万人の来館者があるなかで、体験学習として勾玉作りを体験する小学生も多い。本資料はその際の事前学習での教材としても貴重なものとなるだろう。

若干の考察

資料はいわゆる碧玉製の勾玉である。片側からの穿孔作業によって孔を開けている。図左上部、側面下部に僅かに瘤みが見られる。風化の差も見られず、剥離の末端で見られるようなステップがみとめられることから、製作時の剥離痕である。形態から古墳時代の副葬品とみてまちがいないであろう。

採取地である耕地は、資料を持ち込まれた方が耕作しているところである。昭和60年頃の耕地改良時、採取されたようである。朝烟に行くと道際に落ちていたので誰かが投げ込んだのかとも感じた由である。この場所は、広瀬訪原遺跡調査報告書によると、広瀬訪原遺跡の範囲内で、5世紀代の石棺が検出された場所もある。出土状況がやや不明確であるが、これら墓域内で見つかった副葬品とみておきたい。

採集地 山鹿市鹿央町広253-1

提供者 一 和典氏

引用・参考文献

村田勉編2004 広瀬訪原遺跡 鹿央町文化財調査報告書 鹿央町教育委員会

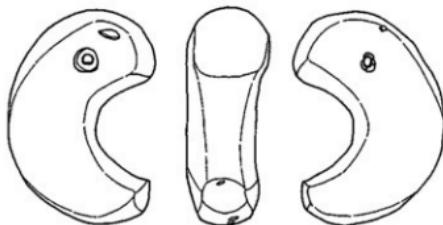
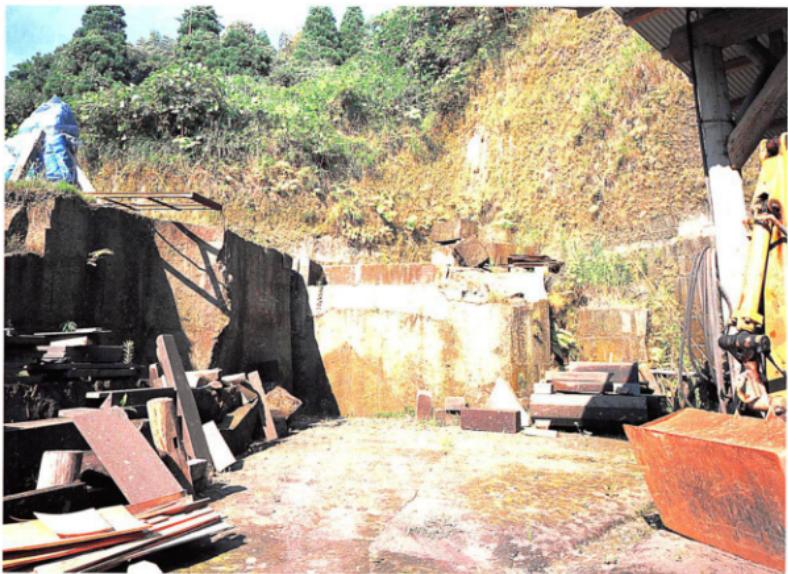


図1 勾玉 S=1/1

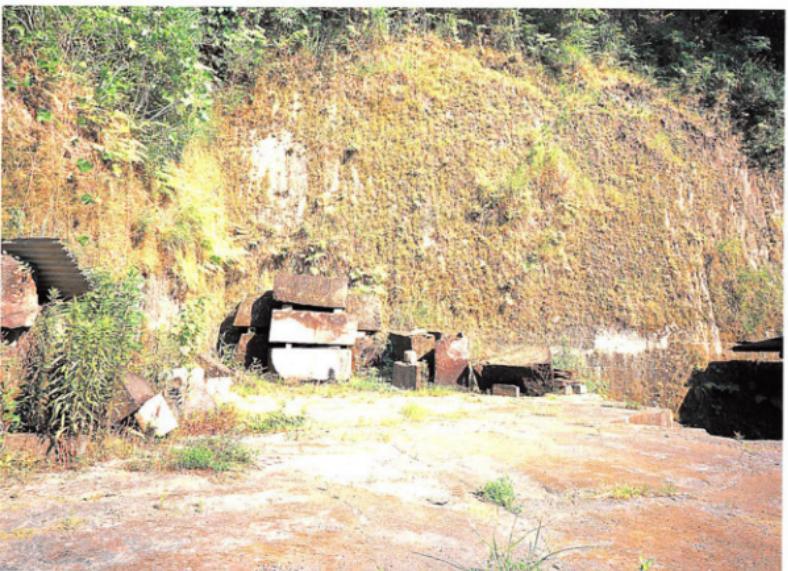


図2 勾玉采集地点(⑤) 『広謙訪原遺跡』より引用



江田石石切場 1

資料紹介 熊本県下の石工道具二例の参考写真 1



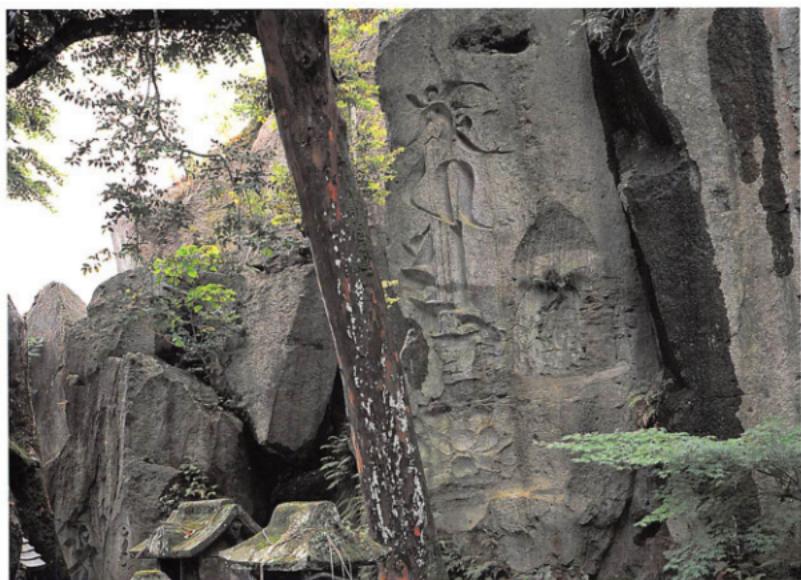
江田石石切場 2

資料紹介 熊本県下の石工道具二例の参考写真 2



岩原台地の凝灰岩露頭

資料紹介 熊本県下の石工道具二例の参考写真3



玉名市青木磨崖仏

資料紹介 熊本県下の石工道具二例の参考写真4



玉名市高瀬俵ころがし

資料紹介 熊本県下の石工道具二例の参考写真 5



資料紹介 山鹿市鹿央町で採取された勾玉

アラカシを食す

江本 直

熊本県立装飾古墳館 副館長

筆者は現在の行政区熊本県菊池市泗水町田島というところに生まれ、この土地で高校生までを過ごしている。そのころは昭和20年後半～30年代であり、当時の体験した生活を素描してドングリに係る状況の一端を記すことからこの報告のスタートとしたい。北田島と呼ばれる集落の南には菊池川の支流の合志川がなす水田地帯があり、北側は菊池台地西端部にあたる畑地帯と、その背後には小高い岡山と称される山林地帯が広がるといった自然環境にあった。付近には陣塚古墳群、田島廃寺、濡れ鏡音古墳、岡山古墳群、宮田遺跡、天徳寺等の遺跡があり、恵まれた歴史・自然環境のなかにあったと思っている。河川や椎持往還がとおり、六地蔵や近世の方牛地蔵の設置もあり交通の要所であることも物語っている。

家族で耕すいくらかの水田、畑地と雑木林があり、折々の農耕・山林作業を手伝った。そのひとつを思い出すと、秋の日、家の前の水田にネコボクに抜げての初の天日干しは大変だったが、中学生になるとカマス1俵を腰や右肩の上に持ち上げ運ぶことができ、それなり密かな自信もめばえさせてくれた。そんな中、いくつかの木の実との関わりを経験している。庭に植えられた甘柿、梨、イチジク、桃、ゆず、キンカン、栗などを食べた。小学生前の頃だと思う、梅雨の頃、柔らかくなつた梅の実を拾って食べ叱られたが、やわらかくて抵抗なく腹に流し込んだその味は決して悪くはなく、未だ怒られた意味がわからずにいる。ムラの公民館横の椋の実を食べ、小学校の枯れたエノキの実も小さいが甘みはあったと思う。南田島の糠泉と呼ばれる集落の畑の横に大きな桑の木があり紫の実がなつていたので、口を紫に染めてしっかり食べた。蚕もこれを食べたらよかろうにと、思つたりしていた。この桑の木の小枝はチャンバラの刀にした。皮を取り束と刃身に区分けができる真剣に思えた。家の前にある散髪屋の桶の下には赤いグミの木があった。雨の多いときにこれを吃ると腹をこわすとしきりと言われていたが人目をさけ、赤く輝く頃に、一気にイガイガの棘を凌いでほおばつた記憶がある。酸っぱく少し甘かった。子供ながら食べられる野イチゴと食べられない蛇イチゴの区分けはできた。椿やレンゲの花には僅かであるが吸うと甘い蜜があった。ブドウは植えられているところが少なく高級果物であった。甘藷は幹の大きいものと、こきび甘藷と呼ばれる2種類があった。鎌で美味しそうなところを切って厚い皮を口に運び歯でもぎ取って中身を食べた。堅いものは竹の皮を剥くような感じで、時折、唇を切るのが癪であった。部位により甘みが違つた。しっかりと噛んで鋸屑のようになったカスをべつと力一杯はき出すのは快感であった。幸いひどい欠食児ではなかったが生ガライモをよく食べた。常にポケットには肥後守の小刀をもつてるので、それで皮をむき少し喰い口をとがらせカリカリいわせて食べた。食べ過ぎると腹に虫がわくといわれた。焼きガライモは糊殻で時間をかけて焼くものと今でも思う。糊殻にはワラづつに入れ

られた納豆ができていた。空豆も生で食べられる。あまり大きくなると堅いがほどよいところを知っていた。スイカだけではなく塩を紙に包みポケットに入れキュウリ畠を荒らしたことがある。雑草であるが、スイカの根はすっぽく、つばめ（草）はクチャクチャいわせてガムのように噛んだ。葦の根も食べられると聞いたが土を掘ってまではと思い、実行していない。ニッケの木の根も食べられることを知っていたが、田島廃寺の近くの家の庭に1本、ムラの中にはこの木だけしかなかった。ことわって掘る勇気はなかったし、持ち主の家の子供がうらやましかった。みんなが根を掘るので、この木はなかなか大きく育たないと大人の話を聞いた。

親戚の山林に椎の木があることを聞いたので、薄暗い木立のもとで恐る恐る椎の実を拾って帰った。勿論そのまま生でかじることができ、あまみがあり美味しいかった。厚手のフライパンをプロパンガスのコンロにかけ、いって食べることになった。皮が黒から茶色に変わり甘みが増して旨かった。先が尖ったのは小さく、大きいのは丸っぽかったと記憶しているし、火にかけたのは後者の方だった。冷えると堅くなるので温かみがあるうちにほおばった。畑に青桐の木が数本植えられていたが、枝が折れたりしてうまく育っていないかった。大叔父のメジロ取り名人から1羽もらって軒下にかけていたが、その竹籠にひらくち（まむし）が入り、メジロを飲み込みふくらんだ腹で竹籠からでれなくなっていたことがある。火箸などを持ち、数人の大人が真剣に処分していた様子は今も鮮明に覚えている。

ドングリは芯をつけてまわして遊んだが、水さらしや灰汁抜きについてを体得する機会には恵まれていなかった。床下に穴を掘り、拾ってきたドングリを埋めてドングリ虫を作ることを聞き何度かやった。丸く大きいクヌギの実からは白い大きい虫ができた。ゼイタンのまわりや、隣の家の井戸の回りにしかれた板材の下には綺模様のはいったミミズが一杯で、町の店から買う餌虫とが合志川での魚釣りの餌であった。ドングリ虫では主にハエやヤマソが釣れた。そして、この餌は食いつかれても壊れにくく、何度も同じ餌で釣り上げができるので高級の餌と認識していた。虫より小さそうなハエゴがかかってくるのには笑わせられた。天蚕糸、釣り針、鉛、浮（ダラの木を削って作ることもあった）、浮き用ゴム、竿は町の店で買った。ちなみに餌虫やミミズにはハエやヤマソのほかフナ、鰯、スッポン、ゲギュ、シビンチャなどが掛かってきた。このほか覚えている川や井戸の魚にはフナゴ、ドンカッチョ、ヤマドジョウ、カマツカ、まれにカワエビ、カニなどがあった。カワニナが多く虫が乱舞し、家の中まではいってくるのもいた。竹ぼうきをもってホタルとりに小学校近くの川までいった。このカワニナやホタルと、カマツカやカワエビなどは除草剤の散布が始まるとすぐにいなくなつたと思う。鯉やウナギを釣り上げた記憶はなく、鮎はすんでいなかった。ムラの中には川魚を捕って商いをしている人がいた。（病気になると）亀を注文し生き血をのまれ、なんともつらい生臭さであつたので、この人を恨んだことがあった。タイワンドジョウは2～3度は食べた記憶あるが、虫がいると言うことで小学高学年頃からは全く食べなくなつた。普通のドジョウが冬とれること

もわかった。驚くことに先の魚取り名人は井手の水が流れていない、小さな沼状の湿地で、黒く朽ちた木の葉や泥をのけて土の中からたくさんドジョウを捕りだしていた。水が流れていないのでドジョウが生きているのが不思議であった。夏、井手で流れの悪いところにはビルがいて血を吸った。吸い付いたビルを足からはずし、ビルに小枝を口から突っ込んで、逆むきにして復讐していた。2種類いて、大きいのは馬ビルと呼んでいた。こちらはおとなしく復讐に及ぶことはなかった。海の魚を食することは珍しかった。自転車で植木方面からの魚売りが来た。鯨、鰐や鰐がほとんどであったが、時折の鯛の煮付けの骨はお湯を注いでスープとして飲み、目玉の近くが一番うまいこと、太刀魚の骨は掘り炬燵の炭火で焼きぱりぱりと食べるように教えられた。

このように素描してきた姿が古く縄文時代や古代の生活に直接的に重ねられるものではないものであろうが、自然の産物とのかかわりの中で人々が永く生きてきた姿の、その幾ばくかの残映としては捉えられるのではなかろうか。

大学では研究室の周りが照葉樹林の木立の中にあり、恵まれた環境にあったが、ドングリについて深く考えることはなかった。むしろ、黒く光る黒曜石や安山岩の石器に興味をひかれてそちらのことを追いかけていた。

時を経て曾畠貝塚低湿地遺跡の発掘調査を担当し貯蔵穴群に出会った。通称ドングリビット群である。この調査の報告を提出して20年の歳月が流れたが、当時の映像は折々に鮮明に映し出されることがある。当時、多くの先生に教えをいただき懸命にドングリの貯蔵についての報告をなしたと思うが。

「曾畠式土器を伴う貯蔵穴群の検出は圧巻であった。現在残されている貝塚本体から約100mの距離を持ち、比高差も約4mあり、海辺の海拔約3.5m上に営まれていたものである。58基を数える貯蔵穴の内容物は1基にクヌギが見られるだけで、イチイガシが殆どであった。地下水が通るような場所を選んで構成されたものと判断でき、虫除けと硬化を防ぐための施設と考えておくことができよう。」との解釈をしていた。しかし、今回の作業によりこの解釈に一部不安を覚えている。

それはクヌギには虫が確かにしているのが多いが、アラカシに虫はほとんど付いていないからであり、すべてのドングリには当てはまらないようである。落ちて雨水や天日にさらされると、皮に一条の亀裂がはしりそこから黒ずみ、腐敗が始まっているので、腐敗防止や新鮮さを保つためとも考えられる。皮をむいたり、製粉するのに硬化を防ぐことは肯首されようし、その都度必要分を取り出して製粉したのであろうなど思いだしている。

製粉して水さらしをすると灰汁抜きがもっともよくできる。製粉するには、剥き身で作業するのがもっともできあがりがよい。剥き身にするのは大変な作業であるが、効率よい剥ぎ方がある。水につけていたものを取り出し陰干ししたり、うすい天日にしばらくさらすと、皮に

一条の亀裂がはしる。その際にはビシーという音を静かに発するものや、元気よく跳ねるものを見られたりする。一条の亀裂が入ると、ここから両手の親指の爪をあてると容易に剥げる。皮は2から3枚になって剥き身がきれいに取り出せるのである。しかし、天日にさらしすぎたり、エアコンなどで乾燥が進みすぎると、一条の亀裂が入らず全体が少しずつ萎み、皮に萎めがでてくる。こうなると叩き割るしかなくなる。叩き割るときには凹石などのようにドングリを固定するものが必要になる。今回はラジオベンチの凹みと叩き石を使った。その場合、剥き身が崩れない程度に加減を覚えることが大切であった。

落下したドングリを見ているとマテバジイなどアカが少ないものが腐りが早いように見える。踏み荒らされたり、腐食しないためには落ちて間もないときに素早く拾い貯蔵することがもつとも良く、遺跡で見られる貯蔵穴が一番利にかなっているように思えたりする。今回製粉できたものは冷凍庫で保存しているものがあるが、製粉したものは乾燥を進めても生身であり腐食は避けられない。冷凍庫のない状況では食べる分だけをその都度取り出して製粉作業を行うのが最も適切だと気づく。加熱して製粉したり、食品にすると日持ちが悪くなる。やはり生の状態で製粉したものが風味がよく新鮮味があるし、また、細かな粒状が少し残る程度の製粉の方が感触が良い。それぞれの好みであろうが味には幾分渋みがある方がよいとの指摘もある。この渋み具合は水さらしの加減で調整が可能であった。水さらしで出る茶色のアカの澄み具合で計れるが、一連の作業には相当の手間がかかるものである。できあがったものは結構な高級食材であると思いたりしている。

体験広場で気づくこと

常緑樹は新芽の前に落葉したり、台風などで痛手をうけたり、落ち葉は秋だけのものではなく一年中落ちているように感じたりする。常緑樹はあまり変色せずに落ちる。種類によっては二年がかりで実ができるものがあるといわれるが、雌雄があり実がならない木があるとも聞いたりした。クヌギのドングリ虫は木に実がついている時から入り込んでいるともいわれる。10年間の間には台風で倒木したものが2本あったし、大きく枝が折れたのも多い。クヌギには樹液があり、大きな蜂や金文が樹汁のところにやってくる。クワガタやカブトムシが少しいる。そして、ヒゲ虫などの害虫が大量に発生する。

実のなる表作と裏作などがあるようである。ドングリは10月ごろから落ちはじめマテバジイークヌギーアラカシの順番である。特に夏場には紫外線を遮り体験者達に絶好の木陰を提供しているが、大きくなりすぎて適当な枝落としや剪定を行う必要もある。春を迎えると芽が出てくるが、座んだりして湿気があり、あまり踏み固められていないところや、敷石の間などから芽を出しているところを見た。しかし、大量に落ちる実の中で腐ったりせず芽を出す率は意外と低いように思える。クヌギの成長が著しいが一番折れやすい。ドングリ虫を作るため拾われる方が時折見られる。

体験広場：小木を植えて約10年がたち、大きく成長している。ドングリはクヌギ、コナラ、アラカシ、マテバジイ、シラカシと図鑑をもとに職員で鑑定をくだしている。



体験広場（H18. 1月撮影）

落ちているドングリ（アラカシ）

バケツにいれ水につけ、浮いたものなどを除去して選別ができる。2～3日水につけると最もは真っ黒になり、それを水を切り陰干しすると次第に褐色に変化し割れてくる。1条の亀裂がはいる。剥き身はきれいな黄色である。空気に触れると次第に黒の斑点ができ広がり黒くなってしまう。





皮むき作業と剥き身

陰干しをして皮に1条の割れが入ったものは親指の爪を使ってきれいに剥げる。下の写真はきれいにカワハギができ黄色の剥き身で、渋皮もきれいにとれた最も良くできた例である。皮がついたままで製粉すると身と皮をわけるのに苦渋する。剥き身で食してみると強烈な渋みである。

皮がついた状態で加熱したり、水さらしたり、あく水を加えてもあくが取れることはなく、製粉であく抜きするのが一番である。

床にはネコボクを敷くのがよく合う。近くの農家から提供頂いた。石臼などしっかり固定ができるで作業がやりやすい。

石臼と杵で製粉する。最初は飛び散らないようにゆっくりついていき、途中で何度かメッシュで漉し、つきと濾しの作業を数回くりかえす。

縄文時代使われているものではないが碾き臼も使ってみた。乾燥したもので小粒のものがよく製粉できる。細かい製粉が可能である。ドングリの場合、剥き身で水分があると途中から詰まって碾けなくなったりした。力ずくで引くのではなく、緩やかに、時計と逆回りで碾くのが一般的でコツのようである。大きさや目の具合により、大豆や豆腐の製品づくりに使い分けられたものであろう。地域により変わるのであろうが県北では凝灰岩でつくられているのが多い。凝灰岩も目が詰まつたものとやわらかいものなどがある。



杵と臼での製粉作業





↑ 磨き臼と水さらし作業 ↓





水切りと乾燥作業

うわずみを何度も替えながら数日水さらしにしたものを、水切りする。水切りには目の細かい木綿布を使用した。水切りを終えて陰干しする。黒色のドングリ粉は乾燥が進むにつれ色が変化し、きれいな黄褐色になる。



ドングリ粉完成品



ドングリクッキー



チジミづくり

チジミの製作

腕自慢の職員の協力でドングリクッキーとチジミを作った。

ドングリ粉と卵だけでも焼いて作れる。いろいろな材料を加えて味を出す場合、やまいも、蜂蜜、牛乳、鰹節、食用油、にら、小麦粉、黒さとう、塩などを使うとよい。実験では器具もトースターやガスとフライパンなどを使って行ったが、体験食の場合は石焼がふわわしい。

クッキーとしておやつによく、チジミは大人の酒のつまみにも適する。さわやかで清楚な味である。渋みが少しあったが特徴的かもしれない。試食した方々の反応も結構良好であった。

今回は1本の木から500グラム×6回で3キロぐらいのドングリ粉ができた。

体験学習の縄文クッキーづくりや縄文～古代食メニューの参考にできようし、アラカシ以外種のドングリでの実験を続けると新たなドングリ食や粉食に関する知識や見解が出てこよう。

2006.2.23

使用した道具など

一輪車、竹簾、焼き肉用金網、ひしゃく、はけ、金しょうけ、新聞紙 フライパン トースター 砧 金製鍋、木綿布、メッシュ 石臼 杵 スpoon 竹箒 松葉かき バケツ 灰こしき 収きうす 木槌 コンテナ アルミホイル 包丁 まな板 貝杓子 ネコボク



古事記セレクション100年企画委員会を実行しています

17 教委 熊古

⑥ 002

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 研究紀要 第6集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県立装飾古墳館研究紀要 第6集

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日